目が覚めたら東方の世界にいた

マチュピチュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目が覚めたら東方の世界にいた

【Ｎコード】
Ｎ８３２１Ｗ

【作者名】
マチュピチュ

【あらすじ】
主人公がが目を覚ますとそこははるか上空。とりあえず人のいるところに行こうと神社に降り立ったら落ちてきた東風谷早苗さん。そこから主人公はどう生き残っていくのか　注意、この話は一応前作『目が覚めたらシンジになってた』の続編です。ちょっと前作も読んどいたほうがいいかもよ

1．まずは守矢神社に行きましょう（前書き）

ノープラン小説ほど辛いものはない。憑依は何故かなかったことになった！
続かなくなったらごめんよ！前作の『目が覚めたらシンジになってた』の読者様。
ご愛読ありがとうございぇやした！

1．まずは守矢神社に行きましょう

「あれ…ここって……」

俺が目が覚めたら……

「なんで俺は上空を飛んでいるんだ？」

俺が目が覚めた場所は何の変哲もないただの上空。
服装もジーパンに黒い服と、目覚めるにはラフすぎる服だ。

「まぁ……なんで俺は浮遊しているのか詳しく問おう」

びゅうううううううううううううう

「空よ、何か答えたまえ」

「あややや…こんなところに外の人間がいるとは…」

「あややや…こんなところに天狗さんがいるとは…」

「あややや…」

「あややや…」

あややややや…まさか俺が幻想入りするとは…

しかも空を飛べるとは……

「と言うわけさ」
「どういうわけですか」

ふっふっふ…何故かボロボロの射命丸、貴様には分からんか。
この俺の高ぶりを…高ぶる…あふれる…

「つまり俺は最強オリキャラとなることが出来たのだよ！！ふぅはははは！！！
わが世の春ですよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

背中からちょうちょを出して俺はどこか宛のないたびへ出かけた。
え？さっきの射命丸？分子レベルで分解されてたような…

と言うわけで降り立った場所は守矢神社（暫定）
大きな鳥居が神社の門前にあって、そこには小さな建物、

その本堂っぽい場所には賽銭箱が用意されている。
……多分守矢神社だろう。

とりあえず神社に入ったら手を洗って…水を飲んで…吐き出すんだっけ?飲んじゃったよ。
まぁいいか。とりあえずお参り。上で何故か爆音みたいな音が聞こえるけどまぁいい。
上を見上げると何故か光の玉が見えるがおまいりが先決だ。

「あ…でも賽銭ないな…」

まぁなしでもバチは当たらないだろう。
とりあえず1例して鐘を鳴らして手をパンパンと叩く。

「えーっと…これからも健康で学業にに専念できますよう「そこ!!危ないわよ!!」へ?」

突然上から声をかけられて上を向く。
そこにはとんでもないスピードで降下して来る緑の頭…

それをひらりとかわした。

「いったぁ～…」

高高度から降下して来た少女…と呼ぶべきなのかこれは。
まぁそれはいいとしよう。それは何事もなかったように頭を抑えながら起き上がった。
復活の呪文でも使ったのかと言うくらい早く起き上がる。
バケモノかコイツ。

「……えーっと……参拝者ですか？」
「実を言うとそうなのである」
「あの…今の状況理解していますか？」
「お恥ずかしい事この上ない。だが理解できる事はある」
「？」

困惑する記憶の中、これだけは理解できると保障できる。

「俺は誰だ？」
「全然理解してないじゃないですか！！」
「いや待て、ただ一つ理解できる事はある。俺は大学生、童貞だ」
「何故そこを言うんですか！？」
「そこを言わずしてどこを言う」

そう、俺は名前、住所、電話番号を全く覚えていないのだ。
後ろの2つは別に問題ない。だが名前が分からないのは致命的だ。
どうする、どうすんの？どうすんのよ俺！！

「とりあえずここに居ても危険ですから神社に避難してください！！」
「それはありがたい」
ボロボロの早苗さんに手を引かれて神社の中に入った。
ちなみに上空では蛙が巨大な蛇を出しながら巫女と戦っていた。
何故危機感がないかって？それはな…禁則事項です♪
「俺はやっぱり東方の世界に来てたのか…」
早苗さんが着替えるから俺は別室に案内された。

と言う事は殺気分子レベルで分解されたのは本物の射命丸。
そして俺はリアルに空を飛んでいたのか。

まぁそれはどうでもいい。
今の状況だ。恐らく今俺がいる状況は風神録の時代だ。
そんなところで俺は参拝してたのか。俺すげぇ。

まぁそれもどうでもいい。
それにしても俺は何故空を飛んでいたのか。
と言うか俺は一体誰なんだ。いや、中二病とかそういうのじゃない。
俺はリアルに誰なんだ?自分が大学生である事とある程度の外の知識。
それくらいしか頭に残ってない。何か大切なものを消されたような気がする。
なぜか頭の片隅に渚カヲルが笑っているのが映るのも気になる。

「まぁそれも別に気にする事ではない」

じゃあ今からどうしましょ。
恐らく上空にいる霊夢さんが勝ったら俺はどこに行けばいい?
まぁそれも追々考えるとしよう…

「……あれ?」

もう考えることねぇよ…

1．まずは守矢神社に行きましょう（後書き）

こぼれ話

レミリア「あなたは今までに食べたパンの数を覚えているの？」

大学生　「１３９６０枚辺りだったような気がする」

2．誰かと意気投合しましょう、宿無しは詰みです。（前書き）

マインスーパーやったら大体2手目でドカーンしてしまう。何でだ？

2．誰かと意気投合しましょう、宿無しは詰みです。

しかしこの腹立つくらいに晴れ渡ったこの空。
その平和の空に何故こんな光の玉が飛んでいるのか。
というか何故早苗さんは喧嘩を売ったんだろうか。

「……まぁ別に俺には関係ないか。いきなり戦えって引きずり出されるわけでもないし」

縁側に出て諏訪子（暫定）と霊夢（暫定）をの戦いを見物することにした。
双方とんでもない量の光の玉を出しながら必死こいて戦っている。
石でも投げ込んだらどうなるんだろうか。
…いや、確かスペルカードは遊びみたいなものだったな。他者の遊びに横槍は危険だ。
俺だって学習するときはする。

「まぁ別に俺に被害がなければどこで何をしてもかまわんよ」
「気楽なんですね…」
「ん？早苗さん？」

何時の間にやら俺の隣に新しい巫女服姿の早苗さんが座っていた。
……今までにこんな瞬間をあこがれなかった人間はいるだろうか。

「そういえばどうして私の名を？」
「あれだ、情報屋ではないが一般人レベルの情報は得ているつもりだ」
「へぇ、外の世界の情報屋…」
「ではないことは確かだ」

「じゃあ誰なんですか？」
「俺の名は大学生とでも呼んでくれ」
「大学生ですか（なんという精神年齢の低さ…）」

オイ早苗。今目をそらしたな？大学生と聞いて目をそらしたな貴様。
弾幕しようぜ…久々にキレちまったよ…と言いたいところだが
弾幕など撃つ能力があるなら是非頂きたいものだ。
故に俺は諏訪子と霊夢の戦闘をひとしきり見た。結局霊夢が勝った。

「ん？」

何か落ちてきてる。何かこっち来てる。
だが避けられないわけではない。

「ほっ」
「ふべっ！！？」

俺の能力はひらりとかわす程度の能力…ではなかろうな。

「…！！」
「……」

向こうで説教されている早苗さんファミリーを横目に俺は再び茶をすする。
説教の内容は…まぁ簡単に言えば二度と悪さするなよ。である。
それをやたらと噛み砕いて説教するものだから長引くのである。

「……あれ？俺空気じゃね？」

今気付いた、俺完全に空気だ。
だからと言ってここで帰るわけにはいかんだろうに。

仕方ない。少しまとう。

「分かった？幻想郷にもルールってもんがあるの」
「はい…」

「じゃあこの話は終わりね……で?そこで寂しそうにお茶をすすってる人は誰?」

霊夢が指差す方向には、目を細くして和んだ顔をしながら茶をする青年が居た。

少なくとも霊夢よりかは年上の青年である。

「彼ですか?参拝客の『大学生』と言う方です」

「あー…確か私が落ちてきたのを見事にかわした少年」

「誰だ…?」

4人がまじまじと大学生を見つめていると彼はそれに気付いたようだ。

慣れない様子で空中に滞空しながら近づいてきた。

「なんだね諸君」

ふわりふわりと練習もかねて浮遊しながら近寄る。
その様子に早苗さんが笑顔で迎え入れてくれた。

「改めてようこそ、守矢神社へ。参拝にこられたんですよね？」
「ん～まぁそんな感じかな？何せ目が覚めたらいきなり空中に居たもんだら」

とりあえず今までの経緯を簡単に説明した。

「なるほど、ところでその大学生とやら、私の名を知っているな？」
「えっと…ああ、八坂神奈子伍長！」
「何だその微妙な階級は…」

紫色の髪に２４０ｍｍキャノン砲、間違いない。ガンキャノンだ（ゲンドウ風）

「確かあなたは軍神でしたね？いや、軍神じゃないとそんな口調じゃないだろ」
「いかにも、私は軍神として知られている」
「ふむ…（まじまじ…」
「な…何を見ている」

ふむ…このスタイル、この性格、このオーラ…軍神って事は事実のようだ。
と言う事は…

「神奈子さんって狙撃兵？それとも突撃兵？ふむ…工兵もありえる

な…だが衛生兵はありえん。
いや…豪快さから感じ取るにヘリガンナーかな?」
「私は今で言う衛生兵のような存在だったな」
「へぇ~以外ですね!どんな功績を?」
「知りたいか!最初はそうだな~」
「「「「……」」」」

次の日、昨日俺は神奈子さんと意気投合して酒をのみ合う仲となった。
で、早苗さんと諏訪子さんも快く俺を受け入れてくれる事となったのである。

「大学生さん!おはようございます」

朝、俺は少し早めに起きると、外で早苗さんが神社の掃除をしていた。

「お～元気そうだねぇ…俺は二日酔いで死にそうだってのに…」
「未成年なのに飲むから悪いんですよ」
「うっせ、これでも今年の冬に２０になるんだよバーカバーカ…うぇっぷ…気持ち悪い…」
「今の台詞アスカイメージしてませんでした？」
「何故ばれたし」

聞いたところ何故か早苗さん、第３新東京市に行ったそうな。
バカじゃないのか？何が量産型が股間蹴られてただよ。寝言は寝て言え。

「で？分社は取れなかったんだろ？どうするのよ」
「そうですね…今日は歓迎の宴会をやるそうですから…大人しくしましょう。大学生さんは？」
「俺？俺はだな……食って寝る！」
「太りますよ」

大丈夫、３桁行かなかったらまだ大丈夫だ。
ちなみに健康チェックでは若干太り気味らしい。おー怖い怖い。

「冗談だ。とりあえず弾幕が出せるように訓練するよ。
日ごろの練習でゴッドフィンガーは体得したが…流石にそれだけじゃどうにもならないだろうに」
「どことなくシンジさんに似てますね…大学生さんって」
「お前の中のシンジはどんなシンジなんだ？何か心配になってきたぞ…」

2．誰かと意気投合しましょう、宿無しは詰みです。（後書き）

こぼれ話

大学生「1ね」
諏訪子「2」
神奈子「3だ」
早苗　「よ…4「「ダウトォォ!!!」」」ひぃ!?」

大学生「チッ…ミスったか……5」
諏訪子「6!」
神奈子「7」
早苗　「は…「「ダウトオオオオオオオ!!!」」」ひゃあ!?」

3．慣れてきたらなれてきたで色々苦労するものです（前書き）

と言う題名だが苦労の要素などない。

3．慣れてきたらなれてきたで色々苦労するものです

「…ふむ…」

弾幕訓練が思うように行かないから上空を飛びながら思考する。
まぁ弾幕の事なの二の次でずっとこの世界観の事について考えてただけなんだが。

「風神録は終了…事実上紅魔郷異変はもう終わったのかな…永琳の暴走も終わり…」

恐らく次は博麗神社の局地的大地震、使徒（天子）襲来。
いや…その前に霊夢と魔理沙とレミリアと咲夜さーんが月に行くんだっけ？

「…月か…俺も行きたいな～…あ、でも酸素ないからいけないか」

でも行きたいな～…月面探査機でもいけない場所なんだろ？
めっちゃ行きてぇ。テンション上がってきた。

「ま、戦闘力がないと行けるものも行けないな、どこかで戦闘術でも教わるか」

すい～っと妖怪の山を降りた。

「ふぅ、身近に戦闘術を教えてくれる人なんているのかね…」

とりあえず俺は博麗神社に向けて飛ぶ。
困ったときは情報屋の霊夢さんだ！
それ以外誰も信用ならんって分けではないが、何分交友度が少ないものでして。

「お？あれか……随分と寂れた神社」

それなりの鳥居にそれなりの建物、それなりの賽銭箱。
で、その付近で皿やらなんやらを並べて洗っている巫女。

「普通ああいうのって巫女がやるものなのかね…確か今日は宴会とかどうとか…」

まぁ幻想郷に来て2日目だ。交友が少なくても仕方ない。
とりあえず手伝ってやるに限るかな。

と言うわけで博麗神社に降り立った。意外にも整備されている。

「おっす霊夢さん。1日ぶり」
「あーアンタね。素敵な賽銭箱はあっちよ」
「誰かは分かるかな？」
「大学生でしょ」

ふむ、記憶力はそれなりにあるようだ。
だがこれは分かるかな？

「お前は昨日食べた飯の種類を覚えているか？」

「昨日食べてないけど」
「予想の斜め上の答えが出てきた」
「もういい？これから忙しくなるから帰って」
「はい、帰らせていただきます」

この人はだめだ、俺は帰る。

「こ…この国はあんな奴が守ってて大丈夫なのか……」

これはまずい…実にまずい…幻想郷の平和の鍵が死んだらえらいことになるってのに

全くその平和に感謝してない。ってか異変解決してるんだったら少しは稼ぎはあるだろ…

ま…まぁ気を取り直して、どこかに行くべきところはないのか…人里での戦闘は禁止、魔法の森は瘴気が怖い。紅魔館はどこにあるのか分からない。

「だが……ここでどうこうしている訳にはいかん…とりあえず戦闘術を覚えるのだ」

『私のお賽銭箱がああああああああああああ!!!!!!??』

「ん?どうしたどうした」

博麗神社で異常発生?一体なにがあった?

と言うかどんだけ響くんだ霊夢の声

まぁとりあえず行って見よう。

「どうしましたか霊夢さぁぁ「月光蝶である!!」ぁぁ(ジュッ」

また何かが黒歴史の被害にあったような気がする…まぁ気のせいだ。

「ないぃ…ない…ないぃない…」

突然の賽銭箱の消失、それは神社にとって死活問題でもある。
ふらりふらりと鳥居にもたれて力尽きてしまった。
このような姿はドライな霊夢にしては珍しい事態だ。

「こんなに探してもないなんて……」

と言うかそんなに馬鹿でかい賽銭箱が見当たらないなど、
盗まれた以外に考えられないのだろうか。
こう見えて意外にも霊夢と言う存在、バカなのかもしれない。

「もしかして「賽銭箱がない？盗まれたんじゃね？」そうそう…盗まれたんじゃないか…ってね」
「なら犯人を殴り殺すしかないか…」
「殴り殺すどころか恨み殺してやるわよ……ん？」
「おっす」
「…うぇ！？大学生！？帰ったんじゃないの！？」
「馬鹿でかい声を聞いて飛んできたのさ☆」

で、その声を聞きつけてやってきたのがこの俺、大学生だ。
ニタニタしながら霊夢の後ろに立ってたのがビビられたのか思い切り霊夢がのけぞった。
結構面白い。

「話は聞かせてもらった」

霊夢の前に立って人差し指を額に当てる。

「お前さん……もしや盗難事件なんじゃないですか？」
「な…」
「そもそも盗難というものは相手の見ていない隙を見て物を盗む。これは当然ですね…？」

どこからともなく取り出したペンとメモをトントンとして霊夢に説明する。

「え…ええ」
「つまり、です。このような開放的な空間、つまり公共の場であるこの神社で盗難。
それも獣道を通らないといけないと言う非常にずさんな設計の「ずさんは余計よ」神社。

…盗みやすい環境ではありませんか…？セキリュティを強化していますか？」

俺のセキリュティという言葉に聞き覚えがないように耳をかしげる。

「と言うわけで、俺もその犯人探し、手伝おうではないか！」

「はっきり言うとあんたじゃ役不足よ。帰りなさい」

ｏｒｚ

「さなぇぇ…霊夢に虐められた～…」
「大学生が女子高生に泣きついてどうするんですか！！！」

ぐしゅ…しゃなぇ…

「で…？弾幕は撃てるようになったんですか？」
「弾幕……弾幕？そうか弾幕か！！弾幕だったんだな！！」

俺は生気が戻ったように立ち上がり、神奈子さんを連れてくる。

「な…なんだ？」

迷惑そうに外に出た神奈子さん。まぁ振り払う様な素振りを見せない限り拒否はしていない。
なら多少無理を頼んでも大丈夫だろう。

「神奈子さん！僕と夜の組み手をしてくださ（ピチューン　…冗談です。組み手して」
「組み手だと？冗談はやめておくといい」

軽くあしらうように帰ろうとする神奈子さん。それを引き止めて精一杯の威圧を込めて言う。

「俺は本気ですけど何か…？真面目にしてくれないとホワイトグリント作りませんよ？」
「う…（なんという殺意…いや…妖気…？）……いいだろう…ならば組み手だ」
「よろしい、ならば戦争だ」

ぶっつけ本番だけど大丈夫かな…

3．慣れてきたらなれてきたで色々苦労するものです（後書き）

こぼれ話

マチュ「ちゃんとプランを練っているかって?結末すら考えてなかったんだ」

シンジ「まぁドンマイ！」

マチュ「いずれこの小説も最期の時を迎えるのだな…」

4．弾幕程度は撃てるようにしましょう（前書き）

適当に結末を今考えているところです。
それまで文体が安定しないかもしれませんがご了承あれ。

4．弾幕程度は撃てるようにしましょう

実を言うと自分も勝てるかどうかは分からん。実質勝てないんじゃね？

とか思うがそれを感付かれたら勝負など受けてくれるはずがない。

大体勝てる勝負など昔からないのだ。だから当たって砕けろ、と言うことわざも出来上がる。

故に今回俺は神奈子さんと組み手をやるに当たって不安な事が多々存在する。

勝てねぇだろ…これ…

「月光蝶はほぼ発動しないに等しい、ゴッドフィンガーは当たる気配なし…」

この状況…まさしく鬼畜！！

ほんでもって今すぐ断りたい。謝りたい。

だがこっちから頼んだマッチメイク、ここで断ったら男として廃るだろう。

しかし神奈子さんのこの威圧感、本気（マジ）だ

「準備はいいな」

「お…おう！人間の熱き魂フィールド！略してＡＴフィールドをとくと御覧なさいな！」

やばいっす…この感じ今までにない感じです。

この状況…別府でうちわパクッて親に説教喰らう直前の空気と同じだ。

いや、下手したらそれ以上の修羅場。神奈子さんマジお母さん。

半ばヤケクソでファインティングポーズを取り、神奈子さんに合図する。

「ほう…中々見込みのある男だ。いざ！」

「尋常じゃないくらい」

「勝負！！……って何故逃げる！！」

妖怪の山

さぁ始まりましたオンバシラファイト。

まず逃げている俺の周りに半端じゃない数の御柱が設置される。

「お前の言う熱き魂…持ってそうには見えないが見せてもらおう」

「失敬な！俺にだってプライドの一つや二つくらいはある！！」

「とてもそうには見えないが…」
「ならば見せてやろう！！いや！見せれたらいいな！！」

と、自分でも驚くくらいのスピードで神奈子さんの間合いを詰め、ブレーキがきかずタックルをする形となった。

「ううう右京サンフランシスコアタァァァァック！！！！？」

右京サンフランシスコアタック、
つまりサンフランシスコ並みのスピードでタックルをすることだ。
え？分からない？辞書で調べなさい。

で、それをいとも簡単に避けられた俺はフェアウェイキープできず草むらにＯＢとなった。

「神奈子貴様ぁぁぁ！！！ドライバーは飛距離が高いから注意しろと何度言ったら！！」
「……（真面目に組み手をする気があるのか…）」

オイなんだそのあきれ返った顔は…

「俺にだって意地がある！それを思い知らされるまで…神奈子！！」
「！」
「俺に攻撃するな」
「その意気や良し！……へ？いや断る！！」

守矢神社

「神奈子…大丈夫かな…イライラの挙句殺してないかな…」
「大学生さん……馬鹿な事してませんかね……」

大学生の事をまだ知りきっていない早苗と諏訪子。しかしこれだけは分かる。
『あれは馬鹿だ』と言う事。しかし馬鹿だからこそ放っておけないのは、
彼女らのやさしさと呼べるべきものであるのか、ただ単に惨めに思っているだけなのか。
その辺は全て謎。居候を始めて2日目の人物は馬鹿なのかどうかも定かではない。

「お?動きがあったみたいだね」

「喰らいやがれ!!局地戦用マスタースパーック!!」

木の間から出て、細いレーザーを撃つ。
すると着弾地点から反射するように太いレーザーが出現した。
ちなみに当然のように撃っているが即興で弾幕を撃ってんだぞ。
こっちはハンデで背負ってんだよ。なめんなよボケ。

「小癪な!エクスパンデッド・オンバシラ!!」

レーザーから逃れた神奈子が大量の御柱を放つ。
御柱って飛ばすものだっけ？

「甘い！真ん中は比較的避けやすい！！お札は当たらなければどうと言う事はない！！」
「避けただと！？」
「隙あり！！あら避けられた…あぎゃっ！」

背中に柱が落ちてきた。だがまだまだやられるわけにはいかん！！

「大学生は伊達じゃない！！！」

地面に足から着地し、めり込む。
だが俺はまだ潰されてはいないさ。

「ふぬうううううううううううううびゅ…」

いえ、潰されました。

夜

「…中々やるじゃないか大学生」
「それほどでもないっすよw」
「外の人間が私と対等に戦えるとは知らなかったぞ」

諏訪子さんに救出された俺は現在神奈子さんと一緒に治療を受けている
俺の怪我は背骨のひび、肋骨、腕、足の裏など。計12箇所。
まぁ1日寝たら大体治るだろう。

対する神奈子さんはかすり傷による怪我のみだ。
後勘違いして股間攻撃した時に出来たのけしからん所へのアザ。
こればかりは土下座したら許してもらえた。

「しかし…開幕早々攻撃するなとは…危うく従うところだったぞ」
「あれは従うべきでしょ、常識的に考えて」
「あれが常識ならどれが非常識だ」

ＨＡＨＡＨＡと笑いあいながら今日の成果を早苗さんたちに報告する。

「結局弾幕のきっかけは気合って事ですね」
「そうだ、気合が大きいほど強力な弾幕、冷静になるほど的確な弾幕が放てる。
博麗の巫女のように冷静にそして的確な弾幕を放つことが出来る者や

お前の様に力任せに範囲を利用した攻撃をする者もいる。
私も新参だからよく分からんがな」

「魔理沙さんって知ってますか？彼女も大学生さんと似た攻撃をするですけど、
さっきのマスタースパーク、オレンジ色でした…一体どこで？」
「即興」
「そうですか」

諦めの境地に入っていることが一瞬にして理解することが出来た。
地味に凹んだ。

「ま…まぁ！それほど大学生に才能があるってことだよ！そうへコむ必要はないよ」
「諏訪子様マジ諏訪子！お礼にこのホワイトグリントを覚醒初号機カラーにしてやろう！」

と、おもむろに早苗さんの塗装グッズをとって色を混ぜ混ぜしてちゃっちゃと塗装する。
わずか３０分ほどで完成した。

「どう？」
「「「５万円で売ってください」」」

ちなみに私、コレクターなんですよ。
なので多少のプラモ技術は持っています。

次の日、霊夢が紅魔館に情報収集をするという情報を射命丸から得た。
お礼に分子レベルで分解した。

4．弾幕程度は撃てるようにしましょう（後書き）

こぼれ話

チルノ「大ちゃーん」

大学生「ん？」

大妖精「何？」

5．紅魔館は意外と近場にあるものです

分子レベルから再生した射命丸からもう少し情報を搾り出す。
万が一逃げようと言うのならば俺がマスパで吹き飛ばすのみだ。
はっきり言ってミンチより酷い状況になるだろう。

「それは事実かね？射命丸文」
「ええ」
「嘘ついたら分解の刑だからな」
「それは勘弁してくださいよ～あれ結構痛いんですよ？」
「ならもっと痛いことしてやろうか？」
「勘弁ですううううう！！」

んな！？逃げやがった！！

「俺流マスタースパーク！」
「いぃぃやあああああああああああああ！！！」

オレンジ色のレーザーと共に射命丸も戻ってきた。
レーザーが通り過ぎる時に射命丸の襟首を掴んで再び同じ場所に戻す。

「ほいっお帰り」
「只今戻りました～……あれ？小町さん、また昼寝ですか……ガクッ」

しかし意識を失ってしまっては情報も集まらない。
とりあえず背負って紅魔館の付近…紅魔館ってどこだ？

なら博麗神社に行く事にしようか。

と言うわけでやってきました博麗神社。

「よっと十日間の旅。ふぅ～ついた」
「あら、またアンタ？その荷物は何よ」

今回は情報収集に行くためか若干昨日より冷静な霊夢さん。
心なしか先日よりきりっとした表情だ。
いや、できればこれが普通の表情であって欲しいものだ。

「いや～まぁ後ろのオプション装備はほっといてだ。俺も少しばかり紅魔館に用がある」
「……私も今から紅魔館に行くけど、用って何よ」

う…適当な口実を作ったのは悪かったかな…まぁいい。

「ああ、門番の手伝いにでも行こうかと思って。
神奈子さんと対等に戦える俺ならバイトにでもなるかな～っと思って」

俺が適当な口実を伝えると、突然霊夢さんの表情が一変した。

「はぁ!?アンタあいつと戦ったの!?ただの外の人間が!?私でも苦労するのよ!?」
「人は努力を有せず目標を超える者もいる!」
「確かにあんたは努力する姿なんて一度も想像できないわね」

一体何故そこまで驚く必要性があるのか。
まぁそれはいいとしよう。

「で、どうするんだね?俺も連れて行くのかね?」
「お賽銭箱を見つけ出すには文も出来れば欲しいけど、この状態じゃね…」

神社の鳥居の下でヤムチャしやがって状態になっている射命丸。

「マスパしやがって……」
「一体何が……」

しぶしぶ心配になりながら俺たちは紅魔館へ向かった。

紅魔館、そこは…やたらと赤い洋館である。
妖怪の山のふもとに立つ洋館だ。
…うん、じつは目と鼻の先にあったんだ……
霧に隠れて見えなかったんだね。

「山の神社に住んでるのに何でここが分からなかったのかしら」
「明らかに初見殺しの位置に立てるからだよ」

霧の湖のほとりにある紅魔館。
大体霧に隠れて湖は確認できたが紅魔館までは分からなかったんだよ。
そうだよ、池とでも思ってたんだよ。悪いかバーカバーカ。
紅魔館と妖怪の山はあまり接点がないと勘違いしてたんだよーだ。

「さて、ジャンプを顔に乗せて寝ている中国は放っておこう、今週号だが放っておこう」

門番の美鈴さん、週間少年ジャンプを顔にかぶせて爆睡している。
とりあえずジャンプを取って気持ちよさそうに寝ている美鈴さんの鼻の頭にわさびを乗せた。

「うきゃあああああああああああ!!!!!!!!???」
「ｏｈ、予想以上のリアクション」
「だ…！だだ…誰ですかぁぁ！！！ああああ！！！鼻がっ！！ぅぅぅぅ…」

さっきの寝顔とは一変して般若の形相になりながら湖に向かって走り去っていった。

「流石の俺もあの評定されるとは思わなかったよ…寝相に突っ込まれたミサトさんかよ」
「…ミサト？魔理沙がよく言ってたわね」
「まさかあいつもシンジ菌に毒されてたのか…幻想郷も末期だな…」

とりあえず敵は撃退。
ここで俺と霊夢さんは分かれることとなった。
霊夢さんは地下図書館へ、俺は咲夜さんかレミリアさんを探しに行く。

死んでもフランには近寄るな、みたいな事を言われた。
まずフランがどこにいるのかすら分からん。近寄るに近寄れないだろ。

「まぁこういうときに限ってそういう部屋に行っちまうんだよなぁ…」

大体こういうのってよくある行動なんだよな……
と考えていると突然俺の周りに妖精がこれでもかと言うほど現れた。

「しんにゅうしゃだ」「しんにゅーしゃ！」「しんにゅうしゃ！」

ヤバイ、見つかった。
だが落ち着け、相手は子供の頭。うまくだませば何とかなる。

「お勤めご苦労様、向こうでチルノが呼んでたぞ」
「「「チルノちゃーん！！」」」

いっせいに外に駆け出した。
ほっこりした。

「侵入者発見」
「アゲッ」

しかしその直後、俺の頭に鋭利な刃物のようなものが突き刺さった。
意識が緊急脱出してどこかへ飛んでいってしまった。

「いってて…だれだよいきなり後頭部にプログナイフ投げつける輩は…」
「咲夜…貴女って人は…」
「わわわ！！私は一切そのような強力なナイフなど！！」

俺が目を覚ました場所は、日の当たる庭とは一変、真っ暗な部屋に縛り付けられていた。
で、俺の目の前にいる人物は…
発光剤でも着込んでいるのかと言うくらい真っ暗な部屋なのに良く見える吸血鬼、
レミリア・スカーレット隊だ。その隣は十六夜咲夜。ＰＡＤ長で有名な人だ。

「で…なんで紅茶じゃなくてホットミルクを飲んでいるのだレミリアよ」
「突然紅魔館から食料が消えたからよ。紅茶の茶葉も一緒に」

食料の消滅、賽銭箱の消失…ん?どこかで聞いたことがあるシチュエーションだ。
ん～…どこぞの同人アニメでのイベントだったような……忘れた。

「どう考えてもそりゃ異変でしょ、気付かないのか?ゆかりんの陰謀だろどう考えても」
「「その発想はなかった」」

もう駄目だこの幻想郷……

5．紅魔館は意外と近場にあるものです（後書き）

こぼれ話

早苗　「ニュータイプで最強はやっぱりカミーユさんですね」
大学生「メンタル的概念から考えると以外にもシロッコかもしれんな」
諏訪子「操縦技能から考えるとアムロだね」
神奈子「他者のコミュニケーションがうまく行っているジュドーだろう」

大学生「最強のリンクスは？」
３バカ「「「有澤隆文」」」

諏訪子「最強のロボットってなんだろうね」

早苗　「ガオガイガーでしょう！」
神奈子「天元突破グレンラガンだね」
大学生「ラッシュバード」

神奈子「逆に一番弱いパイロットはなんだろうか」

大学生「カツ・コバヤシだろＪＫ」

早苗　「シンジ『くん』」

諏訪子「うーん……オメガ１１？」

6. 門番は案外楽しいかもです（前書き）

実際の門番はつまらんことこの上ないが。
やったことないけど。

6．門番は案外楽しいかもです

どうも、大学生です。何とかレミリアさんに霊夢の暴れ許可をいただきました。
俺たちが来たことはとうに知っていたそうで、いずれ魔理沙と射命丸も来ると予知した。

「へぇ～…本当に運命とか見えるんだ…ってことは…」
「あなたの運命は何故だか見えないわ」
「いや、外の世界の運命を問おうかと思ってだな…」
「……」

会話が続かなくなってしまった。結局俺は咲夜さんと交渉し、霊夢が納得して戻ってくる間、美鈴さんと共に昼寝…もとい門番をすることになった。

と言うわけで門番役を買って出た俺。いや、暇つぶしだが。

「では、よろしくお願いしますね。大学生さん」
「あ、おうよ。任せなさい」
「ワサビの件はもう気になさらないでください。昼寝していた私が悪かったんです」

美鈴さんがめちゃめちゃいい人だ。
これで昼寝癖がなかったらまさに模範的といえる。

「じゃあ美鈴、大学生、よろしく」
「お任せください」
「了解しました！咲夜中尉！」

しかし今日は秋だというのに小春日和を軽く越し、小夏日和だ。
くっそ暑い。そんな中、美鈴さんは涼しい顔をして立っている。
俺は近くを飛んでいたチルノと仲良くなって隣に座りながら一緒に門番をしている。
そこの類は友を呼ぶって言った奴、表でろ。

「しっかし…今日は一段と暑いな、お前は大丈夫なのか？」

「あたいはへいき！だって最強だもん！」
「ほぇ～…最強ね…」

涼をとるためにチルノの頭をわしゃわしゃとなでる。
するとチルノは「エへへ～」と俺の手を掴む。
これまた涼しいのだ。凍傷というのは都市伝説だったようだ。

「しっかしまぁ…ほんとにだれも来ないよな～…」
「紅魔館に人が来るなんてバカくらいしかいないしね～」
「お前が言うな」

ちらっと美鈴を見ると何時になく真剣な顔をしている。

「いいえ……気を感じます…敵襲ですよ！！」
「なんだとやぇ？」
『どいたどいたーーーーーーーー！！！魔理沙様のお通りだーーーーーーーー！！！』

目を凝らしてみると、高速で飛ぶ機影を一機確認した。
黒い機体、茶色の装甲…ドワッジ！？
いや…黒い服に茶色の箒…魔理沙か！！

『そぉら！！そこの門番！！邪魔だ「はーい、ここは通行止めよ」ふげっ！？』

木の棒を魔理沙の飛行コースに向けて横に倒す。
すると見事に引っかかって、箒だけが屋敷に侵入する結果となった。
つまり一本のバリケードに激突して魔理沙は門前払いとなったのだ。

「速さが足りすぎたな、クーガー」
「紅魔館の厄介主を門前払いとは…すごいです…」
「スゴいね大学生！」

あれ？これ…ドヤ顔していいのかな…
とりあえず気絶している俺の嫁をまじまじと眺める。

「いっててて……なにすんだよ！！」

お、起きたようだ。神主曰く１０代前半…ってことは１４歳辺りだろう。

つまりエヴァのチルドレンの資格あり。まぁそれはどうでもいい。
おい、何で今俺の顔を見て「ゲ」って言った。俺がそんなにキモイか。
３０回以上は言われてるわボケ。

「コイツが噂に聞いた魔理沙か……思った以上に気象の荒そうな子だ」
「人を見た目で判断するなぁぁ！！」
「ほら、もう怒ってる」
「ぐ…ぐぬぬぬぬぬ……」

やはりその辺は子供だな、子供ってどうも気性が荒くて身勝手なところがある。
まぁそこで可愛いか可愛くないかが決まるが、おてんばな奴も悪くない。
欲しいものをあげて、十分に遊んだ後、疲れた表情になる。
そこでその子の隣に座って髪の毛をなでてやるのだ。
するとトロンとした顔になってもたれかかるように眠る。
そこが可愛い。

しかし物静かであまり抵抗を覚えない子供もまたよろしいのだ。
抵抗を覚えなくてポーッとしているところで興味を示すものを見せる。
すると少し目を見開いて顔を赤くしながら欲しい、という態度を見せる。
そこで物をあげると、ニパーっとした表情でその物をまじまじと見つめる。
それもかわいい！

「だが、魔理沙が一番可愛い。そのことに関する異論は認めない」

「何だコイツ……いきなりニヤニヤしだして…気持ち悪いぜ…」
「褒め言葉か？」
「断じて違う」

魔理沙も俺の隣に座る。

「そういえばお前は…大学生だっけ？山の神社の新人って奴」
「いかにも」
「…バイトか？」
「んなわけねぇだろ、居候だよ。宿無しだかんな」

「ふ～ん」と魔理沙が相槌を打つ。

「で、なんでその居候が紅魔館に来てるんだよ。バイトだろ」
「ね～美鈴、ばいとって何？」
「分かりませんね…」

生粋の幻想郷人にバイトという言葉は伝わらなかったようだ。

「ばっか、霊夢さんの手伝いに行こうとしたら捕まったんだよ」
「は？お前霊夢の知り合いなのか？」
「あぁ、そうだが」
「へ～…あの巫女が他人と友達関係になれるのかね…
一緒に作業するだけでも空気が重くなりそうになるってのにあれはドライな綾波だぜ…」

オイ魔理沙よ、綾波って何だ綾波って…妄想も大概にしろ。

「俺の心の広さは海並みだぞ？」
「お前は少しは話す人を選んだほうがいいと思うぜ…っと、さて帰

るか」

ちらっと時計台を見て腰を上げる。

何だ、帰るのか…

「待ちな、魔理沙よ」

「ん？どーした？」

そりゃお前、幻想郷に居るからにはこれは譲れんよ。

「弾幕勝負…やらないか」

「うほっ…いい気迫…」

6．門番は案外楽しいかもです（後書き）

こぼれ話

もしも紅魔郷異変のときに大学生が居たら

大学生「ウヲッフランかよぉ…」
フラン「お待たせ」
大学生「待ったことなどないがな」
フラン「ねぇ、あなたって人間？」
大学生「人間とカデゴリズムされる人間はそう多くはない、
　その中の人間という種族にカデゴリズムされる人間の中の
一人、
　それが俺だ」

フラン「つまり人間なんだね、だましてないよね？」
大学生「人間を偽るってどうやってやるんだよ」
フラン「飲み物にする」
大学生「カレーは飲み物だときいたが人間は飲み物だったのか…
　大食漢なのか？コイツ…こえぇよ…着やせしてんのか…
　いやいや…ここは話題を変えるんだ。フラン！」
フラン「何？」
大学生「外に出ようではないか！」

フラン「だめだよ」
大学生「何で」

フラン「豪雨でいけないもん」
大学生「傘をさせ」
フラン「太陽が私を虐めるんだ」
大学生「虐め返せ」
フラン「蒸発しちゃうよ…」
大学生「なら俺が意地悪な太陽から守ってやろう、少しずつ慣れるんだ」
フラン「お嬢様に」
大学生「俺から言ってやる」
フラン「……本当に？」
大学生「本当に」
フラン「……ありがと…」
大学生「例には及ばん（まともに戦っても殺されるだけだしな）」

フラン「……じゃあ明日ね！大君！」
大学生「おう！じゃあの！」

和解ＥＮＤ

7．弾幕ごっこに心理戦は必要ありません

「さぁ早速始めましょうか！！！」

美鈴、何故そう張り切っている。

「お前が言い出したことだぜ、後悔するなよ」
「俺が言い出したことだ、後悔はするがお前に後悔はさせん」
「いい度胸だ、制限時間は３０秒。スピード勝負だぜ」
「良かろう、最初の一手で勝負が決まるのだな」

何故か魔理沙も熱くなっている。
俺が勝負を仕掛ける相手は何故こうも血の気が激しくなるのだろうか。
普段温厚…いや、まだよく分からないがやさしそうな神奈子さんも何故か熱くなってた。

「まぁそれもそれでいいとしよう…いいか？」
「いつでも」

双方構えのポーズをとる。
俺は棒立ちだけど。

「よろしいですね…？では…始め！！」

美鈴がわくわくしながら開始の光弾を放つ。
ってか審判とか居たのか。

バトル形式は非想天則とかの格ゲーみたいな感じだと思ってればいい。
しかしさっきも言ったとおり制限時間は３０秒。可及的素早く決着をつけるのが普通だ。

「だが俺はその常識を覆す。あえて言おう！俺は動かん！」
「ほらっ！動かないと防戦一方だぜ！」
「この戦い、先に動くほうが負けとなる」

ひたすら弾幕をなるべく動かずに避ける。
はたから見れば俺が圧倒的に不利な状況だろう、だが…
俺は平和的に、しかしパワー重視に戦うスタイルだろう、多分。
その俺から見ると、こっちの方が有利だ。

「……」
「な…何で動かないんだこいつ…」

２０秒近く無行動で、しかし攻撃に当たらずにいると必ず相手も不審に思う。
それが異変解決という正義的位置に立つ霧雨魔理沙ならなおさらだ。

心は腐っても根はいい奴だ、それが一方的な戦いをしているとなると罪悪感も芽生える。

「ならこれでおしまいだ！！マススパーク！！！！」
「アッー！」

と思った俺がバカだったようだ。

「むきゅ～…」

真っ黒になって門前に帰還した俺。
やっぱ心理戦は無理だわこれ。

「結局何がしたかったんだお前は」
「最後の5秒辺りで勝負をかけようと思ったんだが」
「甘い、弾幕はパワーだぜ。心理戦など通用するわけないだろうが」
「ですよね～…」
「じゃっ私は帰るぜ、またな！どう見ても小学生な大学生！」

プッツンっと俺の中で何かが千切れた。

「んだとクソ餓鬼ィィィ！！！」

「ん？っひにゃあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ドドドドドドドカーン、と怒りに身を任せて放った8連マスタースパークは

俺の嫁であるがたまに腹が立つ霧雨魔理沙を見事迎撃したのだった。

いいね、怒るって。すっきりするよ。

「あー酷い目に遭った、美鈴さん、今の俺の勝利でいいの？」

「う～ん…咲夜さーん、いいんですか～そんなに有給貰ってもぉ～…」

「…んぅ〜…すぃ〜…」

寝ている美鈴さんに腕枕されながらチルノが寝ている。
まぁほほえましいのかうらやましいのか…ぱるぱるぱる。

「まぁ可愛いから許す」

流石に起こすのもかわいそうだから再び定位置に戻ってボーっとする。
しかし2〜3日間のあいだに俺は凄い体験をしたものだ。
というか幻想郷ってこんなに毎日のように異変やら色々と起こるのか？
リバティーシティーよりタチ悪いぞこれ。

「しかし…俺って東方始めたの何時ごろだっけかな…昔はキモヲタがやることだ〜とか言ってたが
こんの数年間でじっくりしっかり染まったものだ…独り言も多くなったし」

中3辺りだったかな、ちょっとだけ、ちょっとだけって軽はずみにやったら
キターーーーーってなって魔理沙たんwwってなったんだな。
お前らもそうだろう（チラッ

「さて…そろそろ霊夢さんも帰ってくるだろうな。どうしようか」

こうやってチルノの頭をなで続けるのもいいが…俺にも帰る家があるからな。
もう既に……しかし爆音がきっかりなくなった…まさか…

「霊夢はもう帰られましたわ」
「ですよねーw……あんのクソ巫女がああああああああああああ！！！！」

急いで博麗神社に向かったが賽銭泥棒を探しにどこかへ行ってしまった模様。
腹いせに博麗大結界を少しいじくったらスキマからペンペンが飛んできた。
ちくせう。

やっとこさの思いで守矢神社に帰ってきた。
結局帰ったときはもう既に日は暮れ、射命丸が鳴き、リグルが光る。

「あーただいま～っと…こう見えて結構暇だったんだぞ～早苗さ～ん」
「なら少しは手伝ってくださいよ…ぜんぜん信仰が集まらないんで

すよ…」
「こう見えて俺は忙しいんだよ、さっきも異変解決に一肌脱いだのだよ」
「異議あり！あなたの証言は矛盾しています！！」
ちっ…ムジュンを暴かれたが嘘ではない。途中までは異変解決していたのだ。
だが最後辺りは暇で暇で仕方がなかった。おｋ？
「甘い、だが俺は謝らん！と言うわけで明日はお前の手伝いをしてやろう！！」
「少しは謝罪という言葉を覚えてください！！」
「一応知っている！だが使わん！」
「使え！！！」

「仲がいいね、あの二人」
「だが、あの大学生、妖怪化が進んでいるようだ」
「別に妖怪化しても問題ないと思うけど…」

7．弾幕ごっこに心理戦は必要ありません（後書き）

こぼれ設定資料　※妄想多、嫌なら見るな。

大学生、勝利台詞

ＶＳ霊夢

「幻想郷も外の世界も苦労人は多いものだよ。
お前のように気楽な奴は少ないものよ、哀れだ哀れ」

ＶＳ魔理沙

「魔理沙は俺の嫁、異論は認めん」
「泥棒猫はしまっちゃおうねぇ～」

ＶＳアリス

「ローゼンメイデンの目指すものがコイツか…何か怖い」

ＶＳ咲夜

「俺は人間をやめるぞォォォ咲夜ァァァァ！！」

「時が止まってる間の現象、何ていうの？ベルベットルーム？」

ＶＳレミリア

「スカーレット…あーケンプファーにやられてた部隊の事か」

「運命を見れるとしてもそれが真実とは限らんものだ。
実際運命が変わって生きる奴も死ぬ奴も居るかんな」

ＶＳ美鈴

「中国って餃子は水餃子がメインらしいですね、初めて知ったよ」

「美鈴さんって結構な長生きでしょ？三国志とか居ました？
劉備とか、色々と、え？居なかった？」

ＶＳ早苗

「お前！！オーバーブーストは卑怯だっての！！待てコラ！！」

「緑色…ザクと同等のレベルか、緑はかわいそうな奴だ」

「お前の学校の期性、相当ゆるいんだな、緑の髪が許可されるって…」

「で？結局お前の中の碇シンジってどんな奴だよ」

ＶＳ諏訪子

「よし、今日はロックマンＸのフィギュアの塗装をしましょうか」
「カエルって鶏肉の味がするって咲夜さんが言ってたけど…」
「実際信仰が集まらなくても幻想郷なら消えやしませんよね」
「碇シンジの事、ちょっと教えてくれませんか？
いい加減いいでしょ？気さくなシンジってことは分かるんですけど…」

ＶＳ神奈子

「あ、そうだ神奈子さんのガンダム試作２号機、
エヴァ弐号機カラーに塗っといたよ」

「その鏡…いくらくらいで買ったんですか？」

「うちの友達に農業学生が居てね、
ちょっと彼の作物だけ育ててくれません？
ノート点が悪いから実習成績で稼ぎたいとか」

続きます

8．信仰が集まらないのはいつもの事です

紅魔館偵察から1週間後

朝です。どうも、清く正しく他人に優しい正直者の大学生です。
最近幻想郷という存在に慣れて来て、言葉が軽くなった。
明らかに目上の人以外の人物ならタメ口で話せるようになったのだよ。
ちなみに最近霊夢が賽銭箱を取り戻したらしい。
人騒がせな巫女だ。まぁいい。それももはや気にする事ではない。

それよりもっと気になることがある。

「早苗よ」
「ふぇ？なんですか？」
「信仰というものは茶屋で団子を食うことを意味するのか？」

人里に下りた俺と早苗、信仰活動をすると聞いたがそれは俺の幻聴だったようだ。
にぎわう人里の茶屋でニコニコしながら茶をすすり、団子を食している。
俺？んな金があるとでも思ってんのか。お冷をもう13杯は飲んでるんだよ。

「早苗」
「なんでしょう」
「一個貰っちゃダメカナ？」
「一個貰っちゃダメダヨ♪」

なんという鬼畜巫女、というか巫女なのか？現人神じゃなかったっけ？
まぁ巫女でいいや。

「お金を浪費する愚か者はお冷でも飲んでなさい」
「ケチ、んなこといって昨日のプリンジャンケンに負けて大騒ぎしてたのどこのどいつだ」
「な…あれはどう見ても大学生さんの後出しです！」
「後出しは駄目だと誰が言った、最初にルールを決めなかった3バカが悪い」
「ほーらやっぱり後出しじゃないですか！！もういいです！あげません！」
「最初からあげる気などないだろうに」

茶屋で繰り広げられる不毛な争い。
何時の間にやら茶屋は2人だけとなっていた。
空気を読んで出て行ったのかどん引きしているだけなのか。
この世は皆衣玖さんなのですね！！

「まぁいい。気にするな。食ってしまったものを吐き出すわけにはいかんだろ」
「…」

そうむくれるでない。全く、プリンごときで何を騒ぐか。
お前のその胸部にプリンが二つあるだろ？それでガマンするんだ。

「今何か目がいやらしかったですよ」
「何を言っているんだ。俺は紳士だ。そのようなことは考えない」
「紳士の前に『変態という名の』が抜けていますよ」
「抜いているのだよ」

「……（ササッ」
「そういう意味じゃない」
日本語は、難しい。

「信仰しとくれ～悪い事は言わんから」
「信じると悪い事は起きません！誰か参拝に来てくださーい！」

ひたすら俺たちはティッシュを配り続ける。
そのティッシュの中に何故か大きな目玉のあるティッシュがあったが気にしない。
多分デザイン上の都合だろう。

「よろしくおねがいしまーす！守矢神社です！よろしくお願いします！」

「あーうん、信仰してちょ」

日が暮れるまでずっとティッシュを配り続けた。
だが信仰集まらず。万策尽きた。八方塞がった。案外ティッシュ売れた。

「なんんんっで信仰が集まらないのよ!!」
「そりゃティッシュ配りじゃあなぁ…」

ティッシュ配りで信仰するってどこまで最先端技術行ってるんだよ守矢神社。

「俺は気長に待つ派だがな」
「こないなら!!こさせてみよう!信仰!!」
「こないなら、くるまで待とう、信仰だろ」

しかし、今日は見事なまでに来なかったな。

いつものことだが、話を聞いてくれる人位は居たぞ、何で来ないんだろうか…

「まぁ気にしても仕方ないよ、うん。だからその振り上げた斬艦刀を下ろせ」

「は…！ごめんなさい！いつもの癖で！」

コイツが一人で信仰を集めに行ったときの乱心ぶりが逆に気になる。

いずれうどんげ辺りに「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ！」的状態になる。

…？そういえば最近朝帰りが多いな……もしや…

「ないない……それはない……」

「どうしたんですか？帰りますよ？」

「あ、はい！」

「？」

秋の宴、とか言うものが始まった。守矢神社の新参社の歓迎会らしい。
ちなみに賽銭箱を盗んだ犯人、そいつは…俺も聞いてない。
くそっ…今度ペンペン人質にとってやるかんな。

「俺たちが主役か、いいもんだな、諏訪子さん…あれ？諏訪子さん？」

神社の賽銭箱の上で酒を飲んでいると、忽然と姿を消した諏訪子さん。
きょろきょろと見回してもいない、ちょっと空を飛んで屋根の上を見た。
月を見上げて神奈子さんと一緒に飲んでた。

「…何年ぶりだろうね、こうやって二人で飲むのは」
「もう何１０００年も昔の話だな……」

なにやら思い出話に浸っているようだ。
流石に邪魔をしたらまずいだろう。
ここは衣玖さんになるんだ。
…気になる、いや、駄目だ。

「うん、ここは邪魔しちゃ悪い」

しぶしぶ屋根から下りた。

降りた瞬間、待ち伏せをしていたのかどうだかは知らないが
カメラを持った射命丸がかしゃかしゃっと写真を撮った。

「おっと」
「大学生さ～ん、良かったですよ～さっきの優しい顔」
「お？文か」

月光蝶を呼ぼうとしたが、手帳を目の前に突きつけられた。

「おぉっと！分解蝶はＮＧですよ！」
「貴様は俺の見てはいけないシーンを撮ってしまった」
「そんな～…酷いですよぉ～…ね、ね、いいでしょ～？取材させてくださいよぉ～」

うぅ…上目遣いで見るな！可愛いじゃないか！！

「よ…よぉし！いいだろう！今日は特別だかんな！」
「よかったぁ～これで断られたら早苗セクハラ合成写真を一般公開でしたね（☆）」
「お前……サードインパクトって知ってるか？」
「人類が滅亡するのでやめてください」

「いいネタが取れました！ありがとうございます！！」
「じゃあの」
射命丸が行った。とりあえず俺も月を見ながら酒を飲んだ。
「そういえばあの月にはタブハベースとかあるのかね…」
「あの月でシンジさんは元気に暮らしてますかね……」

俺の隣でほろりと早苗が涙を流した。
早苗……そんなに悲しいのか……

「……早苗…」
「なんですか…大学生さん…」

「妄想癖も大概にしろ」

何故か弾幕を受けた。

8．信仰が集まらないのはいつもの事です（後書き）

こぼれ設定集　続き

ｖｓ鈴仙

「座薬って痛いんだよなぁ…お前も入れるか？」
「銃の腕なら負けねぇぞ！俺の愛銃はコントローラーだがな！！」

ｖｓ衣玖

「きいいいいいいいいいいいいいいいいいやあああイクサアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！！！！！」

ｖｓ天子

「パターン青！！使徒です！！」
「20番目辺りの使徒だな、お前は！殲滅してくれるわ！！」

ｖｓ射命丸

「月光蝶である！」
「お前にはお仕置きが必要だね……月光蝶！！」

ｖｓ紫

「ＢＢＡ！ＢＢＡ！！ＢＢＡ！！！ＢＢＡ！！！！！」
「胡散臭いと職質受けやすいよ。もう少し質素に、そして謙虚に生きろ」

ｖｓ小町

「秋田県の米は帰ってくれないだろうか」
「死者の箱舟…１０円払うから乗せてくれ」
「割に合わない仕事だとは思わないのか？」

ｖｓ空

「今の時代核融合は洒落にならん、外の世界に行って全力で謝罪しろ」
「バスター？なら俺は幻夢零だ」
「お前のボスのさとりさんの持つサードアイって奴、ハッカー？」

ｖｓシンジ

「オイ、お前がシンジだな、ちょっと来てお話ししようか」
「初号機パイロット碇シンジ……侮れん相手だね…」
「お…俺のドッペルゲンガーだってのか！？お前と俺が！？」

9．宴会に最後に残る人は大体決まってます

宴会が終わり、静かになった守矢神社。
あれほど騒いでいた妖怪たちも寝静まり、一部の妖怪は帰帰路についていた。
ちなみに俺は神奈子さんがいないとうまく飲めないからちびりちびりと飲んでいるだけだった。
故にあまり酔っていない。
ちなみに3バカ神は皆自分のところで寝た。
今新参で起きているのは俺だけだ。

まだ飲んでいる奴らは、博麗霊夢、伊吹萃香などなど
結構な酒豪ということで有名な奴らだ。
ふむ、……常に酔ってる萃香がなぜここまで来て飲むのか…
ちょっと気になるが俺も巻き込まれそうだ。

「まぁ別に神社で酒飲みは京都御所で花見をするのと同じような感じだろう」

時々ニュースの天気予報とかで花見してる人見るけど
あれって実際いいのかな？なんか失礼みたいな感じが漂うんだよなぁ…
まぁ神様関係じゃないってことは分かるから別にいいか。

『おーい！だいがくせー！こっちに来なさいよ～！』

ん？注文か？

「はいよ～」

そんなノリでふわりんこと霊夢と萃香が飲んでいる場所にとんだ。
しかしそれが間違いだった。

「お？あれが例の弾幕避けだけが一級品の」
「オイコラそこのチビ鬼、今なんつった」
「私かい？玉避けが上手な人間もどきに答える舌は持たないよ」
「あ゛！？（碇…怒りボルテージ上昇中）」

そうだ、萃香って原作設定ではかなり生意気な性格だったんだな。
落ち着け、ここはＣＯＯＬになるんだ。

「そういえば居候だって？かわいそうに」
「ええ…（ビキビキ…）」
「そういうところが非力なんだよねぇ、人間ってのは。私なら自給自足するよ」
「申し訳ございませんねぇ……非力で…鬼のような馬鹿力は持ってませんので」
「力こそが全てさ」
「俺は傍観がメインだ」

ヤバイ、何から何まで意見が合わない。
大体コイツ最初見たときから気に入らない奴だったんだよ。
だが二次創作を見て見方が変わった。めっちゃかわええ。
…だが今日！その見方が戻った！！

「人間にもプライドってものがあってだね」
「じゃあそのプライド、ズタズタにしてやるよ」
「ほう、先週辺り魔理沙に負けて、それ以来負け続け、いい加減腹が立ってるんだ」
「じゃあその敗北記録を更新することに「圧倒的勝利！！！」うがっ！？」

いくら酔拳で強くなろうと、いくら質量を替えようと、この『不意打ち』にはかなわん。
腕をうならせたアッパーに軽いからだが空中に浮かぶ。

「局地用マスタースパーク」
「あぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！」

卑怯？なんとでも言え。勝てばいいんだ勝てば。

その後、満身創痍の萃香と和解。案外いい奴だった。
酔った霊夢は色々と自慢話をするが、酔ってる割には結構表現力のある奴だ。

「しっかしあの東風谷早苗って奴！何かいけ好かないのよねぇ！！」
「お…おい霊夢？どうした？」
「早苗が何か悪い事としたのか？」

やさぐれいむと化した霊夢が酒を飲みながら続ける。

「何か香霖堂でうっすい本買ってニヤニヤしたりとか！巫女としてありえないわよ！
ちったぁ神にも気を使いなさいっての！なんなのよあいつ！気持ち悪いわね！！」
「薄い本？絵本？」
「同人誌買ってたのかあいつ……」

そういえば同人誌には余り手を出したことはないな。
今度早苗の部屋にお邪魔しましょうか。

「まぁ気に入らない点といったらそのくらいなんだけど…神の忠誠心もまぁまぁだし」
「神すらいない神社に参拝客が来るとは思えないがな。うちの神社の方が数千倍いいわこれ」
「う…うるさいわね、少しはアンタもお賽銭入れなさいよ」
「だからお前の賽銭箱は募金箱かと、利益くらいはあるんだろうな」

祭神の居ない神社、博麗神社。印象的な名前、結構有名な神社だ

ろう。
だが！そのような神社に神がいなかったら賽銭箱などただの募金箱！
いくら神を呼ぶことが出来るからって偏狭＋ＮＯ祭神では来ないのも当たり前だろうが！
とか言ったら殴られかねないから黙っておこう。

「まぁいい、お前らもそろそろお開きにしたほうがいい。明日もあるだろう？」
「だいがくせー、お前酔わないのか？」

萃香が酒がなくなった徳利を揺らしながら俺に尋ねる。
酒の匂いがぷんぷんしやがる。毎日飲んでるのかこいつ。

「酔ったら明日に響くだろ？二日酔いは好きじゃないんだ」
「あの酔い具合が楽しいのに、人生１２割は損してるよ」
「１０でリセットされて２割に戻る。…結局かなり損してるな俺」

そんなこんなで神社を出る２人を見送った。

「…ふぅ～終わった終わった……さて帰るか……」

まぁいいや、帰ろう。明日は早苗も休むだろう。

……明日は暇だろうな。と風呂場に行こうとすると明かりがともってた。

その中からはやけに上手な歌声が聞こえる、ロボソンだけど。

「……早苗は風呂か……」

ちなみにその付近からステルス状態だがフラッシュは消していない盗撮者が居る。

もちろん俺が気付かないわけがない。

「これはいい記事になりそうですね！山の巫女！プライベート写真！読者リクエストですからね！私は悪く…」

「へー、帰る姿が見えないと思ったらこんなふしだらなことを…文ちゃ～ん」

毎度おなじみ月光蝶でカメラだけを残して射命丸を処分した。

ちなみにそのカメラ、紫のスキマに投げ込んどいた。

これでまた外の世界のエロ画像が増えることを願って…

9．宴会に最後に残る人は大体決まってます（後書き）

こぼれ話

チルノ「だいだらぼっちはどこだろう……ねーしらない？」
大妖精「ごめんね、私も知らないんだ」
チルノ「そっか……大学生に聞いてみよう」

守矢神社

チルノ「天狗たちから逃げ続けてたけど最強のあたいだからすぐに着いた！
おーい！大学生～！だいだらぼっちって知ってる？」

大学生「だいだらぼっち？大入道か？日本でよく知られる巨人の事だ。
大きな人の事だな、そのだいだらぼっちは
沼や山を作ったって言うことで知られているんだ。
だいだらぼっちの涙は湖を作ったりもしてた。
色々と自然に関係してるんだよ、だいだらぼっちってのは
ちなみにだいだらぼっちっていう名前のもとは
大人（おおひと）を意味する大太郎（だいたろう）
それに法師を追加して大太郎法師、
それを略してだいだらぼっちってなったわけ。ｏｋ？」

チルノ「さすが大学生……天才ね」
大学生「世間一般での常識さ」

早苗　「そういうのをネタにマジレスって言うんですよ」
諏訪子「……知らなかった」
神奈子「同じく」
早苗　「えっ」

10．スキマに入ってもテンパってはいけません

１２月の末になった、そろそろ受験の子も居るだろう。
ちなみに俺はまだ夏休みです。だって幻想郷に居るんだから大学などいけるはずない。
そう、俺は永遠の夏休み、それどころか捜索願を出されているだろう。

「さて…今は冬、そして人里の畑の前！そして俺がやるべきことぉぉ！！それはぁぁ！！！」

冬の野菜、しかし大根にあらず。その野菜の名、それは…カブ！
そう、この日のために育てていたのだ！最近。
ある少女からカブの種を無駄に貰ったのだ。花と野菜が大好きだとか。
どこのルーンファクトリーだよ、と俺は問う。

「だがそのようなこと！俺の気にするべきことなどではない！
私の知が早く収穫しろと叫ぶ！そして俺は収穫する！だが…」

俺はその場で息を吸い、叫ぶ。

「寒いんだあああああああああああああ！！！！！！！！！」

「と言うわけでカブを収穫したんですが…」

何故か大量のカブを持って博麗神社に来た俺。

こんな俺でも少しはやさしげな心を持ちたいと思っています。

ええ、そうですとも、突っ返されたんだ。３４分の１だけ神奈子さんたちがとって。

あ～…こんなことになるんだったら間引きしときゃよかった。

「あら、お賽銭かしら？」

「神奈子さんたちに渡したらそんなに要らないと突っ返されちゃってね、いるかね？」

「もらえるんなら全部貰っとくわよ」

「そうしていただけるとありがたい、ちょっと訳有りのカブだがな」

「？」

カブの入った風呂敷を開くと、四次元ポケットからぶっ飛ぶように雨のようにカブが降ってきた。ええ、そうですよ、めっちゃあるんだ、カブ。

１００分の１で３００個くらいかな、多分。

「私の気持ち！受け取ってください（ハァト）」

「ええ、貰っておくわ、４０分の１くらい」

「１分の１なんてどうだい？」

「私に一生カブを食べ続けろと言うのかしら」
「ＹＥＳ、ケストレル「悪いけど、自分で管理して頂戴」キャリングバッグつけるよ」

風呂敷の中からカブの形をしたキャリングバッグを取り出す。

「それはちょっと欲しいかも」
「なら貰え、それではさらばじゃ「待てコラ」やーだよｗ」
「こ…こら！待ちなさい！！！まってぇぇ！！！こんなに食べれないわよ～！！」
「ついてくるでねぇやい！」
「こんの（ジュッ」

平和的にカブを譲った。やっぱ俺は他人に優しいね。
あ？虹色の蝶が見えた？気にするな。

さて、つたない前置きはこのくらいにして。……いや、あれを本編で次話行こうぜ。

な？俺さ、今の状況を話数またぐまでにやり過ごすからさ。な？

「誰か今の状況を5文字で説明してくれ」

「スキマ入り」

「ありがとう……で…ゆかりん…お前冬眠しないのかね？」

「スキマは温度調節できるから大丈夫よ」

「うむ、ならよろしい」

そう、私が目を覚ました場所はスキマだったのです。ええ、スキマ。スキマだ。

うん、俺ってさっきまで冬の空を飛んでいたはずなんだ。

「あーそうか、ついに俺も帰るときがきたのだな」

「私に還るの？生まれる前？言っておくけど今帰ってもまた同じことになるわよ」

「同じことって？」

「また同じ世界を繰り返したいの？碇シンジ君」

……思考停止……

「…は！今なんと？」
「碇シンジ君、貴方は赤い海でほとんど変わらない世界を繰り返したいのかしら？」
「……ゴメン、悪玉コレステロールの大きさは胸囲に関係するのか考えた、もう一度」
「現実逃避はやめなさい」

だ…だってよ、さっき言われたんだ。俺は碇シンジだって？ｗｈｙ？俺がシンジ？
に…日本製なのか？そのシンジ、中国製シンジなら考えよう。
だが、俺が国産シンジになってただって？

「おい、下手なしゃれはやめなしゃれ」
「冗談じゃないわ、本当よ？」
「おし、お前の言いたいことはわかった、仮に俺がシンジだとしよう、じゃあこの体は何だ？」

俺の体を自分で触りながらゆかりんにアピールする。
大体あんなヘタレ坊主になってたとしてみろ、一生黒歴史だよ。
人生で思い出したくない思い出ＮＯ１に見事輝くわ。
自分が綾波といちゃいちゃしていると思ってるだけでぞっとする。
釣り合わない。
仮に俺がいちゃいちゃできたとしても絶対綾波が拒否する。

「抜けたんじゃない？」
「は？」

毎日抜いてるけど。

「貴方の魂…と記憶」
「そんなうまい話があるわけない」
「まぁ第3新東京市の人々に会えたなら、思い出すかもしれないわね」
「アニメと現実を混ぜるな馬鹿者、だが俺は実際に幻想郷があると信じていた。
故にあった。それは礼を言おう。八雲さん、だが俺がエヴァの世界に居ただと?
そんな二次小説的な展開があるとでも?片腹痛いわ」

全く、早苗と言い魔理沙といい、コイツと言い、一体なんだってんだ。
皆シンジスキー粒子に犯されているのか?いずれこの粒子、ミサイルを無効化するぞ?

「あー…もういいわ、信じ切れないなのなら信じなくていい。
で?貴方は帰ったところでどうするのかしら?」
「普通の大学生活を送りたい、だがこの暮らしに俺は満足している。

故に俺は幻想郷で天寿を全うしたい」
「無理ね」
「え?」
「あなたは死なないわ、人妖だもの」

oh…

「何時の間に俺は人外になったんだアッーーーーーーーーーーーーー!!!!」
「うるさい、じゃあ私は寝るわね、ばはは~い」

俺はスキマから放り出されて再び元に戻った。

「よっこい正一…って寒っ!!」
「あ、大学生だ」
「やはりお前かチルノ」

振り向くと首をかしげたチルノが立っていた。
何をポカーンとしている。

「どした?」
「霊夢が凄く怒ってた、大学生はどこなのよおおおお!!とかどな

りちらしながら」
「やっぱ怒ってたか」

やっちまったな～と呟くとチルノが続ける。

「あたいがかくまってやってもいいわよ！」
「そいつはありがたい「かくまう必要はないわね」アチャ～」

「ななな何の用ですかな？霊夢様」
「…大学生！不意打ちとはいい度胸ね！！私と勝負しなさい！！！」
「勝負か？負けねぇぞ、行くぞ！！」
「ふふ…」

「じゃーーーーーーんけん！！」

「へ？」
「ポン！！！！」

霊夢　グー　　俺　パー

「はい、俺の勝ち、じゃあの」
「……ちょ…待てえええええええええええ！！！！」
「なんだようるせぇな」

「弾幕勝負よ！！！だ・ん・ま・く！！」
「じゃ・ん・け・ん？」
「だ！！！！ん！！！！ま！！！！く！！！！」

顔を真っ赤にしながら俺に怒鳴りつける。
何故そんなに怒る必要がある。

「全く…で？勝負する明確な理由を聞こうか」
「カブの所有権の返却、後不意打ちした復讐よ！」

俺が不意打ちなどしたか？なぁ、平和的に解決したではないか。

「…ん、分かった。スペカの枚数制限は？」

先週、やっとスペルカードを貰った。
あとは弾幕を打つための道具とか欲しいんだが…
まぁいいか

「3枚よ、普通に勝負」
「分かった、なら行くぞ！！」

互いに距離をとって、身構える。

「ｏｋ、３…」

俺と霊夢、同時にスペルカードを出す。

「２…」

霊夢が何かを詠唱する。
俺はただ単にスペルカードを浮かす。
人妖ならば、妖力を込めているはず。

「１……」

霊夢は腕を上げ、スペルカードを光らせる、あれ？あれってただの紙じゃないの？
と、気にしながら俺は指を光らせ、手の甲にハートに２本の剣が

刺さっている紋章を出す。

「神指『ゴッドフィンガー』」

「霊符『夢想封印』」

１０．スキマに入ってもテンパってはいけません（後書き）

こぼれ話

大学生「絵をかいているのか、マチュピチュ、なんだそれは」
マチュ「これは…碇シンジだ」
大学生「タラちゃんだな、で？これは？」
マチュ「お前だ」
大学生「……三河屋…？（うちのアニキに言われた、リアルに）」
マチュ「これは…霊夢と早苗だ」
大学生「さくらももこが書いたらこんな感じになりそうだな…（同じく）」

マチュ「絵師いいいいいい！！！誰かかいてくれえええ！！！！」

11．霊夢はやっぱり強かったです

「う～…ががががwww」

流石に射撃技を格闘技で相殺は無理があった。
3分の2は相殺できたが後の3分の1を遠慮なくいただく羽目になった。

「いってて…だがこれしき、ダメージのうちには入らんぞ」
「嘘でしょ…」

夢想封印、ちなみにこの技は霊夢の十八番とも呼ぶべきものだ、多分。
ちなみにこの技で色々とやりくりして夢想転生やら色々作ってるらしい。多分。
ちなみにおおむね俺の多分は間違っていることが多い。多分。

「さて…問題はこの私に…この主人公を倒すことが出来るかどうかの問題だな…」

霊夢はびっくりするのをやめ、再び俺の様子を伺う素振りを見せる。
油断している様子は微塵もないようだ。
と言うかカブ貰うくらいすんなり受け止めろよ我が儘巫女が。

「だが…この世に光より早いものは存在しない！」
「…マスタースパークか……」

対処法を知っているのか、霊夢が妙な動きをする。

あれが俗に言うグレイズ…と呼ばれるものか。

「ばぁかめ！！1億8千万ｋｗの力ぁ！！受けてみやがれぇい！！！
2枚目ぇい！！電砲…ヤシマ・ストラテジイイイイイイイイイイイ！！！！！」

スペルカードを放り投げ、両腕に可能な限りの霊力を込める。
するとオレンジ色の砲身をかたどった物が完成し、霊夢に照準を合わせる。

「相当な大技ねぇ、でかけりゃいいってもんじゃないのよ？」
「あぁまいなぁぁあ！！！ヤシマ作戦は砲撃だけではないイイイイイイ！！！
照準あわせぇぇぇい！！！！ミッサイル全弾発射ああアアアアアアアア！！！」

俺の足元から青色のリングが現れる。流石にミサイルの再現は不可能だ。
リングから無数の光弾が飛び出し、角度を調整して霊夢に向けて突き刺さるように落ちる。

「よっ、ほっ、ほいっと。追跡って言っても大したことがない。
所詮はアンタも人妖もどきってわけか…残念ね、大学せ……」

霊夢が気配を感じ取ったのか、全て避けきった後動きが止まる。

「……男の充電率無限大…大学生をなめては困る」

動きを止めたそのときが最後、あんたの敗因は美しさにこだわったことだ。

思いやりやら、力の平等やらふざけた理念はいらん！！

「力こそがぁ…全てじゃあああああああああああああああ！！！！！！！！」

爆音が響き、巨大なオレンジ色のレーザーが射出される。

そのレーザーはさえぎるものを全て焼き、地面をえぐり、巫女に向かう。

「っ！博麗弾幕結界！！！」

霊夢が2枚目のスペルカードを使う。巨大な結界と弾幕だ。

それによって砲撃が防がれる。流石は博麗大結界を管理している

だけはある。
　というか押し切れるのか…？

「いいや！　押し切れ！！！！！」
「結界に亀裂…！？」
「頑張れ頑張れできるできる絶対できるそうそこだ気持ちの問題だ気持ちの問題！！！」

　いったん腕を引いて、体をそらす。そして、

「もっと熱くなれよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

　腕を押し付けるように再び体重をかける。

「いやあああああああああああ！！！？？」

　その衝撃に結界は耐えられなかったようだ。
　閃光と共に博麗霊夢と結界の残骸は紅魔館の外壁まで吹き飛ばされた。

「カブのお買い上げありがとうごぜぇやす」

ところ変わって守矢神社

「たっだいま～」
「お帰り、大学生…ふぁ…」

迎えてくれたのは神奈子さんだ。
なにやら凄く眠そうだが…

「どうしたのだ？神奈子さん？」
「さっき起きたばっかよ…全く…朝早いってのはきついねぇ」
「朝飯作ろうか？」
「悪いね、もうすぐ早苗も起きると思うから、一応二人分」
「はいよ」

ふと時計を見た、9時か。結構早かったんだな。
と、ちょっと呟いてからラップ（香霖動産）を数十枚用意。
その上にごはんを均等に乗せる。

「具は…梅干、ツナマヨ、博多の塩（固形）…後適当にシャケでもいいか」
「そういえばさっきから霊力が激しく漏れてるよ？何やってたの？」

神奈子の質問におにぎりを神奈子に一個投げつけて説明する。

「霊夢と一戦交えてきた」
「ほぉ、勝ったの？」
「ギリチョン」
「おお、やるじゃないか…でも向こうは恐らく本気じゃないだろう」
「それは当然だ」

霊夢が俺みたいな奴に負けてたら、俺が幻想郷最強を名乗ることになるじゃないか。
少なくともそれはない。

「彼女の本気を知りたいのなら異変を起こすくらいしか道はないだろう」
「異変？」

二つ目のおにぎりを片手で投げ、加奈子さんがそれを口に運ぶ。

「ん……ん！？んんんんんんんんんん！！！？けほっ！けほっ！！？」
「なはは～引っかかりやがったな～ｗ博多の塩だよ！」
「げほっ…ぐ…ぐうぬぬぬ…人間風情が…！！」

「神奈子様〜？何を…わぁ…美味しそうなおにぎり…大学生さんが？」

緑色のパジャマ姿で寝室から出てきた早苗。
寝ぼけ目をこすりながら寝癖を立てている。

「よっ早苗。飯は出来てるぞ…オイ神奈子さん、早くそこでもがいてないで何か飲んで来いよ」
「…苦しくて動けない…」
「引っかかる奴が悪い」
「むぅ…」

しぶしぶ台所に向かって００コーラサワーを飲む神奈子さん。
飲んでも中身が飛び出さないコーラらしいが…どこで買ってきたんだろう。

「さ〜て！大学生さん、一緒に食べましょう！」
「お？いいよ」
「じゃあ座ってください」

どっこいしょ、と畳に座って手を合わせる俺と早苗。
だが残念だったな、博多の塩握りは一つしか作ってないのだよ。

「ごちそうさまでした！」
「お粗末さまでごぜぇやした…味噌汁は投げられないよな…」

今日も幻想郷は平和だった。

11．霊夢はやっぱり強かったです（後書き）

こぼれ話

カヲル「君は今月に居るんだよ、碇シンジ君」
シンジ「そんなの分からないよカヲル君！！！
何で僕は月に居るんだよ！！僕が何をしたんだよ！！！」

12．地霊殿に向かっても仲良くしましょう（前書き）

昨日？ああ、寝てた。

12．地霊殿に向かっても仲良くしましょう

「やぁそこの妖精ちゃん」
「？」
「チルノさんはどちらへいらっしゃるのですか？」

緑色の髪で妖精らしい姿の小さな少女に尋ねる。
その俺の呼びかけに応じたのか周りの妖精もきょとんとした表情で俺を見る。

「……」

そのきょとんとした表情の妖精が俺に指でつついて『ついて来い』と言う素振りをする。
さすが自然、不自然な俺を不思議な目で見る。

で、その妖精たちと一緒についてきた場所が。

「ココ」
「ありがと……ってアリス？」

草むらの陰から見えるのは魔理沙と一緒に居るアリス。
というか俺も魔理沙もなんで瘴気が平気なんだろう。俺は人妖だからいいとして。
魔理沙は普通の魔法使いだろ？あれか？実は常にＡＴフィールド的なあれを張っているのか？

「ウン、アリス」
「なんたってこんなところに？」

「アッチ、アッチ」

妖精が指を指す方向には、現在再生中の氷があった。

アリス、魔理沙、氷となったチルノ…

「粉々にされたと？」

「ウン」

「魔理沙…恐ろしい子」

「マリサ、コワイ…」

まぁ、魔理沙でもいいや。

正直暇だからここに来たんだし。

「ありがとうよ、妖精さん。こいつは礼だ。とっておきなさい」

ポケットからサイサリスを作ってるときに余ったビームサーベルのパーツを渡した。

妖精は不思議なものが大好きだそうだ。

だが俺はそれ以前にキットの中に何で3つもサーベルがあったのかを問いたい。

多分発注ミスだろうが。

「！……♪…♪」

サーベルをつまんでキャッキャとどこかへ飛び去っていった。

「というわけで……いや…ここで行くのはフラグを立てる専門のフラッグファイターだ」

ここはオリ主とは違って普通に考える男になれ。

そうだ、アリスと魔理沙は百合関係なんだ。
あ、百合って言うのは花のユリではなく、レズって意味だぞ。

で、アリスはヤンデレ。魔理沙は不器用な女だ。
ここで俺が現れたらアリスが俺に矛先を向けるだろう。
そうしたら流石に俺は死ぬ。読者からしたらおいしい展開だが…
ん?電波が…

「…ふむ…ガイアが俺にささやく、逃げろと」

ここは大人しく退散だ。普通の人間の判断だな。

穴があったら入りたい、そう、俺は地霊殿に来ています。なが～いながが～い穴を降りてから
ヤマメを始末し、パルスィとシンクロ妬ましいを連発し、
についにやってきた旧都。結構な鬼が居る、鬼の楽園とはよく言ったものだ。

「後でさとりさんに会いたいが……まぁいいか。勇義姉さんに俺は

用があるんだ」

しばらく歩いていると鬼たちが奥で宴会を交わしている光景が見えた。

こういうのって本当にあるんだなぁ…と常々思う。

『ほうら！もっと飲め～！ホレお前さんも！！』

『うっす！勇義姉さん！！わしも飲みやす！！！』

宴会の中心でフィーバー状態な鬼の女性は、真っ赤な鬼とは対照的に色白だ。

そう、あの人が星熊勇義である。というよりなんで鬼は赤いのか少し気になる。

何でだろうか…まぁいいや。

こういうのは素早く溶け込むのが重要だ…スネークしながら行くぞ。

「おやおや…もう酔いつぶれちまったのかい？だらしないねぇ」

真っ赤な鬼がさらに赤くなって色々なとこれで転がっている。
それでも皆一升以上は飲んでいる。こいつら化け物か。

「まぁ鬼にも限界があるっすよ」

で、さりげなく勇義姉さんの隣に座って酒瓶を一本拝借する。

「お？まだつぶれてない奴がいたか、ほれ飲め…」
「ありがとうごぜぇやす」
「いいって事だよ……ん？」

不審な顔をしてマジマジと俺の顔を見つめる勇義姉さん。
角を俺の額当てながら「んん～？」っと顔を見つめ続ける。

「お前さんは妖怪かい？それとも人間？…まぁどっちにしろ鬼ではなさそうだねぇ」
「いい質問だ、そこの少女。私は鬼ではない、そう、我こそが人妖だ」
「……まーいいか！」
「その心意気やよし！」
「けど人間だったらすぐに酔いつぶれちまうだろうね」

残念ながらそうなのである。いやぁこんな世界に誰がしたものだろうか。
人間は酒に弱い生き物なのかねぇ？

「まぁいい、久々に私も腕を振るうかな？」

と、すくっと勇義姉さんは立ち上がり、勝負しようか、と俺を見る
悪いよ、この顔悪い微笑みだよ、ブラッククラグーンの微笑み方だ
よ。

「ｏｈ…鬼は出会ったばかりの奴とは勝負すると言う習慣があるの
か？」
「もちろん、鬼はある意味戦闘種族のようなものだからね」
「なぁるほど…」

酒を飲む手を止め、勇義姉さんの隣に立つ。

「やるか？」
「いや、俺は死ぬのはまだ早いと判断した。勝負は万全の状態でや
ったほうが楽しいだろ？」
「それもそうだ…お前…中々見込みのある男と見た」
「しかしそういう男ほど童貞が多い」

だが、人間は童貞だからこそ強くなれる年齢がある。
そう、３０を越えたころだ、人間は３０まで童貞を貫くと魔法使
いになる。
俺はあと何日で２０になる。それまで魔法はお預けだ。

「それにまだお前は餓鬼か、ますます面白い。気に入ったぞ！」
「お？貴様俺を気に入ったか」
「だがその口調はどうも好きになれん」
「ですよね～」

まぁ鬼に気に入ってもらえただけでも大きな進歩だ。
と言うより一戦交えて全身の骨を折るような末路をたどらなかっ

ただけマシだろう。

「あと、俺は弱いから」
「噂に聞く博麗の巫女を下した人間が言う口かい？」
「知ってたのかよ」

結局こいつはわけが分からん。

夜、守矢神社

「で？また盗撮されたと」
「はい…またあの射命丸さんから」

「なるほど、ちょっと天狗の里滅ぼしてくる」

天狗の里

「さて…と！これで早苗さんの秘蔵写真集の完成ね！」

どれほど盗撮に命を懸けたのか、１００枚以上の盗撮写真を入手していた射命丸。

全て生写真、無修正の写真がそろっている。

これは全て読者サービスだと言うが、果たして本当なのかは定かではない。

「これで全て終わりねぇ…やっとこれで全部終わったわ…今日は寝よう」

『スーパーイナズマキィィィィィィック！！！！！！！！』

「きゃあああああああああああああああああああああああ！！！？？？」

昨日、射命丸の家が火事になったそうだ。
俺はそんなことをする非情な輩は絶対に許早苗。
絶対に犯人を捕まえて土下座させる。焼き土下座だ。
俺が必ず敵をとってやる。

「大学生さん！！私の！私のお風呂写真が人里に出回っているそうです！！」
「あんのクソ天狗がアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

12．地霊殿に向かっても仲良くしましょう（後書き）

こぼれ話

大学生「そういえば霊夢の賽銭箱って盗まれたの2回目？」
霊夢　「悪いかしら」
大学生「セコムしとけ、そろそろ」

13．咲夜さんはＰＡＤ？……どうでしょう

「大学生～！私だ～！遊びに来たぜ～！」
「魔理沙～！おまえか～！遊びに来たのか～？」

と言うわけで今日は珍しい、守矢神社に魔理沙が遊びに来たそうだ。

ああ、実際に来たんだった。まぁ別に誰が来ようと…

「待て、賽銭入れろ」
「断る」
「ヤシマ作戦を決行します」
「入れるぜ」

と言うわけではした金を入れた魔理沙。
ちっ…これっぽちか。

「で？何しに来たんだ？」
「だから遊びに来たって言ってるだろ」
「ふーん、誰と？」
「お前と」

そーなのかー、魔理沙が俺と遊びたいのかー。
……え　？

「またまた～ご冗談を～ｗ」
「嫌なのか？」
「喜んで」

と言うわけで魔理沙が箒に乗って、俺はその隣を飛んで人里に向かった。

そういえば人里にはあまり行ってないな。白玉楼にも。

いずれ行ってみよーカドー。

「お前、人里には行ったことあるのか？」
「早苗がキレて以来全く行ってないな。買出しとかは早苗が専門だし」
「料理は？」
「俺の専売特許だ…いや、あの３人が壊滅的にヘタクソ過ぎるだけだな」

早苗はお饅頭に塩を入れるほど。
諏訪子さんは米で水を洗うほど。
神奈子さんにいたっては放棄だ。

「いや～まさかあれほどヘタクソとはな、あいつらどうやって飯食ってたんだよ」
「お前の帰りが遅いときはいつも出前を頼んでたぞ？よくあんな金があるよな」

へぇ～やっぱり出前ですか、確かにここは案外デフレだからな。
一個の金の値打ちが高いんだろう。俺の持ってるこのアルミの１円で結構な値段だかんな。
外の世界の１円だからこそ価値があるのかもしれない。
だってこの世界じゃ多分アルミ缶１個で人だかりが出来るほどだからな。

「お前、スチール缶って知ってる？」
「シンジがよく飲んでた奴だろ？たしかＵＣＣミルクコーヒーだっけ？苦かったぜ…」
「シンジ菌患者には珍しくない代物だね、ゴメン」

だが試しに１円玉を道端に放り込んだら人里の人間が集まることは確かだ。

で、ちょっと外の世界の事を知ってる奴が、「これ、1円玉だ」って言ったらな、なんだってー！と言わんばかりに取り合いになる。この世界の1円はすげぇ価値のものらしい。

「そういえば、ここって意外にも住みやすい場所なんだな」
「は？何で、自販機もないしカド屋もないし兵装ビルもない、住みにくいぜ」
「お前の基準なんざ知るか、都会暮らしにはこういうのがいいの」

この魔理沙は誰が憑依しているんだ？と疑うほど何かがおかしい。えーっと…リアルに現代入りしたパターン？それも第3新東京市？

「それはないよな、自販機もカド屋も第3新東京市のものだけどそれはない」
「お前も第3新東京市から来たのか！仲間だな！」
「……駄目だ…ついていけない俺が居る」

まぁこの話は置いておこう。
適当に、「ん…ああ、仲間だな」って言ったら「にひひ～」と、魔理沙が笑った。
いい笑顔だ、だが、第3新東京市の知識は観光案内できるレベルだがそこまで知らん（主に道）

「ま、それはさておき、とりあえず茶屋にでも行こうではないか」
「そだな、代金はお前持ちな～お前1万以上は持ってるだろ？」
「外の世界の1万なら持ってるぞ」

「「「「「なっなんだってー！？」」」」」

突然回りの群集が俺に向けて絶叫した。
一体なんだと言うんだ？

「おい！お前少しは自重しろ！幻想郷で言う円は外の世界の円とは違うんだぞ！？」
「そうだったのか」
「ったく…１０円でも１０万ほどの価値はあるんだからなぁ…とっとけば良かったぜ」

と言う事は１万円札だと……すげぇ価値になるな。
だが一歩間違えたら詐欺師だ。どうしましょ。

「換金しようか」
「質屋なんてないぞ」
「マジか、どうするよ」
「あきらめろ、お前は一文無しだ」

「なん……だと…」

U☆SO☆DA☆RO？
この俺が一文無し？そんな馬鹿な話があるわけない。
俺の財布がすっからかんな訳ない。

「魔理沙アアアアアアアアアアアアアア！！働き手を教えてくれぇぇぇ！！！！」

光速土下座で魔理沙に働き手を求める。

「紅魔館ならバイト募集してるぞ（グリグリ」
「踏むな踏むな、俺の業界ではご褒美だが、あ、縞パン」
「咲夜が急遽執事を募集してるって…さ！！（グシャッ」
「ごへっ！？（カシャッ」

だが今死肉になってしまっては執事になるどころかこの場から立ち直ることすら出来ない。
故に俺は…立つ！！

「よっこいせ。ならば善は急げだ！！言ってくる魔理沙！！」

アムロ！行きまーす！と言わんばかりに人里を出て飛んだ。
確か人里では飛行禁止だったはずだ。その点は忘れちゃいない。

「あ…オイ待ってって！……行っちまったよ……あー暇だ」

魔理沙？ああ……捨てた。

紅魔館、執事になる第1条件、美鈴を倒せ

「ゴッドフィンガー」

「Ｚｚｚぐはっ！」

クリアした

と言うわけで色々あってやってきた紅魔館。
やはりやたらと広い。何か理由があったはずだけど忘れた。

「で…咲夜さんの執務室は…ここか」

ナイフの形をした表札っぽい奴に『ＳＡＫＵＹＡ・ＩＺＡＹＯＩ』と書いてある。
多分ここをノックすればいいんだな。

「だが俺はあえてノックをしない」

問答無用で部屋に入った。

しかしそれが間違いだった

「あ」

まさに着替え中…！お決まりのパターン…！！

ＰＡＤじゃなかった…生乳……圧倒的生乳……！！

「うん、ナイスおっぱい！」

「……いやあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！？？？」

ナイフの雨が降ってきた。ククリ、タガー、コンバット、色々な種類だった。

俺はそれを全身全霊で受け止めたのだった。

13．咲夜さんはＰＡＤ？……どうでしょう（後書き）

こぼれ話　エヴァ成分

マヤ　「…時間です」
ミサト「作戦開始、かく乱砲撃開始、ポジトロンライフル発射準備！」

「全ＶＬＳ、ミサイル発射、第２台３砲台射撃開始」
「ポジトロンライフル発射準備開始、第３変電施設正常稼動」
「第３砲台被弾！第２ＶＬＳ蒸発！」
「第４砲台射撃開始、戦車隊、撃て！！」

マヤ　「上空に、巨大なＡＴフィールド確認！……２つ…？」
ミサト「何ですって！？」

リツコ「ま…まさか……初号機……？それに…最後のシ者……？」
マヤ　「識別信号、地上の初号機と全く同じです！」

カヲル「…悲しい歌だね」
シンジ「全くだ、ラミちゃんもまた、悲しい歌を歌う」

カヲル「終わらせよう、碇シンジ君」
シンジ「はいよ」

１４．主人公に入っていない能力、それは地雷回避です（前書き）

今日はちょっと短めです。
霧のいいところで終わらせるのもしかりってやつですよ。

１４．主人公に入っていない能力、それは地雷回避です

「そう、貴方が執事の希望者？」
「Ｅｘａｃｔｌｙ（その通りでございます）」

タガーナイフ、ククリナイフ、マチェットをケツやら腕やらに刺さっている。
まさかの全被弾とは、俺としたことが…

「……先ほどの件は謝るわ、でも貴方にも非があるのよ、女性の部屋をノックなしで入るなど言語道断。執事の風上にも置けないわね」
「重々承知しております」

と言うわけで何とか面接には合格した。
だが、名前の欄で引っかかった。
住所、年齢、職業などは一応大丈夫だったんだが…
名前が……

「いい加減本名を教えなさい！！」
「ないんだっての…」

「次は服装ね、メイド以外にも執事服があるのだけれど……このサイズで合ってるかしら？」

そう言って咲夜さんがクローゼットから取り出したものは、タキシードとネクタイ。

れっきとした紳士じみた服だ。まぁごく普通の執事服というものだよ。

「ふむ……少し着てみるとしよう」

その場で着替えようとしたら動脈にナイフを突きつけられた。

仕方なしに更衣室で着替えてきた。着る事自体は制服で慣れっこだ。

だが…ネクタイが結べないって言うのが悩みだが。

「まぁネクタイなんてスカーフみたいなものだろ。巻いとこ」

ネクタイを巻き、咲夜さんの執務室に戻った。

大体ここのメイド長は何をやっているんだろうか…

というか妖精メイドは一体何をしているんだろうか。

ＵＮオーエンは彼女なのだろうか。

「まぁいいや咲夜さーん」

「やり直し」

と言うわけで咲夜さんに結んでもらった。
仕方ないでしょ？高校ではネクタイは被る物と思ってたんだから。

「で…4時には掃除は完了、5時からは夕飯の準備、これは大丈夫ね？」
「はい！しっかり投げさせていただきます！」
「お願いね（投げる…？）ああ後、美鈴が寝てたら弾幕なり銃弾なり叩き込んで頂戴」

待て、流石に妖怪でも銃弾喰らったら死ぬだろ。
まぁその点はどうでもいいだろう、起こしても寝るだろうし。

「は…はぁ」
「返事ははっきり」
「ヘイ大将！！」
「……」

と言うわけで時間割を貰ってそれの通りに動けだとさ…

「えー何々…今は1時30分…妹様の遊び相手……あ、俺死んだわ」

しかし命令に逆らったら金を貰うはおろか、命を払う羽目になる。

仕方ない、潔く命を払ってこよう。

と言うわけで…便利な言葉だね、まぁと言うわけでフランの部屋にやってきた。

早速ですが…ここヤヴァイ、返り血、返り血、血溜まり……殺人現場?

「じ…事件は現場で起こってるんじゃない…会議室で起こってるんだ……帰っていいですか?」

だがここで引き下がったら男としてすたる…と言うか咲夜よ、

最初から殺すつもりじゃないのか？

俺が邪魔で邪魔で仕方がなくて、何らかの口実で殺すつもりだったんだろ？

そうだろ？こんな死地に執事を放り込むなんて…悪意しか見えないぞ？

と言うか掃除しろ、何を考えておるのだ妖精メイド。

「ええい！うじうじしてても仕方ない！！……コホン！」

扉をコンコンとノックする。

「い…妹様！」

『…誰？』

か細く、弱弱しい声…これがフランの声か…何か病弱って感じだな。

ってか咲夜、ちゃんと飯食わせてるのか？相当のど渇いてるんじゃない？

「フィロストラトスでございます！」

『嘘だね』

「あ、間違えた、えーっと…姉御から話は聞いていると思うが、執事だ」

『……新しいおもちゃ「ではないことは確かだな、うん」…まぁいいや。入ってよ』

恐る恐る扉を蹴破ると、そこは真っ暗だ。暗視ゴーグルがほしい。
激しくほしい。
だが日光を当てたら死ぬんだろうな、太陽が当たった夜王みたいな感じになるんだろう。

基本的にはフランが弾幕などの光で明かりをともしているそうだ。
俺もそれを真似て部屋中に弾幕を貼り付ける。すると、ボゥっと明かりがともった。
なるほど、常に真っ暗な部屋、って訳ではないんだな。

「と言うわけで俺が執事。まぁ気軽に大学生、とでも呼んでくれ」
「大学生……？」
「そ、大学生」

指をあごに当ててフランが何かを呟いている。
よ～く聞くと「だいがくせー…だいがくせー…」だと。
ふむ、可愛いと言うのは本当だったようだ。

「強いの？」

「霊夢を倒した……あ」

地雷……踏んだ……

１４．主人公に入っていない能力、それは地雷回避です（後書き）

こぼれ話

大学生「2話連続投降を目指してニコ動見てるバカってどーこだ」
フラン「ここー！（ギュッ」

どかーん

マチュ「うぎゃあああああ!?」

１５．ＥＸボスの名前は伊達ではありません。

「つよいの？」

えーっと…言い方は可愛いけど内容が怖い。

あ……ここは否定するべきか…いや、それでも弾幕ごっこは強制開始。

なら逆に過大評価するべきか…いや、それもプライドの高い吸血鬼には無意味。

「ま…まぁそれなり…かな？」

「どうして？霊夢倒したのに何で弱いの？」

……ふむ、これはやばい、脳内信号が赤を過剰に照らし続けている。

照らしすぎて何個かのＬＥＤが圧壊してる。

「……い…いいだろう！来たまえ！」

「…―っ！？」

俺が覚悟を決めてファインティングポーズを取った瞬間、空気が揺れた。

空間が歪んで、花瓶が割れる。その歪みの中心を見ると…

「ワタシトアソンデ！ダイガクセイ！！！」

赤黒いオーラを身にまとったフランドール・スカーレットが邪悪に微笑んでいた。

その表情は４９５年ほぼ一人で生きてきた孤独の、鬼だ。

「全力で……お引き受けしますよ…」

ここで引き下がるようでは、人間として廃るでしょうが。

外の世界の人間。逃げませんよ。

負けじと腰を落として気合を入れる。

「最っっ高にハイって奴だあああああああああああああぁ！！！」

体内で何かがはじけ、濃いオレンジ色のオーラが漏れた。

これは何度か見たことがある、霊力だ。

諏訪子さんや加奈子さんと弾幕ごっこをしているときによく見えるものだ。

霊夢や早苗と戦っているときにも若干見えるが色が薄い。

ちなみに霊夢の色はピンク色、早苗は緑色だった。

「霊力……それも凄く強い……」
「先手必勝っ！！！！」
「ぐっ！？」

分析最中に間合いを詰めて、ショルダーアタックをフランの腹に叩き込む。

「まずは一個被弾。はてさて、避けきれるかな？」

「人間の癖に…生意気なのよ！！」
「人間差別反対」

突然の不意打ちに興奮したフランが無造作だが半端じゃない威力の弾幕を撃つ。
この程度、神奈子さんのオンバシラに比べたらそうめんみたいなものだ。

「そういえばスペカは使わなくても良かったんだよな、なら…」

指を一本前に出して極細のレーザーをフランに向けてはなつ。

「っ…来る！」

「ほいっと」

当然フランはそれを避けた。

さすがはＥＸボス。どんなに細いレーザーでも見逃さないか。

ふとフランが後ろを見ると、ベットが融解していた。

「溶かそうとしたってそうは行かないよ」

「あちゃっ…ばれてたか。身ぐるみひん剥いて射命丸に寄付しようと思ったんだが…」

「面白いね、大学生は。もっと遊ぼうよ！！！」

そう言ってフランが４人に分裂した、フォーオブアカインドか。

大丈夫だ、避けたことはある。

「あなたはもう二度とコンテニューできないのさ！！！！！」

「人生何度でもやり直しは効くわぁい！！！！」

右に弾幕左に弾幕前には弾幕…ならば上！！！

「あらほいっとさぁ！！って…ヴェーイ！？」

上から弾幕が落ちてきた。左に避けたが左にも弾幕。

被弾した。被弾したらピチューンと行くわけではなく、連鎖して喰らう。

これが現実だ。

「ウヴェッ!?ぐぁいって!!いてぇなこのやろっ!!グぁっ!!」

最後の一発を綺麗に頂き、床に向かって落ちる途中、フランが接近して来た。

手には、謎めいた物体……目?

「……ぎゅーっとして……どかーんダヨ?」

ぐしゃっ、と不吉な音がした。

「…っ……いてぇっての……血が出ちゃった……じゃん……」

俺の胸が…しかも心臓部分が裂けて、血があふれる。たかぶるぅ……

しかも痛みでうつぶせに倒れたまま動かない。

と同時に意識も朦朧として、目がかすむ。あれ?ドライアイ?

全くこんなときに。

「なんだ…もう壊れちゃうんだ」

壊れる？ああ、そういえば俺、さっきフランに負けたんだよな。
ああいかんいかん、気をしっかり持て。しかし心臓破裂か。持って数分だな。
これぱかりはまずいな、援軍来ないかな～。あ、そうだ、忘れてた。

「とぉっ……ころがぁ……」

寝転びながら手を見る。左手にかすかに残った霊力……
この霊力が俺の勝敗を決める。と言うかこれが外れたら映姫さんにお世話になる。
それをこっそり地面に引っ付けて、小さな魔法陣を形成する。

「ぎっちょん！！！！！！」

力を入れると、一本の線がフランの足の間をくぐり、ある場所へと向かう。
そこは融解したベッドの下だった部分、さっきの極細レーザーの着弾地点だ。
わずかな光がともっている、いわば分離されたレーザーの発射口だ。

そこにレーザーのエネルギー源となる霊力を注ぎ込むと、
簡単なレーザーの砲台が出来上がる。それも素体がマスタースパークだったら。
まぁフランなら一撃で倒せるだろう。威力は劣るが。

「な…」
「やっ…たね…たえ…ちゃん…策に…ひっかかった…よ……」

フランの背中にレーザーが直撃した。

「執事になって1時間もたってないのにね……というかさ……」

「う…ぐ……え…？」

よっこらせ、と立ち上がった。

「意外と無事だった件について」

「うそ……」

瓦礫から這い出てきたフランが驚愕の声を上げる。
恐らく殺したはずの人物が生きてたことに驚いているんだろう。
まぁ俺もなんで生きてるかはよく分からん。

「まぁ形はどうであれ、俺の勝ちだな」
「うん…」
「あ、言い忘れてたけど敗者は勝者の言うことを聞くんだぞ?」
「えっ……うん」

負けたフランは意外にも大人しい。負けを認められる奴には育ってるようだ。
これも霊夢と魔理沙の努力の賜物って奴かな?恐らく。

「まぁこれは霊夢にも言われたと思うが、と言うかさっき破ろうとしてたのかもしれんが
ひとーっつ!『むやみやたらに何でもかんでも壊そうとしない!』

な」

心臓をぶっ壊されたときの恐怖感は…どんなMでもトラウマになるでしょうね。

うん、流石の俺もあれは死ぬかと思った。やっぱ幻想郷半端じゃない。

後俺の回復力が蓬莱人並なのが気になる。

「…うん」

「ふたーっつ！『掃除しろ！』主に部屋の外！血まみれで汚い！女の子が住む環境じゃない！」

あの廊下、要請メイドも近づいてこないのはまぁ気持ちは分からないでもないが

最早殺人現場と言っても過言ではない。いや、昔は殺人どころか虐殺だったらしいが。

「みぃーっつ！『レミリアと仲良くしなさい』家族でしょ！仲良くしなさい！！！

まぁお堅いことはこれで終わりとして、人間でも出来る遊びをしようジャマイカ」

「……うん！分かった！」

俺がそういうと、にぱーっと笑って俺に抱きついてきた。

勝負をした後の人間とは仲良くなる。まるでチンピラの喧嘩だ。

「でも…ずるいけど本当に強いの？大学生って」

一緒に菓子を食べながら雑談をしているとちょこんと俺の膝に座ってたフランがたずねる。

「力押し、魔理沙と同じだ」
「ふーん……ん？何してんの？」
「いや、ちょっと時間の確認を…」

ふとポケットの中のビスケット…のカスに埋もれた懐中時計を見る。

ろ…六時……5時には飯を作らなければ……いけなかった

「うわあああああああああああああああああ！！！（シンジ発狂状態）」
「あ…大学生！！まってよ～！！」

おちおち休んでも居られんわ畜生！！！

１５．ＥＸボスの名前は伊達ではありません。（後書き）

こぼれ話

美鈴「……ん～…眠い……く～」

大学「ちょいさー！！！」

美鈴「ふぎゅっ！」

これも執事の仕事です。

１６．年を越すにもそれを超すための試練が必要です

とりあえず急いで作った一品が意外にもレミリアに好評だった。
ちなみに血の件は料理する前に着替えたからばれなかった。
だが心身ともに限界だ。

「……中々いけるわね」
「きょ…恐縮でござぇやす、お嬢様……」
「もう下がっていいわ、顔色悪いじゃない」
「いつもの事だよ～だ……ふ～らんど～る……」

よたよたとした足取りで、レミリアの部屋から出た。
これで大半の作業が終わっただろう。だがレミリアが外出しないとは限らない。
それに門番の監視、恐らく今日は寝ないと言うプランを練っているのだろう。咲夜さんは

「……」
『お疲れね、大学生君。きついでしょ？』

俺の目の前に突然現れた咲夜さん。
その顔はいつもと変わらず、微笑んだ顔だ。

「アンタ化け物だな…流石の俺もきついっすわ」
「当然よ、私が貴方に課した仕事は普通の妖精メイドのするべき仕事の２０倍と、
少々気のふれられた妹様の遊びと言う、特別な仕事を加えた特別な仕事なのだから」

なん…だと？確かに妖精メイド全員分の服＋咲夜さんの服＋吸血鬼の服＋美鈴の服を洗濯とか
１時間で全ての窓を拭くとか、フランと遊ぶとか、何かがおかしいと思ったんだ。

「それをフラフラになりながらもこなす、感心ね」
「お前…俺が来ずに他の奴が来てたらどうなってたんですかいな」
「もれなく妹様の御夕食となっていたでしょう、血が足りないと言っていらしたから」

やべぇ、紅魔館マジやべぇ…ってかこれって勧誘殺人じゃない？
こんなバイトの募集で大丈夫か？まぁ悔やんでもしょうがない。
次の仕事だ。

「で？次の仕事は？」

半ば絶望に浸りながらも咲夜さんに次の仕事を尋ねる。
すると咲夜さんが微笑んで、俺の肩に手を置く。

「今日は終わりよ、と言うより、執事の仕事はもううんざりでしょう？」
「言ってしまえば」
「なら、これが退職金よ」

そう言って咲夜さんがポケットから財布を取り出した。
なんだ、ポケットマネーか…と思ったら俺の手の平にその財布を置いて握らせた。

「えっ」
「外の世界の人間は働くだけの機械だと思ったけど、違ったようね」

「ひぃ～ふぅ～みぃ～よぉ～……ここの～つ……９０枚の札束だと……」
「９０円ほど入ってるわ」
９０円＝９０万円と計算すると……この小銭は多分１０００円…
これは１００円…
おいおい……９０万４５００円ですと？
「な……こんな大金…いいんですかいな？！」
「いいのよ、ボソッ（余るほどあるし」
「？」
「いぃ～やっはぁぁ！！っしゃああ！！文無し卒業どころかお釣りが出るぜぇぇい！！」
何年ぶりだろうこのうれしさ。久々に本気でガッツポーズした。
「ついに偽りの温もりではなく本当の財布の温もりに会ったぜぇぇ！！！！！！
ひぃいいいいっはあああああああああああああああああああ！！！！！
…っとちょっと待てよ……俺フランとまた遊ぶって約束したんだよな……」
このまま俺が帰ると、まぁ自惚れじゃないが寂しがるだろう。
そしてまた人間のもろさを忘れて血が足りないともうす。
すると下手したら暴れだして紅魔館を破壊。
人里に向かって皆殺し…ＢＡＤＥＮＤ！
「咲夜さん」
「何かしら？」

「また来ます」
「え？」
「フランは俺に任せろー（バリバリ」
「やめて！」

時は進んで師走の終わり。簡単に言えば１２月３０日。
俺は再び紅魔館にやってきた。レミリアから許可は貰っているし、咲夜さんとも仲がいい。
人間類で紅魔館のフリーパスを持っているのは霊夢と俺だけだそうだ。（美鈴談）

「フラン～！久しぶりだなぁ～よしよし」
「えへへ…待ってたんだよ。大く～ん」

まず最初にやってきたのは綺麗に掃除された地下の廊下。
俺がフランの部屋に行く前にフランが笑顔で受け入れてくれた。

「山の巫女？」
「知らないのか？」

「うん、ここ最近新聞すら読んでないから」

新聞すら読んだことないのか。
それは忌々しき緊急事態だ。
と、冗談交じりにあることないこと全て話した。

「へ～！お外って面白そうだね！！」
「外は実にいいところだ。
いずれお前も外のマナーが全て理解できるようになったら一緒に行こうな」
「うん！私も頑張るよ！」
「よしよし…おっと。話しすぎた様だな。俺はそろそろ帰るが、また遊びに来てやるよ」

ちょっと寂しそうな顔をしたが、すぐに笑顔に戻った。

「またね～」
「じゃあの」
「あ、そうだ。帰りにお姉さまが部屋に来いって…
あれ？大くーん！このままだとお姉さま待ちぼうけだよ～！」

なにやらフランの声が聞こえるが、多分咲夜さんを呼んでいるんだろう。
俺には関係ない俺には関係ない。

守矢神社

「たっだいま～」
「お帰り～～ちょうどよかった。大学生、ちょっと年越しソバの小麦粉かって来てくれないか？」

家に帰ると、正月に食うであろうおせち料理の器を洗っていた早苗と
神力を高めている諏訪子さん、そして年越しソバの器を探していた神奈子さんが俺に頼んだ。

「え？いいけど」
「悪いね」
「最近やっとまともに飛べるようになってきたんだ」
「そうかい、それはよかった（戦闘時は戦闘機並みにビュンビュン飛んでたけど）」

ふわりと妖怪の山を降り、人里に降り立った。

「……」
「……」
「お…お二人さん、落ち着いて」

粉屋で俺ともう一人の少女がにらみ合っている。
どちらも小麦粉目当てだ。

「どけ、それは俺の年越しそば用の小麦粉だ、俺の脳内アマゾンで予約していたんだ」
「いいえ、ここは後に引けません。この小麦粉は私たちのものです」
「お前には半霊と言う名の立派な練り物があるではないか」
「半霊は練り物じゃありません！！！私の体をそばにされてたまるものですか！！」

そう、半人半霊、魂魄妖夢だった。

「ならば力ずくで奪い取るのみ！！！霧の湖で決着をつけようぞ！！」

「いいんですか？私結構強いですよ？」

互いに霊力をむき出しにしながら霧の湖へと向かった。

さすが半霊、霊力を出すのはやぶさかじゃないんだな。

「こっりゃ大変なことになってきたぞぉ……里の皆も呼ぶか」

粉屋のオッサンは上白沢慧音と里の皆を呼んだ。

その中には霧雨魔理沙や居合わせた博麗霊夢も観戦者となった。

と言うわけで瘴気のない霧の湖へと向かった。
縄張り関係はチルノに許可を貰って何とかなった。
ちなみにどうやってきたかはよく分からんが里の一部の有力者は観戦に来ている。
見たところ、有名な奴と言えば、藤原妹紅、鈴仙・優曇華院・イナバ。
博麗霊夢、霧雨魔理沙、上白沢慧音先生などなど。

人気のないところにはさらに凶暴な妖怪も来ている。
風見幽香やルーミアだ。怖い怖い。と言うか俺ってそんなに有名だったの？

「いいか？スペカは3枚。それ以外は何でもありだ」
「分かりました。今年も無事に年を越えるために……」

腰を落として刀に手を置く妖夢。心なしかその周りが暗くなり、桜の花びらが見える。
中々、華奢な女だ。

「行くぞぉ！！！！弾幕ファイトぉおおおお！！！レディィィィッ！！！！」

同じように腰を落とすが、美しさとは裏腹に豪快さをイメージしている。
どういった原理なのかは謎だが、地面をえぐり、周りに突風を吹かせる。

「…いきます！！」
「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

刀を居合いのようにして俺の間合いを詰めようとする。
それと同時に俺も殴る気まんまんで妖夢に殴りかかった。

「あまあああああああい！！！！！」
「ぐぁっ！！！！！」

だがリーチで勝る刀、だが手数と汎用では拳の方が上だ。
刀を抜く前に妖夢の頬に拳を入れ、その衝撃で短刀を落とさせる。

しゃらららっと音を立てて俺の足元に刀が置かれる。
白楼剣…迷いを断ち切る短刀ね。

「一本いただこう」

「ぐっ……後で返してくださいね…！」
「無論そのつもりさ。だが小麦粉は渡さん」

白楼剣を右手に持って軽く振る。
心なしか心がすっきりする。

「佐竹メルヘン一刀流……なめてもらっちゃ困る」
「そんな流派があったらぜひ知りたいです」
「全ては心の中だ、今はそれでいい」

と言うわけで正式な戦いが始まった。

「はっ！！どりゃっ！！さらぁ！！しね！！あ、折れた」

ただ単にずっと縦に振り続けていたら刀が折れた。
幻想郷で近接武器はあまり通用しないんですね。分かります。

「っ！今っ！！！」
「真剣白羽取り！！」
「なっ！！？」

う…腕がなければ即死だった。
幽霊１０匹分の殺傷力って…基準がよく分からんが凄いんだろ？
とりあえず蹴りで距離をとる。

「あぶねーあぶねー……」
「じ…地味に痛い……」
「っとまぁ…そろそろスペカを使うか」
「同感です、お互い長期戦はきついでしょう（晩飯の準備的に考えて）」

と言うわけで互いに1枚スペルカードを用意する。
双方速攻を配慮したカードだろう。
と、想像しながら同時に叫ぶ。

「『人鬼　未来永劫斬』」
「『心壁　ＡＴフィールド』」

妖夢が一気に間合いを詰める。だがこちとら心の壁。
絶対恐怖領域に近づけるはずもなく跳ね飛ばされた。

「ぐぁ…！！！？」

跳ね飛ばされ、気に頭を強打した妖夢は低い声を上げて、そのまま意識を失った。
その倒れた妖夢をおんぶして、

「はい、おーしまい。おやっさん。小麦粉プリーズ」
「お…へ…へい」

もらえるものは貰っといた。

大晦日、妖夢は自らの身を削って蕎麦を作ったそうな。
しかし流石に幽々子様に止められたらしい。
南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

「うまいな。さすが俺のの投擲蕎麦だ」
「おいしいです！投げた衝撃で何故かコシが出てる！！」
「これは美味しいね、諏訪子の本体も満足しているようだね」
「本体言うな！！」

投擲年越し蕎麦を食べて、一年の終わりを迎えたらしい。
ごーんっとな。

16．年を越すにもそれを超すための試練が必要です（後書き）

こぼれ話

大学生「他の小説の出来とこっちの小説の出来を比べたときの差は何だ？」
マチュ「だからこっちも出来る限りシリアスに仕上げようと頑張ってんだよ」
大学生「中途半端なシリアスほどつまらんものはない」
マチュ「ならもうギャグ1本で行ってやるよ！！」

と言うわけで次話はシリアスなど一つもなしでバトルもなしで行きます。

１７．新年は大人しく迎えましょう（前書き）

１０月に書くネタじゃないｏｒｚ

17．新年は大人しく迎えましょう

「新年明けたな」
「初詣来ますかね？」

と、新年が始まった幻想郷。高校受験の人はもうお守り買ったかな？

買ってないなら守矢神社においで、安産御守あげるから。
ちなみに2柱さん方は寝ている。誰が5時起きだって？

「そういうわけだ……来たぞ、誰か」
「むやみやたらに賽銭をせびらない様にしてくださいね」
「了解です、早苗中尉」

まだ外は暗いというのに誰かが来たようだ。
霊夢かな？あいつも客の来ない初詣で忙しいはずだが…
じゃあ魔理沙か？いや、あいつが初詣に来るわけがない。と言うかどっちかと言うと霊夢側だ。
ふむ、この程よい西洋風の妖気……

「ほう、こりゃ珍しい」

参道に降りてきたのは、レミリア・スカーレットだった。
初詣らしく、和服を着ておまいりに来たようだ。
射命丸ェ…こういうときに限ってカメラを持ってこない。

「太陽が昇る前に来ないと初詣なんて出来ないから。咲夜もつれてきたわよ」

今度は白を主体とした和服でふわりんこと地面に降り立ったのはまぁいわずと知れた鬼畜メイド、十六夜咲夜だ。俺を酷使したことと忘れんからな。
お金はありがたく貰うけど…金金♪

「朝早くからご苦労様です、東風谷様、大学生様」

咲夜さんの相変わらず丁寧な挨拶。
しかしこの挨拶に見とれて執事になったら…
まぁ簡単に言えば俺は地雷原を４ＷＤで通ったってことだな。

「ったく……まぁいいや。参拝したいなら早くしろ、でなければ帰れ！」
「「やります！私が拝みます！！」」

と、言わんばかりに２人は小銭を入れ、パンパン

と拝まずに跪いて手を組む。
なんだこのメルヘンティックな参拝客…

「おいwお前ら何やってんだw」
「何って…拝んでるのよ」
「バーローww仏教と外国宗教混ぜるなよww」

まぁいいや、賽銭が手に入ったならそれでいい。

「で？なんたってお前らこんな辺境で田舎っぺーところに来たんだ？」
「てめぇ表出ろコラ」

後ろで神がとんでもない殺意を抱いた表情でこっちを睨みつけていた。
が、俺はそれを全く気にしない。後早苗、ここは表だ。

「別に、ただ初詣に行くなら神が居る場所じゃないと意味がないと思ったからよ」
「あっそ、終わったから帰るのか？」
「それ以上ここに居る理由はないから、咲夜、行くわよ」
「はい、仰せのままに」

嵐のように過ぎ去っていった2人。
残ったのは風で飛んできた枯葉のみだった。

「……え？参拝客これだけ？」

その後、人里の一般人たちが参拝に来た。

結構な多さだから3神はまんざらでもない様子だ。

「大学生もよくやるな、普通逃げ出すぞ。こんな仕打ち」

やはりこういうときに俺を純粋にほめてくれるのは神奈子さんだけである。

早苗と諏訪子は何故か賽銭箱の前で一般人と雑談をしている。

俺？雑務でこの寒空の中洗濯ですが何か。

だが加奈子さんは俺を気遣って井戸の前に来てくれた。

「へへっ、やっぱいい人だな。神奈子さんは」

「え…あ……ありがと」

「しっかしまぁ…外の世界の井戸はどこまで冷たいんだか……霜焼けちまった」

石鹸から手を出し、手の甲を見ると、真っ赤に焼けて物凄くかゆい。

霜焼けは本当にきついんだぞ、なめたらいかんぜよ。

「早苗も悪気があるわけじゃないんだけどねぇ…あ、大学生。お湯持って来ようか？」

「いや、これも肉体の鍛錬よ。人間ならこれを頭から被るのが人間ってものだ」

「え？」

神奈子さんの驚きの声を無視して上着を脱ぎ捨てる。

腹筋などしたことがない筋肉のない体が露になる。

「うむ、わが家族は女子（おなご）ばかりだが、お前も女子であったか」

「ぶっ殺すぞ駄神、俺は人妖なの、わかる？」

と、おもむろに井戸から水をくむ、本当ならこのバカ神三人衆にぶっかけてやりたいが
所詮俺だ、返り討ちにあうに決まってる。
と言うわけで。

「ほっ」

ざっばーんと頭から水を被る。
するとぽてっ、とショックで気絶した。

「だいがくせえええええええええええええええええええええええ！！！？？？」

神奈子さんの悲鳴が聞こえ、すぐさま慧音先生のところに搬送された。
…
……いま思えば俺何がしたかったんだ？

所変わって慧音亭。
何故か自殺行為を図った俺は、ここで意識が戻った。

「何でアスカとレミリアが居るんだアッー！！！！」

はぁ…酷い夢を見た。何で咲夜さんがミサトさんに誤射されてるんだよ。意味わかんねぇよ。

とまぁ冗談はこのくらいにして、ここはどこだ。と考えていると、襖が開いた。

そこにはバカを見る目でこっちを見ている霊夢と、同じくバカを見る目でこっちを見る魔理沙。
そしてその後ろには患者を見る目でこっちを見る、腕を上下に振りたくなる人物
八意永琳がいた。

「調子はどうかしら？」

えーりんが軽い問診をする。

「寒い、かゆい、しびれる」
「結構」

わずか6秒で終わった。
純粋に寒い、霜焼けでかゆい、寒さで麻痺してしびれる。

この3つ、そして

「ぶぇっくしゃあらっせぇぇぃ！！！！！」

「あと風邪ね」

さっきの寒さと、こっちに来るまでに着替えなかったせいか風邪を引いた。

新年早々風邪とは、馬鹿だな俺は。

「バカは風邪引かない、っていうけど、都市伝説だったみたいね」

「どうやらそのようだぜ」

あとそこの主人公2人、後で覚えとけ。

17．新年は大人しく迎えましょう（後書き）

こぼれ話

咲夜「豊胸がしたいです」
永琳「いいけど、爆発するかもしれないわよ」
咲夜「他を当たります」

咲夜「豊胸がしたいです」
ドラ「ほうきょうぱっど～！」
咲夜「ＰＡＤはいりません」

咲夜　「豊胸したいです」
大学生「俺でよければ力になろう（もみもみ」
咲夜　「んぁ……はぁ……って！！違う！！！！（グサッ」
大学生「いてっ」

咲夜　「豊胸がしたいです」
シンジ「そうか！」

アスカ「熱膨張！！！」
咲夜　「他を当たります」

18．看病はちゃんとしましょう（前書き）

だが風邪をひいたのは大学生ではない。

18．看病はちゃんとしましょう

昨日の敵は明日の味方、と言うが逆に考えろ、今日の味方は明日の敵、かも知れんぞ？

と言うわけで大学生です。新年早々風邪を引きました。今年が心配です。

しかし相変わらずの回復力、3時間寝たら治った。

「……あー…寒い寒い…」

1月の中旬の夜中、吹雪のような寒さの中俺は永遠亭を目指して雪の積もった迷いの竹林をざくざくと歩いている。

当然意味もなくこんなところを歩くような頭のイカレた真似はしない。

れっきとした理由があってこんなところに来ているのだ。

まぁその理由を語るとなると、６時間以上は要することになる。

回想を用いて今の状況を説明しようジャマイカ。

＊

「……ぅ～……」

時は夜7時ごろにさかのぼる。

晩飯を食べて、風呂にも入った後のことだ。

「おーい、早苗～風呂開いてるけど閉めていいか？」

「……ぁぁ～…駄目…」

「ん？どした？」

「風邪を引いちゃったみたいです…今日はお風呂パスします……」

そのときは「何打風邪か、神の癖に風邪ひくんだな」と茶化した。

別に誰が風邪をひいて死のうがどうでもいい、いや、死んだら流石に他人事ではなくなるが。

早苗が風邪をひこうと、

霊夢がレイ夢になろうと、

魔理沙がマリ沙になろうがどうでもいいのと同じ。

と、寝室で先に寝ている諏訪子さんの隣で布団を敷いて寝た。

「かにゃこ～…」

最近、諏訪子の寝言に少し悩んでいるが、そんなことは気にしない。

んで、問題はその夜中の話なんだよ。
突然、部屋の中で誰かのうめき声が聞こえて…

「う…うぅ……う…」

なんか変だな～って思いながらじっと我慢して寝てたんだよ。
ここで起きたら何か変に思われるだろうし。
で、そのまま数分くらいたったかな、そしたら次はね

「大学生…大学生さん……ねぇ起きて…大学生さん……」

あからさまに苦しそうな声でおれの体をゆするんだよ。
そりゃもう、怖かったなあ…なんか妙にその人の手が熱かったし。
これで起きたら確実に殺される、って思ってもう藁にもすがる思いで布団にしがみついたんだ。

「あ…あぁ…もう駄目…頭がポーッと……あぅぅ…」

そしたら腹に重みを感じたんだよ。

「うぉあああああああああ！？！？」

「ひゃうっ！！？」

流石に耐えられなくなって叫んでその重みの元凶を跳ね飛ばしたんだ。

その音に諏訪子さんと神奈子さんが飛び起きた。

「早苗！？どうしたんだい！？」

「早苗！……これは凄い熱だ……」

「お化けがっ！？お化けが俺の……何だ早苗だったのか……

うぉ！？なんだ？顔が赤いぞ！？発情期か！？」

霊弾照明をつけると、そこには下着姿で顔を真っ赤にして息を荒げている早苗が居た。

「諏訪子様…神奈子様…大学生さん…はぁ…私…熱があるみたいです…ぅ」

「「「うん、知ってる」」」

「……」

＊

で、どういうわけか、俺が永遠亭にいって薬を貰うことになった。

「どの辺に俺が行くような要素があったのかは謎だが…」

本当に俺が居なかった原作、こいつらはどうやって生活をしてきたのだろうか。

少し気になる、と言うかこれ、結構診察費……あれ？患者はどうしようか…

とかどうとか考えていると、着いた。

どうしようか、適当に薬をもらうか（早苗爆発覚悟で）

それとも適当に症状を言って帰るか（早苗副作用覚悟で）

それか早苗を連れて行くために戻るか（早苗悪化覚悟で）

「まぁいいか、寒いし、後で考えよう」

ノックをせずに入った。

「どうも～夜遅くにすみませ～ん。守矢神社の大学生ですけど～」

真っ暗だ。とりあえず霊気で目の前の明かりをともし、靴を脱いで廊下を進む。

「永琳さ～ん、イナバさ～ん……あり？寝てるのか？」

返事がない、ただの廊下のようだ。

しかし廊下の立て札とかを見る限り、ここが永遠亭であることは間違いないようだ。

「……」

誰も居ないのか？

覚悟を決めて私室であろう部屋を空ける。

「し…しつれーしまーす……」

「へ？だ…誰？」

「あ、輝夜さんでしたか」

今まさに寝ようとしていた蓬莱山輝夜さんが部屋にいた。

これは都合がいい。ちょっと永琳さんの居場所を聞こうではないか。

「あの、永琳さんをお呼びしていただけるとありがたいのですが」
「永琳なら守矢神社に行ったわよ、二柱に借り出されたみたい」

なん…だと？

「……輝夜さん」
「何？」
「俺…死んでいいかな…？」
「面倒だからやめて」

泣く泣く守矢神社に帰還した。
今までこのような屈辱があっただろうか…
泣いていい？ねぇ泣いていい？いやもう泣いてる。

守矢神社

「いや～助かったよ永琳、大学生は災難だったけどね」

「そう思ってるんなら通報するなよこの諏訪子」

通報を提案した張本人は、この洩矢諏訪子であった。
早苗が苦しそうにしていたと心配になったそうだ。
できれば俺も心配してほしかったな～

軽く別居しようかと考えていると、部屋から永琳が出てきた。
何故かポケットから斬艦刀のような大きな物体がはみ出ているが…まぁなんでもない。
だがあからさまに巨大な注射器。それだけは見逃せない。何か深緑の液体入ってるし。

「永琳さん！どうでしたか？早苗は大丈夫ですか（そんなでかい注射器で刺されて）」
「特に重い病気ってわけではないけど、今は安静にしておいたほうがいいわね」

寝ぼけ目をこすりながら永琳が簡単に症状を説明する。
まぁ行ってしまえば風邪をこじらせて重症化しただけらしい。

治療費を払って内服薬を貰う。注意書きには分量を守らないと爆発する。
と書いてある以外は安全だ。これならまだマシか。

「今日はうどんげが彼女の面倒を見てくれるから、貴方達は休んでいていいわよ。お大事に」
「ありがとうね～」
「治療感謝するぞ」
「じゃあの～」

永琳が先に帰って行った。そうか、今日はうどんげが泊まるのか。
流石に一人じゃ寂しいだろうな。俺も行くか。主に俺が寂しいけど。

「……体温はまだ高いか…「おす。オラ大学生」何？」

俺が部屋に入ると、そこにはブレザー姿のバニーガール。
外の世界でこんな奴がいたらドン引きか連行されるかギリギリのところに立っている。
そうです、彼女が…鈴仙・優曇華院・イナバです。決して千葉ロッテの選手ではありません。

「いや、まぁちょっと早苗が気になってな…よっこいせ…」

それとうどんげにも用がある。
なんだっけ？うどんげは月のウサギだったはず。
俺がシンジだと言う証拠が得られるかもしれない。
ゆかりんが言う言葉も間違いではないはずだが、どうも真偽はわからない。

そこで、幻想郷とエヴァの世界を繋ぐ共通点である、『月』

「渚カヲルとかいたら凄いんだけどな…」

「月の民の第1号がどうかしたの？」

「（；。д。）」

18．看病はちゃんとしましょう（後書き）

こぼれ話

さとり「こ…こないでぇぇえ！！！！」

大学生「ちょっちょっと待ってよさとりさーん！
『さとりんかわいいよさとりんさとりんさとりんさとりん
俺もうこの子が傍にいたらロリコンでもなんでもいいや
あーもうこの怯えた表情もたまらない！かわえええ！！』」

19．自らが人の代わりをする時は、それに応じた実力が必要です

「月の民1号ってカヲル君が？」

ジト目になりながら鈴仙に聞き返す。

「カヲル…って確かアダムの事よね？お師匠様が言ってたけど」

「へ？カヲル君はタブリスだろ」

先ほど聞いた台詞、カヲルは月の民第1号。

つまり……地球が完成する前から使徒は存在してたのか？

いや、カヲルはゼーレの手によって人の体を手に入れたアダム。

つまり鈴仙が言っているのはアダムの事だろうか…？

「……なんかややこしくなってきた、まぁその点は気にしないでおこう」

「…でもなんであんたがアダムの事を知ってるのよ」

「ほんの成り行き、原作知識というものさ」

もっとも、カヲル君や霊夢とかが実在するとは信じてなかったが。

まぁ…いいや！

あ、でも死んでもカヲル君とは会いたくないと何故か第六感が伝えている。

「で…どう？早苗の様子は」
「今は結構落ち着いてるみたいね、と言っても発熱と咳は止まっていないようだけど」
「あー……やっぱそうなっちゃうか…殴ったら治るかフッ！？」

と呟いた瞬間、鈴仙の肘打ちが炸裂した。
冗談が通じない人間は悲しいね～。

「何をする！？貴様！！大学生に向かって何をするか！！！」

涙目になって、そしてなおかつ頬を抑えながら怒鳴る。
今の行為はどうフォローしても女の子のやることではないぞ！！

「うるさい、病人を殴るな」
「だぁからって肘打ちをする医者がどこの世界にいる！！あ！ここにいたか！！」
「うるさい、患者が起きるでしょ…」

と、ふと2人見ると、その視線に気付いたのか早苗が薄く目を開いた。
ここまで弱った早苗は始めてみたな…。
「あれ…まだ起きてたんですか…2人とも…」
「あぁ、駄目ですよ。もう少し安静にしていてください」
おい、何で俺のときはタメ口で早苗の時は敬語なんだよ。
おかしいですよウドンゲさん!!!
だが、その安静の指示に逆らって「お茶を出さないと」と早苗は起き上がろうとする。
どこまで律儀なんだ。
「早苗、ん～まぁ…不健康極まりない俺が言うのもなんだが～…その、無理はするでない」
起き上がろうとする早苗の背中を押さえて、ゆっくりと布団に戻す。
病人に茶を注がせるほど俺は外道ではない。
「大学生さん…」
「まぁ、病気のときくらいは休めや、お前は最近無理をしすぎだぞ、心のケアも大事だ。
俺なんかスクールカウンセラーの常連と言われるほど心のケアをしてたんだぞ?」
「なら、私は休んでもいいんですね…?」
「おう、いつも世話になってるからな。男の礼儀だ。借りは返す」
そういうと、笑顔が戻った早苗がぽつぽつと何かを話し始める。

「……綾波さんも同じことを言われたことがあるって…言ってましたよ」
「ん？綾波が？」

茶を注儀に以降とした足を止め、鈴仙と俺は耳を傾ける。
綾波って、多分レイの事だろう。少し聞くか。

「男の礼儀、借りは返す。って言ってお姫様抱っこされたらしいです。シンジさんって人に」
「…やさしいのね、その人」
「…（シンジってそんなにキザな男だったか？）あのヘタレボウズが？」

多分そのシンジは憑依シンジだろう。
綾波を抱っこできる奴…相当心を開かせたな。

「ええ、男らしい人でしたよ」
「…そうか。お前も色々経験してるんだな」
「ええ……もう一度…もう一度だけ…
シンジさんに会えたらな…って思うこともしばしばありますよ…」

そのときの早苗の顔は、懐かしい友人の話をしている一人の少女の姿だった。
あながちただの精神異常者のたわごとではないような気がした。
まぁ俺には関係ないが。

「まぁ早苗、お前の話を聞いて思ったんだが……」
「？」
「なりふり構わずに抱きつくのはやめたほうがいいぞ、例えシンジやカヲルがいたとしても」

「重々反省しています…」

まぁそんなこんなで、お茶を注いで来た。
ちなみに鈴仙の分もお茶を注ぐ。鈴仙が「あ、どうも」と茶を受け取り、すする。

「コラ鈴仙・優曇華院・イナバ、何故顔をしかめるか！！」
「……茶柱が尋常じゃないくらい立ってるんだけど」

鈴仙のコップには茶柱が少なくとも２０本をゆうに越した量の茶柱が立っている。
まぁ多いことに越したことはないだろう。だって俺が入れたんだし。

「エクスパンデッド・チャバシラだ、幸せを欲しているだろ？お前は」
「いやそこまで幸せ望んでないから」

と、文句を言いながらもしぶしぶ茶を飲む俺と早苗と鈴仙。
まぁその後は退屈この上なかったが、だいぶ早苗の様態は安定していたようだ。

朝、晴れた日は陽気、雨の日は憂鬱。
しかし朝は毎日来るもの。新しい日の始まり。人の心は日によって変わる。

―それは、まぁあれだ。晴れた日でも憂鬱になるときはあるってこと。

「オイ諏訪子、今なんと言った？」

突然の宣告に俺は意味が分からず声を低くして言う。

「だぁーかぁーらぁー、早苗が風邪で休みの間、大学生が守矢神社の神主をやるってこと！」

「だが俺は居候だ、神主になるような男でもないし、何時までもここにいるわけじゃないぞ？」

それに対して諏訪子は両手を広げながら大きな声で説明をする。

神主とな？その神主と言うのは、あの打法の事だよな？神主打法だよな？

大体巫女や神主ってのは生まれつきでなるものじゃないのか？

そんなに進んで神主になれるほど神の存在ってどうでもいい存在なのだろうか。

というか寒い、いいからこのわけの分からんデザインの神主服を脱がせい。

「どうせ早苗は明日には治ってるんだから、別にいいだろう？

大体３時間で風邪を治す化け物をただの大学生と呼ぶバカがどこにいるのだ」

神奈子さんが俺の肩を叩いて「それに結構似合ってるぞ」と付け加える。

だが加奈子さん。だからって俺を神主にする必要はないだろうに

「うーむ……諏訪子さん、神奈子さん。俺でいいのか？」

「「もちろん」」

だとさ、信用されてるなぁ…俺は。

いや、俺だからこそかな？（加持リョウジ風）

「よし、分かった。早苗が治るまで、役不足だろうが俺がやってやろう」

「……と言ってみたけど、大学生はどこまで力を持っているんだい？」

首をかしげながら諏訪子さんが俺に尋ねる。
確かに自分自身の力どころか、自分がどんな能力を持っているかも分からない。
生憎自分の能力を知る方法は俺にはわからない。

「…シラネ」
「知らないか…神奈子知ってる？」

その質問に神奈子さんもうーん…と唸って俺の頭を触って何かを診断する。
神はこれで色々と能力や霊力、妖力などの容量を調べる。…って早苗が言ってた。
すると俺の体からオレンジ色の何かが湧き出て、神奈子さんの手に収まる。

それをつんつんと触りながら神奈子さんは首をかしげる。

「私もよく分からない、なにやらこの力は結界に近い物を感じる。この結界に近いものは私も、人間も妖怪も持っているものだが…大学生はこれがかなり大きいものとなっているそうだな。結果的にこの結界が妖力や霊力を生み出すジェネレーターとなっている。
と、私は推測するな」

神奈子さんがその結界に近いものを俺の体に戻した。

「つまり、神奈子の言う大学生の妖力と霊力の容量は簡単に言うと？」
「S2機関」

「なるほどね」

なにそれすごい。

１９．自らが人の代わりをする時は、それに応じた実力が必要です（後書き）

こぼれ話

シンジ「おう、久しぶり。ちょっと物申しに来た」
マチュ「はぁ」
シンジ「ちょっと小説の評価を見せなさい」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

シンジ「……何だこの低落は、前作の勢いはどうした？」
マチュ「滅相もない。だがネタがないんだ！」
シンジ「大体！ノープランで書こうとしたのが駄目なんだよ！
　え？前作はよかったじゃん！おかげさまで３００万ＰＶだよ！？
　　　　　お前の小説の質は景気変動のように変化するのか！？」
マチュ「読者様には感謝してるよ！！でも出来ないんだ！！
　あの時の感覚が取り戻せないんだよ！！！」
シンジ「はぁ…もうちょっと他の方の書き方も見ろよ…
　ただし盗作は禁止な。」

と言うわけで、ちょっと勉強しなおします。

２０．看病する際は衛生上に注意し、消化にいい食べ物を渡しましょう（前書き

今日はただ単に看病する話。

20．看病する際は衛生上に注意し、消化にいい食べ物を渡しましょう

「まぁ妖力云々はどうでもいいとしようか…さて、俺はこれからどうしようかの」

神主といえども色々な仕事がある。

結婚式、お宮参り、お祓い。そのほか色々だ。

だがここは幻想郷。常識にとらわれることはない。

じゃあ神主っていったいなにをするのさ。

巫女である博麗霊夢は異変が起きたらそれを解決する。いわば自衛隊のようなものだ。

対してこっちの巫女、東風谷早苗。こいつは進行を得るため。いわばセールスマンだ。

「覚悟も信念も違う俺にこんな化け物2人を操ることなんかできるのかねぇ…」

ま、なるようになるでしょ。

霊夢も早苗もそれといって仕事しているところはあまり見ないし。

やっているといえばたま～に来るお祓いの依頼や賽銭管理だけだし。

と神主服で欠伸をしながら縁側に座る。そして立てかけられた大幣をなんとなく握る。

特にこれといった理由はなく、ただ単に握っただけだ。

「近接武器に使えるよな…これ。仕込み刀とかあるのかね？」

ペン回しのように大幣を回しながら、再び立てかける。

正直言ってどうでもよかった。

「さて…掃除でもしますか」

何もやることがないと辛い。故に掃除をしよう。

と言うわけで桶と雑巾を持って井戸に向かった。

「よっこら…っと」

腕を振るわせて、桶に水をくむ。

このときに霊力を込めて水をぬるま湯にするのが肝だ。

そうすればしもやけにならず、掃除をした後に床がつめてぇぞカスが！ってならずにすむ。

「熱すぎたら逆に雑巾が絞れないからなw」

雑巾を絞って守矢神社の狛犬を磨く。

仮にも神に仕える身としては、このどうでもいいように見える狛犬も磨くようにするべき。
というか狛犬自体どうでもよくないからな。うつほ物語でも白銀の犬って言われてだな…
まぁどうでもいい。

「ふふん…掃除を素直に出来る人は偉いんだぞ。全く…最近の奴らは掃除をしようとしない…」
「それは部屋を掃除しない私に対するあてつけですか…ケホッ…」

弱々しい声が聞こえた。振り向くと、目をうつろにして冷えピタを貼っている早苗。
ピンク色のパジャマを着てサンダルを履いている。

「おう早苗、体は大丈夫か?」
「鈴仙さんのお薬のおかげで、一応歩けるようにはなりました…」
「ふむ……」

早苗に近づいてまじまじと見つめる。
んでもって頬に手を当てて、熱を確認する。

「…冷たい…」
「お前が熱すぎるんだよ、あ〜まだ37度くらいだ。今日も休んだほうが身のためだぞぇ?」
「いいんですか…?大学生さんだけに任せるのは…」
「アホ、それでお前が無茶してぶっ倒れてもらっちゃ俺の仕事が増えるんだよ。休め休め」

ぶっちゃけ早苗がぶっ倒れちゃ何か寂しい。
というより愉快な早苗がここまで弱っちゃ、こっちも調子がくる

うっての。

「じゃあ…お言葉に甘えます。御免なさい」
「いいってもんよ。これも鍛錬なのである。貴様は休んでおれ」

早苗が自分の社務所…あーもうめんどくさい、家でいいや。家に戻った。
俺はそれを見届けてからもう一度掃除を再開する。
あれ？しめ縄がほつれてる。結びなおさないと。

「えっと…藁の編み方は…見よう見まねだが大丈夫かな…こうしてこうして…しめしめっと…
あ、ほどけた。もういっちょ…しめ縄しめしめっと…よしできた」

ふむ…我ながらいい出来だ。
あとはしめ縄をもとあった場所に戻す。

「ふぅっと、神社は広いねぇ…高校の時の掃除時間とは大違いだ」

高校の掃除は教室を箒で掃くだけでハイ終了。
だったが、神社はそうは行かない。
枯葉は集めて固めて置いておく。
他にも狛犬、手水舎、賽銭箱、鳥居一（飛んで磨く）など
ほとんど人の目が着く場所は掃除することになる。
これを週一に早苗はこなしているのだ。

「あいつの苦労が分かるねぇ…俺も今度手伝おう」

家に戻って飯の準備をすることにした。
ちなみに飯は普段からの俺の仕事だ。

米を洗い、釜に入れて水を入れる。
この水はろ過された綺麗な水だ。品質は俺が保証する。
弱アルカリ性の硬度の高い水。体にいい水だぞ。

「始めチョロチョロ後パッパ。っとな」

次は豆腐だ。早苗の奴は以外にも豆腐の冷やっこが好きらしい。
低カロリーやらなんやらで進めてくるが、人妖にカロリーもクソもあるか。
まぁ早苗用に一個作ってやるか。

ったく、んで?後は消化にいいおかゆでも作ってやるか。
…ん?おかゆってどうやって作るんだ?
まぁ簡単に言えばあれだ、ドベドベ飯。つまり水を増やせば出来るのか。

「だが流石に味のないおかゆをはいどうぞで食えるわけないな…」

仕方ない。おじやにしてやろう。

まずは適当にダシをとって……こういうときは粉末だしとかがあれば簡単なんだけどなぁ。

んで、その間ににんじんと大根としいたけを…小さくきるっとな。

で、まず土鍋にさっききったにんじんと大根投入。水を入れて煮る。

煮だったらしいたけ投入。お？おかゆが出来た。まぁ最後に入れよう。

今入れたらドベドベ飯どころか液体化しちまう。

「しょうゆ～た～まごっと」

若干白身があったほうが色合い的にもいい。

そしてこれを、どんぶりに移して、おかゆを投入。

最後にスプーンで混ぜたらできあがりっと。

「ふむ…ダシの味が薄かったかな…まぁ仕方ない」

後は体の温まる味噌汁を3人分。飯を炊いて適当なおかずを作れば飯は完成だ。

「早苗…起きてるか？」
「あ、どうぞ」

襖を開けて、飯と薬が入った盆を早苗の枕元に置く。

「おこしちまったか？まぁそれはそうと、飯だ。消化にいい物を作ったからな」
「器用なんですね」
「何を言う、大学生たるもの飯を作れなくては自立は出来ん」
「でも、寝癖は治ってませんよ？」
「寝癖は気合で直すものだ。女には分からんだろうがな。ほれ、体起こすぞ」

早苗の体をやさしく起こす。
病人をいたわる位のやさしさは必要だ。だがＤＱＮは死ね。風邪

こじらせて死ね。
ＡＱＮは重宝すべき存在だが。

「本当に何から何まで御免なさい。この借りは一生かけて返します」
「いや…ほとんど不老不死なんだけど俺…」
「私も一応現人神ですから」
「じゃあほとんど死なないじゃん」
「分かりませんよ？……おいしそうなおじやですね」
「さあ食え、俺の自信作だ。麻薬成分があるほど美味いぞ」
「やっぱり食べるのやめます」

嫌々食べた早苗だが、結構おいしかったそうか、目を丸くした。

「おいしい…」
「綾波を意識したのか？今の台詞」
「純粋においしいんですよ。お母さんの味ですね」
「お前の母親は麻薬を作ってたのあじじじじじじじ…」

熱々のどんぶりを目玉に押し付けられた。
冗談も通じないのかこいつは。

20．看病する際は衛生上に注意し、消化にいい食べ物を渡しましょう（後書き）

こぼれ話

うどんげ「貴方は誰？」
ゲンドウ「ゲンドウだ」
うどんげ「……ふざけないで」
ゲンドウ「ふざけてなどいない」

ゲンドウウドンゲ。回文だぞ。
感想欄で知った。

21．自らを変える事によって新しい発見があるかもしれません

「うおあああああああ！！！？？」
「大君～！まってよ～！」

俺は今何をしているかって？
そうだよ、フランから逃げてるんだよ。
いきなり弾幕ごっこをしようだとさ。
確かに俺もそれには同意した。
だがこないだの死闘と比べて段違いに弾幕が濃い。
と言うより確実に俺を殺しにかかってる。

「ちょっ！タンマ！！タンマ！！！やめろ！！死ぬ！！！殺される！！！！」
「大丈夫だよ～、ちょっと痛いだけだから～」
「お前は医者か！！あるいはドクターか！！ＵＮオーエンは彼女か！！！！」

半泣きになりながら全力疾走でフランの部屋を飛び、転がり、走る。

「やっぱりすばしっこいと面白いよね！」
「俺は悲しい！！怖い！！死ぬぎゃあああああああああああああああ！！！！！フゲッ！」

背中が爆発して地面に叩きつけられた。

さて、今俺は何でこうなったか、簡単に説明しよう。

1. 早苗が風邪から復帰し、いつも通りの生活に戻った。

←

2. さて、今日ものんびり過ごそうか。

←

3. ん？手紙だ。紅魔館から？何々…

←

4. ふむふむ…フランの世話をちょっと頼む…とな？お安い御用だ。

←

5. フラン「弾幕ごっこしようよ！」俺「そういえばやるのは久々だな、やろうか」

6．ボコボコ。普通の人間ならシリアスモードで死んでた。

←

と言うわけだ。早苗は張り切って人里に信仰活動に向かっている。
病み上がりだから無茶するなよ～っと、一応釘は刺した。
まぁそんなこと、早苗が聞くはずがない。と言うか…奇跡で風邪くらい治せよ。

「…大丈夫？」

フランが見よう見まねで俺に消毒液を塗る。
ほっといたら普通に再生するがフランが直してあげると言うから

治療してもらっている。
まぁこれも一部の情緒安定と言うわけさ。人を思いやることで成長する。

ってスクールカウンセラーのプリントに書いてあった。

「大丈夫だ。問題ない」
「でも…怪我しちゃったよ?」

心臓を握りつぶしたお前が言う台詞じゃないと思うが。

「そうやってフランが俺を治してくれるだけでも俺は幸せもんだ（遠い目）」
「…何かあったの?」
「いや、夢に見た瞬間だから若干感動している」

フランと仲良くなること、それは…まぁあれだ。
その手の道を行くものなら誰もが夢見る瞬間だろう。

と、涙ぐんだ瞬間、突き刺さるような激痛が背中を襲った。

「あだだだだあああああああぁ!!!??」
「わぁ!?大丈夫!?」

涙ぐんだ涙を数十倍の量を流しながらフランの手を見る。
血がついてる…ってお前まさか…

「傷口ほじくった?」
「…うん」
「マジヤメテ、シヌ」

ちくせう。俺の再生能力だって無限じゃないんだぞぅ。

フランと遊んで数時間はたっただろう。
俺にもよく分からん。なんせここにゃ時計がない。
時計があったとしても俺は見ない。
なぜかって？知らん。

「…はぁ……疲れた…死にたい」
「駄目！」
「冗談だよ「大学生君、ちょっといいかしら」お？咲夜さん。どうしたのかね？」

フランの頭を軽くなでて、咲夜さんのところに行く。

咲夜さんは俺が来たのを確認すると、フランの部屋の扉を閉め、いつの間にか外に来ていた。これが能力か。すごいな。
庭で美鈴さんが聞き耳を立てているがあえて気にしないことにしよう。

「妹様の件で、少し話が…いいえ、すこしアドバイスをいただきたいの」
「ほぇ？」

フランの件か。まぁ咲夜さんが言う分だから結構なことなんだろう。

と言うか咲夜さん…来客を数時間放置ってのもどうよ。

水でも茶でも菓子でも出してくれたらうれしいのだが…

「アドバイス？……まぁ今後あんたもフランとの付き合いも多くなるだろうしな…いいけど」

俺の知っていることは、フランの血肉以外の好物、主に好きな趣味。

好む服装などなどだ。性格はまぁ温厚。

「……お願い。メイドとして何か役に立てることが…「待ちな咲夜さん」…？」

だーめだめだ。貴様はフランの気持ちを分かっていない。

「ええか？フランはお堅い態度が嫌いなんだ。こないだフランに聞いてみたんだが

咲夜の態度は堅すぎて気に入らない。と言っている。それにフランはレミリアとは違う。

同じ吸血鬼だからといって身分にこだわるような奴ではないし、カリスマもない。

その辺をよく考えてみろ」

俺の言う台詞にメモを取りながら咲夜さんは聞く。

俺は先生ではないぞ。

「つまり…妹様「ん？」…フランドール様「なんだって？」…フランはどうして欲しいの？」

少し考えて、俺は再び口を開く。

「とりあえず姉妹で敬語とタメ口を使い分けてみたらどうだ？」

「そ…そんな器用な事…！」

「まぁ今出来なくても、少しずつ努力してみろ。

あ、もしレミリアにタメ口の事がばれたら、俺の命令だと伝えとけ。

宣誓書を書いたら本当だって分かるだろ？」

さらさらっと紙に宣誓書を書く。

「ホレ、じゃっ俺はそろそろ帰るぞ、フランによろしく」

「ええ…ありがとう…」

「あと、最後に一言」

ぴくっと、浮かんでいる俺を見上げる咲夜。

「さっきのアドバイス、半分以上は適当に言った」

「帰れ！！！！」

ナイフがたくさん飛んできた。

時を止めて回収するそうだが……なら投げるなよといいたくなる。

と言うわけで一本拝借することにした。

その後、咲夜はフランに思い切った態度を取り、見事フランの心を掴んだという。

このことは文文。新聞にも取り上げられた。

「えーっと…何々…悪魔の妹、４９５年ぶりに外に出る…マジかよ…」

次の日

「朝起きた場所場所が旧灼熱地獄か…ついてない…」

辺りが業火に包まれて、見渡す限り火の海

何で俺はこうなったのか、朝起きたらここにいたんだ畜生。

見当はつく。ＢＢＡめ…

「やれやれ……暑いのは苦手だっての…」

『久々の人間さんだ』

「我を呼ぶのは何者か（神奈子風）」

灼熱地獄に住む地獄鴉…だっけ？霊烏路空（れいうじうつほ）。
あなた誰？と、手に持ったバスターっぽい奴を頭に当てて首をかしげる。

「地上から来たって感じの服着てるね」
「いずれにせよ、俺は自ら望んでくるほどMではない。返して頂けないか？」
「でも、最近神を食べたから、その力を試したいんだけど…」

紫…お前まさか、異変が起こる前の下準備じゃないだろうな…
でも、こいつを倒せば返してくれるんだろ？
逃げるか倒すか…逃げたところで灼熱地獄のど真ん中…逃げられない。

「空、俺は腹が減ってるんだ」
「私もおなか減った。だからあなたを焼いて食べる」

うにゅ～！っとぴょんぴょん跳ねる空。
コイツは相当な聞かん坊だな。

「なるほど…引く要素はないってか」
「っ！？…すごい霊気と妖気……」

互いに身構え、戦闘態勢に入る。

「使用カードは3枚、いいな？」
「もちろん」

これ…負けるんじゃないのか？

21．自らを変える事によって新しい発見があるかもしれません（後書き）

こぼれ話

ちょっとしたキャラ説明。

守矢神社に住まう浮浪人

大学生（Ｄａｉ－ｇａｋｕｓｅｉ）

職業　無職
能力　不明　＊１
住んでいる場所　守矢神社　＊２
種族　人妖
人間友好度　高

風神録異変の最中に突然現れた人妖。
特に誰を襲うわけでもなく＊３守矢神社に飛んでいった、いわゆる浮浪者。
幻想郷に来てからもこれといった予定もなく、今日も幻想郷を飛び回っている。

その割には他者との交流もしっかりしているそうだ。
人里にて上白沢慧音の寺子屋で子供たちの世話をしたり博麗神社に遊びに行ったりと、行動範囲は広い＊４

しかしその実力は博麗霊夢を下す程であり、
本気で怒ったことはないが、
本気で怒ると山は吹き飛ぶだろうといわれている。

余談だが姑息な手を使うこともしばしばあるそうだ。

性格

大学生という名だけあって、基礎以上の学力を持っているそうだ。
しかし精神年齢が余りにも幼すぎるため、結果的に宝の持ち腐れとなる。

妙なところで頭が働き、妙なところで実力を発揮する。

ちなみに料理は上手だが、主に投げるそうだ＊5

能力

不明である。幻想郷の賢者曰く人が誰もが持つものが増幅しているそうだ。

疑惑

外の世界の人物、『碇シンジ』＊6という人物に憑依していた説がある。
その噂の発端は『霧雨魔理沙』だが、彼女も行方不明なった記録がある。
彼女曰く、碇シンジとは交友関係があり、友人関係になったそうだ。
しかし噂は噂。信じるか信じないかは自由である

＊1　複数持っているのかどうかは不明である
＊2　居候しているそうだ
＊3　フラフラと現れ、目的がないような顔をしている。実際私も見た。
＊4　この幻想郷縁起を書くのを手伝うこともある。
＊5　味噌汁であろうが揚げ物であろうが、本当に投げる。
＊6「えヴぁんげりおん」というロボットの操縦士らしい。

21．自らの記憶力は大事です

燃え盛る灼熱地獄で、対峙する影が２つ。
大きな翼を生やした妖怪、霊烏路空。
どう見ても一般人にしか見えない人妖、大学生。

「……１０、９、８」
「…（ゴクリ」
「７…ヒャア　ガマンできねぇ！０だ！」
「へ…うわぁぁ！？」

不意打ちマススパークに巻き込まれた空は灼熱の炎に消えたのであった。
力量で差があるなら、常識にとらわれない弾幕で挑むべし。
早苗の教えが生かされた瞬間であった。

「ま、ざっとこんなものか」
「いきなり不意打ちなんて卑怯だよ！！」

さすがラスボス。ＥＸレベルとは言わないがタフだ。

「もう…許さないんだから！！！」

空が腕を高々と上げて、突然発光した。
それもかなりの明るさ。思わず目を瞑る。

「うぉっ！？何だ！？ドムの拡散ビームか！？」

目を開けると、俺の目の前に黄色い弾幕が襲い掛かる。
だが、右と左の間に大きな隙間が見える。
そこが安置だな。

「あらよっと……うぇっ！？」
「核熱『ニュークリアフュージョン』」

空の一枚目のスペル、ニュークリアフュージョン。
核エネルギーを爆発させた後、辺りを埋め尽くす弾幕を撃つ鬼畜じみた弾幕だ。
というかお空の弾幕はたいてい鬼畜。お燐も大概だが…

「とっ！いうっ！か！！地霊殿の弾幕は皆鬼畜っ！！おわっ！！！」
「逃げてばかりじゃ勝てないよ！！！」
「うっせ！！！あもうめんどくさい！！！」

これは本当に面倒かつ疲れる。精神使うわ目はちかちかするわ、疲れるわで最悪だ。
東方の弾幕は上から見るからこそ美しさが分かる。
確かに妖夢の弾幕は桜がまうからふつくしい…
だが豪快さが売りの魔理沙や俺はどうだろう。

正面から見たら、ただの光の塊だ。
美しさのかけらもない。

「つまり勝てるはずがない。つまり逃げるべし！！！！」

くるりっと音を立てて、明日の方向へと走り出した。
それを素早く察知した空は、案外遅いスピードで俺を追いかける。

「こらぁ～！まて～！！」
「待てと言って待ったらどうするのだ？」
「食べる！」
「待たない！！明確に待たない！！！！圧倒的に待たない！！！！積極的に待たない！！」

食べられるために待つバカがどこにいるか！！！！
と、しばらく無頓着に弾幕を避けながら走り続ける。
何故飛ばなかったのか、自分でも問いたい。

「うおおおおおおおお！！！逃げろおおおおおおおおおお！！」
「まてーーーーー！！！」

地霊殿

「はぁ…はぁ…早いよ…」
「ぜはー！ぜはー！！ちょっ…タンマ…少し休もう…な？」

灼熱地獄を出て、地霊殿まで走り続けたそうだ。
お空も最高速でずっと飛び続けて疲れているそうだ。

「ぜは～…ふぅ～…ここはお互い停戦としようじゃないか…な？」
「はぁ…疲れた～……で…何で追いかけてたんだっけ…」
「えっと……なんだったっけか…」

灼熱地獄でお空とであって…走った？
ああ、海岸をお空と一緒に的な？…でもお空とそんなに交友あったか？
というか初対面だったよな……

で、ここが地霊殿。恐らくこの奥にあるでっかい屋敷がさとりさんの家だろう。
というか地霊殿地霊殿って言うけど地霊殿がどんな場所かよく分からん。
鬼がたくさんいて…お燐とお空とさとりさんとこいしちゃんがいる。くらいしか覚えてない。

「まぁいいや。せっかくだからさとりさんに会いたいんだけど」
「いや、意味が分からないよ」
「いいんだよ、さとりさんなら俺が生粋の善人だって分かってくれるはずだ」
「そうなの？すごいね君」
「俺は大学生、童貞だ」
「うにゅ？どーてー？」

おっと、純粋な女の子にこの言葉は禁句だったようだ。
まぁいいとしよう。多分原作のような妙なカリスマはないだろうし。
大丈夫じゃないかな。うん。
「じゃあ行こう！」

ぴゅーんっとお空が逆方向に飛んでいった。
…なるほど…裏口が…いや、灼熱地獄まっしぐらに飛んでいくぞあいつ。
「おーい、お空さん？そっちは屋敷じゃない…行っちゃったのかー…」

あいつ…まともに屋敷に帰ってるのか？
何か心配になってきたぞ。

「ま…いいか」

とりあえず地霊殿に向かうことにした。
途中お燐みたいな奴（というよりお燐が）灼熱地獄に走っていったが気にしない。

だが…さとりさんか…この言葉も読まれてるんだろうな…

『ええ、もちろんですよ？私の屋敷に何か御用でも？』
「あー…なんだ」

扉を開けて出てきた人物は、ピンク色をベースにした服装の女の子

古明地さとりさん。心を読むことが出来る妖怪として知られている。

「あなたが来た理由はもう分かっています。災難でしたね」
「それほどでもない。俺にしちゃ…って分かってるなら聞くなよ」
「社交辞令というものですよ、大学生君。地下でもかなり有力妖怪として見られていますよ」

マジか

「マジです」
「ふーん…どんな評価？」

と聞くと、さとりさんはやれやれと呟きながら話し始める。

「やっぱり知りませんでしたか、分かりました。話しましょう。大学生君は、星熊勇義さんと交友がありますね？」
「まぁたまに飲む仲だな、実際こっちに来るための交通手段がないから」
「その鬼が、一度でもいいから一騎打ちでやりあいたい。と言う人間らしいです」

なにそれめっちゃこわい、圧寒ものだわこれ。
そういえば、あの時も勇義さん、気に入った！って言ってたからな。

「すまない、帰らせてもらおうか、怖い」
「待ってください。少し頼みたいことが…」
「なんだ？」

そう言ってさとりさんが少しもったいぶりながら言う。

「異変を起こす協力をしてくれませんか…？」

21．自らの記憶力は大事です（後書き）

こぼれ話

勇義「はっはっは！冗談に決まってるじゃないか！！」
大学「だったらいいんだけどなぁ…」
勇義「飲み比べならやるけどね」
大学「一気飲みですか？負けんよ！！！」

数時間後

大学「おーう…もうへばったのかぇ～？」
勇義「お願い…もう許しへ……むぐー！！！んー！！！」

23．厄日は年に一度だけとは限りません

待てよ待て待て。
俺に異変を起こす協力をしろだと？
お断りだこん畜生。

「そうですか…やはりそうでしょうね」

さとりさんが俺の心を読んで残念そうな表情をする。
…これって軽いプライバシーの侵害だよな？
いいの？法律的に。

「え…まぁ…あれだ。うん。俺はあれだから。変態だから。うん。異変なんて大層なもの起こせない。うん。手伝えることなどないのだよ」

ええ、私、動揺していますとも。
いきなり異変起こすの手伝えだとよ。そりゃ誰だってびびるわ。

あれだ、朝起きたらいきなり殺し合いしろって言われるようなものだ。

「それに、俺はこう見えても神に使える身だ」

居候だけどな

「居候ですか」

さとりさんが呆れ顔でこっちを見る。

しかしさとりよ、貴様居候をなめてもらっては困る。

「まぁ居候でも一応神主見習いといえる立場だ。ただの人間ではないことは確か。
だから俺はちょいと帰らないといけないんだ、異変に協力は出来ない」

早く帰らないと俺が必死こいてためた貯金がパーになる。
主に出前で。そして無茶して作った諏訪子の米でろ過された水。
任務放棄の軍神あるまじき姿の神奈子の姿を見る羽目になる。

「大変そうですね……」
「他人事だなオイ」

と言うわけで道を教わり、帰路につくことにした。
途中で姉御に会えたらうれしいな。

旧都、秋に一度訪れたがそれ以来訪れていない。
今日も鬼たちが男女問わずに飲み交わしている。

店を開く幽霊、それに入っていく鬼たち。皆鬼だが口調は人間だ。

それに、皆ごついというわけじゃないし、皆が皆、赤いわけでもない。

勇義姐さんのように人間のような肌の鬼もいる。

「お？大学生じゃないか。久しぶりだねぇ！大きくなったかい？」

鬼ごみの中から出てきた勇義姐さんが俺の肩を叩き俺に抱きかかる。

「姐さん！久しぶり…って俺はもう成長期は終わってますぜｗ」

「なんだい？そんな情けない体でよく生きていけるねぇ」

「そういう姐さんも筋肉はついてないじゃないの？」

「女だからね。でもパワーはあるよ？ほら！！」

背中に勇義姐さんの手形をつけられる。

バシイイイイイン！！という音と共に内臓が飛び出そうになった。

「ごへぁっ！！！！……は…把握」

「ふふんっ四天王を舐めた罰さ…で、なんでお前さんがここにいるんだい？」

「旧灼熱地獄からのスタートです、はい」

「普通逆じゃないかい？」

「色々あったのさ…俺にも（遠い目）」

大体…スキマ妖怪八雲紫氏…お前は俺に何の恨みがある…

一度閻魔大王様呼んで来い、リアルの。

「まぁいいとしようじゃないか、出口はあっちだけど、このまま帰るわけじゃぁないよねぇ」

ぜひ帰らせてください、うちの家計のためにも。

いや、帰らせてくれ。頼む。神社がヤバイ。

いや、自惚れじゃないんだ。本当に家事全般は俺がやるべきことなんだ。

でないと…下手したら爆発、良くて部屋一個が悲惨なことになる。

朝の7時以降はまだ信頼できる。俺が朝飯を作って置いているから大丈夫だった。

だから家事は問題なかった、飯問題は解決出来ていたんだが…

だが、今日は目が覚めたらここに居た。つまり飯はおろか、何も出来ていない。

早くしないと空腹で3人の自我がなくなる。

え?ちなみに灼熱地獄に居たときは4時ごろだ。

「…ふむ…失敬。俺はこれ以上付き合えないんだ。時間がない」

「朝早いよ?帰るにはまだ早いじゃないか」

「姐さんみたいに暇じゃないんだよ俺は……」

勇義姐さんの制止を振り切って、穴を登り

シンクロパルパルの後、地上に出た。

まぁその後の事は特に語るべきではない。
飯を投げ、朝食を取っただけだ。
変わったことといえば、諏訪子さんの帽子がきょろきょろしてたくらいだ。

「…はぁ…」
「元気ないね、どしたの？」
「両生類には理解できないだろう…今の俺がどれほど疲れているか…」
いつもより2時間早い起床。
強制弾幕ごっこ
心を読まれるという辛い出来事、まぁこれは自ら行ったんだが。
「……はぁ…もうやだ…今日休んでいい？」
「え？大学生、今日はハクタクの所で特別授業する日じゃなかったか？」
味噌汁をすすりながら神奈子さんが死の宣告をする。
「んな…いけーねえええええ！！！！！まずい！！オイ早苗！！今何時！？」
「9時半ちょいですね」
「なんだ9じは……ん？」
頭を回転させる。えーっとここから人里は飛んで約12分弱
……12分。ヤバイな…ヤバイね…ん？やばいよ。やばいって！！やばいいいいいい！！！？
集合時間、9時40分
「クソぉ！なんて厄日だ！オンドゥルラギッタンデスカーーーーーーーーーー！！！！！！！」
ドォン！！っと足元で霊弾をはじけさせて加速した。

「やぁ、遅かったじゃないか「ドォン」何をする！？」

いや、何故かここで慧音さんを暗殺しろと誰かがささやいたので。
このために急遽拳銃をにとりの家を空き巣したんだぞ。
まだにとりとは初対面だぞ。

「ま…まぁいいだろう…私は上白沢慧音。君が噂に聞く大学生という者だな？」
「ええ、僕がその噂らしい、大学生です。今年で２０歳とまだまだ若者ですがね」
「誠実そうな若者だな。いい事だ」

人間は第１印象で決まる。

まずは第1印象を良くすることから始まるのだよ。

「お褒めのお言葉感謝します」
「では早速来て貰おう。こっちだ」
「了解しました」

慧音さんと共にその寺子屋の教室へと入った。

「よし、皆おはよう」

子供たちは、慧音さんが来たのを確認すると、一斉に席に座った。

オイオイ…高校のクラスよりも精神年齢が高いぞ…

「じゃあ、先生、後は頼むぞ」

慧音先生が後ろの席でメモを取り出す。鉛筆か。
少年たちも鉛筆を取り出す…が、消しゴムはない。
まぁその点は気にすることではない。

「よし！君たち！授業を始めようか」
「せんせー、教科書は要りますか？」
「（お？使うかな…この辺も参考にしよう）」

慧音さんがちょっとぴくっとした。
なるほど、重要なポイントか。

「いや、俺は教科書を使わない。鉛筆も必要ないぞ」
「（…？じゃあどうやって授業をするんだろうか…）」

ふむ…この答えが正解だったようだ。
慧音さんは恐らく黒板を使わない授業を知らないようだ。

「いいか？今の社会で必要になるのは、学力が全てではない」

俺の言葉に生徒は少し首をかしげる。

「だが、強い弾幕を持つ人間になれというわけでもない。
そりゃ確かに、妖怪に食べられないようにするってこともあるだろう。
そこの少年、お前は妖怪に食べられそうになったことはあるかな？」

俺は後ろの席の少年に尋ねる。

「僕は、人食い妖怪のルーミアに食べられそうになったことがある」
「ルーミアか、あいつは見境なしに食べようとするからなぁ…」

俺もルーミアには何度か会ったことがある。
だが、そこまで悪い奴には思えない。

「ふむ…ルーミアに出会ったときの対処方法…オイオイメモるなメモるな」

俺がメモするのをやめさせると、生徒が不思議な顔をする。

「大学生君、どうするんだ?」
「ふっふっふ…なぁに、すぐに分かる、2分ほど待ってくれ」
「?」

寺子屋から出て、人里を出ると、一気に駆け出した。

「あなたはたべて「アチョァアァア！！」にゅっ！？」

「これが実物です」

「「「「うわあああああああああああああ！！！！！？？？？」」」」

「お前は何を考えているんだぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

23．厄日は年に一度だけとは限りません（後書き）

こぼれ話　突然大学生が幻想郷の住民に抱きついたらどうなるか

早苗編

大学生「抱きしめたいなぁ！！！さぁなえぇぇぇぇ！！！！！」

早　苗「きゃあああああああああああ！！？？？」

２４．弾幕ごっこは計画的に

子供はドン引き、慧音さんは怒ることも出来ず、何がなんだかわからないと言う表情。
俺…は、まぁ気絶したルーミアの襟元を掴んで子供に見せびらかしている。

「まぁコイツが先ほどの少年が言っていた、人食い妖怪のルーミアだな。
無論本物、さっき討伐してきたが死んではいないぞ？」

子供たちは青ざめて口も聞けないような状況。
本当につれてくるとは思わなかったのだろう。
慧音さんも若干身構えて、子供たちの安全を確保しようとする。
これは授業が終わったら……頭突きは間逃れないだろう。

「ところで…」

他の奴に比べて、最も怯えた表情の女の子に声をかける。
すると、体をぴくっとさせて、青ざめた表情で俺を見る。

「妖怪を見てくれ、コイツをどう思う？」
「すごく…怖いです…」
「正常だ」

うむ、と首を縦に振って少女をもう一度見直す。

「だが、コイツが妖怪じゃないとしたらどうだ？」

気絶したルーミアの頬をつつきながら、聞き返す。
すると少女は黙り込んだ。まぁ当然だろ。子供に答えられるはずがないからな。

「無理に答える必要はない。この質問は恐らく、お前たちには答えられることは無理だろう」
「「「「「……」」」」」
「何、怖がる必要はない、寝ていれば能力も弾幕も人食もしないんだ。
大体、腹いっぱいのときは起きても人は食わない…と思う。
それにそれで死んだとしても、生と死は等価値だ、死ぬことが絶対的な自由かもよ？」

ｂｙ渚カヲル。あの台詞はちょっと深く考えさせられるなぁ…俺流の解釈だが。

「さて、起きてもらおうか、ルーミア」
「「「「「やめてくださいおねがいします」」」」」

ヘタレだなぁ…次はゆうかりんでもつれてくるか。もちろん戦闘ではなく交渉で。

…ヘタレは俺の方だったようだ。
授業が終わった後、神社に帰ろうとした。
だがその道中、待ち伏せをしていたであろう慧音さんが仁王立ちをしていた。
その気迫、妖気を感じ取った瞬間、俺は土下座と言う選択をした。

「まさか本当に妖怪を…それも寺子屋につれてくるとは思わなかった…覚悟はいいな？」
「よろしくありません、助けてください。本当に」
「……反省はしているな？」
「もちろん」

そういうと、慧音さんが微笑み、５枚の青いスペルカードを取り出す。

「だが、人里の規律を乱す者を簡単に見逃すことは出来ない。勝負」
「あーそうなっちゃうか」

俺も５枚、しかし色とりどりのカードを取り出す。
ゴッドフィンガーを初めとする得意技だ。ほぼ未完成だが。

「血の気が多いね…満月じゃないだけマシか」
「満月の夜だったらその場で殺していたかもしれんな。行くぞ」

何それ激しく怖い。

「はいよ……ふと思ったが連れて来た地点で止めたほうがよくなか

ったか？」
「大人を公開説教するほど鬼畜ではない」
「なるほど…分かった。それでは！ガンダｍ…弾幕ファイトォォォ！！！」
「……」
「言えよｗ…レディィイイイイ！！ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

旧史「旧秘境史　ーオールドヒストリーー」

しょっぱなからのスペルカード。
赤い弾幕を辺りに無造作にばら撒く。しかしなぜ幻想郷の奴らは無造作にばら撒くのか。
弾幕は本来集団の敵に対する攻撃法だ。
まぁそんな量の霊弾を一人に出血大サービスおもっくそばら撒くというのは

下手な鉄砲も数撃てば当たる。

「ほいっ」

まずは目の前の霊弾を体をそらしてグレイズ。
グレイズしたら得点が追加されるが、今は得点の概念などない。

「ほっ…うぉっと！」

次はそらした足元に霊弾が低空で飛んでくる。
それをジャンプして避けるが、避けた先にも霊弾があった。
加えてそれもマトリックス避けをする。

しかし

「上！？うぉっち！」

上を向いた先にまた霊弾。空中で無理な体型を取って、何とか避けた。
その瞬間、周囲を覆う弾幕が突然消えた。

「時間切れだ」

どこか分からぬところに飛んでいた慧音さんが俺の目の前に降りてくる。
コイツ…どこを飛んでいたのだろうか。まぁどうだっていい。
残すところの慧音さんのスペルカードは後４枚。

「ふぅ…まず１枚か…今度は俺の番ですな」
「……カードは使わないか…通常弾幕で私に勝てるとでも思ってるのか？」

慧音さんが少しいらだった表情で俺を睨む。
俺はそれをにやけた表情で言い返す。

「いーや、思っちゃいない」
「ならどうする」
そう聞き返された言葉に俺は顔を青ざめさせて答える。
「それはそうと…あんたは後ろの気配が分からないか？」
「何も居ないはずだ」
ふむ…やはり冷静か。流石は人里の守り神…
「おまえ…分からないのか……後ろだよ……」
俺はその妖気に後ずさりしながら、顔を青ざめる。
「何を言っている…何も居ないはずだ」
慧音さんがまさか、と言わんばかりに俺を見る。
妖気のまがまがしさは、ステルスしている種も居て、わかりにくいケースが多い。
それ故に、例え霊夢や魔理沙であろうと不意打ちを受ける可能性もある。
「鈍感だな…このコースは恐らく人里…それも、中心地に直進してやがる」
「！」
「しかもこのデカさ、異変レベルだな、食い尽くされるんじゃないのか？
その上今は昼、隠したとしても日光やなんやらで見つかる。
今すぐにでも助けに行ったほうがいいんじゃないのか？」

「……里の者が…！」

その言葉に、目を見開いた慧音さんは、迷わずに後ろを向いて駆け出した。

律儀だな。

だがその律儀さが命取りだ。

「……（ニタァッ）　拳銃『砂漠の鷲』」

黒いスペルカード、砂漠の鷲、英語に訳すとデザートイーグル。
いわずと知れたあの拳銃だ。しかし殺傷力は急所でない限り皆無。

もちろん銃自体もオレンジ色の固体を自分で握っているだけ。
まぁそれを突然背中に押し付けられたらどうなる？

「！？」
「ｏｋ。生真面目さん。嘘は見抜こうぜ」
「騙したと言うのか！！！卑怯者め！！！」
「騙される奴が悪い」

そう言ってためらいなく慧音さんの背中に穴を開ける。
当然殺傷力はない。だが激痛は通常弾幕より…というより実銃とほぼ同じ。
ひ弱な奴ならショック死は間逃れないねこりゃ。

「あぐ…があ！？」

その痛みに耐え切れず、地面に倒れこむ慧音さん。
その倒れて、膝をついた足に霊弾を撃つ。
銃身の加速で強化された霊弾はそれをいともたやすく貫く。

「馬鹿め、お前は詐欺師の言うことを簡単に聞くほどお人よしかね？」

「う…ぐぅ…」
「妖怪一匹を見た目だけで判断するでない」
「だ…黙れ…」

まぁ～ったく…

「聞く耳くらい持たないかね馬鹿者！！」
「！！」
「面倒だから一言で済ますぞ！人も妖怪も見た目で判断するな！以上！！俺は帰る！！
あ、でもあれだ、足撃たれたから慧音さんあるけーね……どうしよ」

計画性がない俺、大学生は慧音さんを担いで人里の診療所に連れて行った。

２４．弾幕ごっこは計画的に（後書き）

次の話で誰かの作品様にクロスをしたいと思います。
まぁアンケートをとるので、

その決まった作者様コンタクトを取るつもりです。
でも自信ないなぁ…

※活動報告がエラーで使えないのでこっちでアンケートをとります。

ぶっちゃけ誰の作品がいい？

1．自由枠
2．するな、馬鹿者。

回答は感想、もしくはメッセージでお願いします。
自分の作品を上げてもかまいません。
…まぁカオスになるだろうけど。

25．神奈子さんマジ神奈子。つまり母親に等しい人です

人里の件は、なんとかなった。
俺が早苗と一緒に必死で土下座をしたおかげで、本当に何とかなった。
というか早苗が奇跡を起こしたから許してくれた。

「これからは気をつけてくださいよ！」
「すまない、はしゃぎすぎた」

さすが現人神。寛大な心だ。
普通こんなことしたら勘当、もしくはその場で死刑だ。

「気持ちが沈んでるでしょうね…」
「んなこたーない」
「反省してないんですか」
「俺死のうかな…」
「言い過ぎましたゴメンなさい。でも―」

「大学生さんに怪我がなくて本当によかった……」

早苗はやはり神だった。
でも早苗よ、その言葉、慧音さんの健康状態を度外視してるぞ。

神社に帰ると、諏訪子さんが珍しく俺を出迎えてくれた。
無垢な表情でにかにかと笑っている

「おっかえりー早苗～大学生～！」
「諏訪子さん、どもっ」
「只今帰りました、諏訪子様」

やはり諏訪子様は神だ。ロリ的な意味で

つーか帽子取ったら最早ロリ以外の何者でもない。
ちなみに諏訪子さんは基本的に家の中では防止は被らない。

「なんか大学生が人里で大失敗したってさっき天狗が言ってたけど大丈夫？」
「ぜんぜん大丈夫じゃねぇよったく……」

特別教師↓犯罪者、どの辺に大丈夫の文字が現れるか聞きたい。

「んなぁ…ったく…ホント…最近ついてねぇな…」
「気晴らしに異変でも起こす？」
「んなホイホイと異変起こしてたまるか」
「異変起こすとすっきりするよ！」
「死ねってか？諏訪子貴様俺に死ねと申すか」

異変を起こす。つまり霊夢に殺（バラ）されに行くようなもの。
まぁストレス発散にはもってこいだが、ここで魔理沙が現れた！
ダメージカンスト間違いなしだ。

「するかしないかは大学生次第だけどね」
「するわきゃねぇだろバーロー」

そんな自殺行為など、断固拒否だ。
と、言わんばかりに自分の部屋に戻ろうとすると、
さっきまで寝ていたと思われる神奈子さんが俺の脚を掴む

「そうか？今のお前なら十分異変を起こすほどの力を持っているはずだが
あとさり気に神をまたぐな無礼者」
「ばれてたか」

「お前は神を何だと思っているんだ…」

すると寝転んでいた体を起こし、神奈子さんが外に出る。
それにつられて俺と諏訪子さんと早苗も一緒に外に出る。
昼下がりの青空が幻想郷の町を照らす。

「んん～っと…大学生よ」

「ふぇ？」
「お前はこの幻想郷に来て、どうだい？」
髪をなびかせながら神奈子さんが俺に尋ねる。
「え…ああ。俺か…」
地面に胡坐をかいて、俺も話を始める。
そして片手で、水色の霊弾を浮遊させる。
「俺は霊弾（コイツ）が出せるだけでも満足だよ」
「…ふふ…そうか、お前は気楽だな」
「何せ俺には大学に通う以外、何もない人間だったんだ。
ただ寮に暮らして、趣味の合う友達を見つけてバカやって
先生には怒られずただ真面目に授業を受けるだけの、そんな男」
そういうと、再び神奈子さんが微笑んで、俺の頭に手を置く。
「その生活は満足だった？」
「俺なりには」
「なら、その生活を維持することも大切な事だ」
「…」

「でも、変わりたいんだろう？」
「何がさ」
「無気力だけど、他人に認められたいと思っている自分を」

「あ…まさかw」
「虐められてたんだろう?ずっと、高校に入るまで」
「何でそれを!?」

確かに、俺の記憶はろくでもないものばかりだ。
友達は少なく、いじめの対象にもなっていた。
怖い、悲しい、悔しい。
そんな感情ばかりが浮かぶ。
しかしそんな感情を表に出すわけには行かない。
だから俺はずっとその感情を抑え続けていた。
何度か自殺を志願した。だが勇気が出ない。

「う…」
「努力が報われず、嫉妬していた」

何時の日か、そんな感情は消え去っていた。
しかし数年後、その感情は殺意へと変わる。
自分が認められない、自分だけ努力している、本当は何もしていないのに。
俺を見ない相手は皆死ねばいい。
いずれ殺す、ずっと思っていたことだ。
でも俺は実践できなかった

「悔しかったんだろうね、でも周りには自分を見る人なんていない、そうじゃないかい?」
「おいおい…冗談はよしたまえ…」
「でも、大学に入ったら、心のよりどころが出来たんだろう?努力が報われたんだね」

大学に入ったら、少ないけど友達が出来た。
唯一の救いだったんだねこりゃ。
高校のときも少なからず友達はいた。
でもそいつらもどうせ裏切ると思っていた。

皆死ねばよかったんだ、どうせ裏切られる、皆裏切り者だ。
でも…やっぱり…裏切られるのが怖かった。
だから皆に好かれる人になりたかった。
親からも友達からも…皆に好かれる奴にならないと。

そう思ってた。

「人間不信」
「！！」
「まさにその言葉に尽きるよ、昔のお前は」
「やっぱ、駄目人間だな」
「何を言う、馬鹿者」

ぽん、と、神奈子さんが俺の頭を叩いて、俺を見おろす。
その顔はとても優しく微笑んでいた。

「我が言おう、苦労している人間を見捨てる神など居ない。
例え努力していなくとも、やる気がなくとも、その心が痛んでいるなら
我はその人間を照らす太陽となろう」

その言葉は、ずっしり重く
俺の心に重く響いた。

「…あれ…ｗ…おかしいな…何も感じてないのに…アイボンもってこい…前がかすむ…」

数年前まで、溜め込んでいた涙が
なぜか俺の頬を伝って、地面に落ちる。

「いじめの記憶を掘り起こしてすまないね、大学生」
「……ぅ…くそう…我輩がこんなところで涙を零すとは思わなんだ…貴様できる……」
「神となると、人の過去まで見え透いてしまうからね……本当にす

まない」

さすが神…人の貯水口を開くか。

「でも…やっぱ俺……あんたたちが居なかったら……俺…」
「人は一人で生きられないものだよ…早苗も昔はそうだった」
「親元はなれて…一人になって……初めて……寂しかったんだな…
うん…そうだ」

何もかもやりきれない気持ちになって俺は神奈子さんに泣きついた。
そして、母親に泣きついた少年のころを重ねながら、涙を流し続けた。
しかし俺は母親の姿も、名前もすっかり忘れた。

何を俺はこんなに恐怖していたのか。
心を開けなかったのは俺だった。と思う。
神様の前だと正直になる。
特にこんな接しやすい神様の前ならなおさらだ

――よしよし、強がるのは疲れただろう？これからは、甘えなさい――

――じゃ…じゃあ…言葉に甘えようではないか……えっと……母さん――

――か……全く…素直だねぇ――

で、うまく言いくるめられて、結局異変を起こすことになったのであった。

26．異変を起こす。それは迷惑です

ここは闇、黒い世界。しかし全てが黒い訳ではない。
星が浮かぶ。月で生きる者。月の民…そして、一人の天使…使徒である。

使徒、アダム。そのアダムの遺伝子を持つ作られし使徒、タブリス。
そのその名を通称『渚カヲル』と呼ぶ。
彼は世界の絶望をこの目で見た。いや、世界の絶望を作ったと言うべきか。

自らの命を、一人の少年に捧げ、その少年の望みにより、世界を絶望へと導かせた。
あるいはその運命こそが人類の正しい道だったのかもしれない。

しかし状況は変わる。その運命を変えるべく、
何らかの理由により、少年の魂が他者の魂へと上書きされた。

その魂は…絶望の世を（悪い意味で）愉快にした。
と言うより…カオスにした。

「カオスは人の力さ…彼はそれを教えてくれた…」

桃を切りながらその使徒、渚カヲルは呟く。

カヲルが目覚める場所は決まって月面の表面だ。

しかし、拠点としている場所は、月の都そのものである。

でないと寒いらしい。目覚めるときは全裸だから。

「……彼は幻想郷で何をしているんだろうね…碇シンジ君」

「幻想郷……」

月の兎、それも脱走しようとしている兎の呟きを、彼は聞き逃しはしなかった。

「やあ、こんにちは。兎さん」

「あ……な…渚様…」

その兎、後にレイセンと呼ばれる兎である。

数ヵ月後　幻想郷ー守矢神社。

「……ぐが～…ぐぉ～……んぐぁ～……『ジリリリ…』うっせ目覚まし『サーセンw』」

あ…もう朝か…もう朝だと言うのか…咲夜さんちょっと時止めて。
２４時間くらい。

「だがそんな現実には逆らえない」

と言うわけで体を起こす。頭がボーっとする。
朝の醍醐味と言うべきかそうではないのか。
しかし俺は起きなければいけない。

「よっ（グシャ）ハッ！（ゴシャッ）とぉいや！（ボンッ）ほれ出来上がり」

飯を置いて、自分はパンを押し込んでＫＥーＮＥ牛乳で流し込む。

普通の牛乳とはちょっと違う。そんな牛乳。

「ふー…さてはて…そろそろかな…」

夏を迎えた幻想郷には、決まって異変が起こる。
つまり、一個異変が起こるとしよう。
そこで現れるのは博麗の巫女、霊夢。

そして次に起こる異変、それは、緋想天。
緋想天異変は博麗神社が天子による局地的地震で崩壊する。
それにより霊夢の精神状態が不安定になる。
つまりその弱った状態の霊夢ならしとめることが出来る。

流石に霊夢や他の奴を殺すまではいかない。
だが、少しでも痛めつけて、俺の強さの糧となれ。
そして朝早く、夏を迎えた幻想郷の空を飛んだ。

しばらく空を飛んでいると、おおなんと運のいい。
神社が音を立てて崩れていく瞬間を目の当たりにした。

「つまり今日か。緋想天」

苦節数週間。
夏を迎えた。そのたびに同じコースを飛び続け
同じ時間に同じ見かたで同じ角度で博麗神社を見下ろした。

「ははっ。やっと潰れたか博麗神社」
「いきなり何不幸なことといってるんだ？……って…こりゃ酷いな…」

いつの間にか俺の隣で滞空している魔理沙が同じく神社を見下ろす。

「異変って奴だな…これ」
「ああ、これ、絶対異変だぜ」
「そういえば俺も異変起こすんだ」
「へーそりゃ……は？」

一瞬魔理沙の目が点になって、箒から落ちそうになったが姿勢を正して俺に聞き返す。
いちいち動作が可愛いんだよ畜生。

「いや、異変起こすの」
「そうか、私の聞き間違いか？」
「あなたの使用している耳は正常です」

俺の指摘に魔理沙は正気を取り戻し、さっきの表情とは間逆の表情をする。

「なんだと」

「3回目、異変起こすの」

…………………………………………空間停止……………………

「あーそうか…………はっ！！」

「あぶねっ！いきなり何をするか！」

不意打ちとは卑怯者！

勝負はフェアプレイだろうが！

「異変解決屋の前で宣言するとはいい度胸だぜ！」

「面白い！第1ステージのボスが魔理沙とはまた斬新！！やってやろうじゃないの！！」

「お前は外の人間だよな、そしてシンジを知っている」
「ああ」
「あいつの男気を見習おうとは思わないのか？」

魔理沙が俺を睨む。
だが俺は笑う。

「いやｗあいつクソヘタレじゃねぇか「黙りやがれ」はい」
「こちとらお前の馬鹿さ加減にすこぶる腹が立ってるんだ」
「住まぬが俺は何もした覚えがない」

すると、俺の周りが霧雨に包まれた。
霧の雨…魔理沙の気質だったな。

「洗濯物が乾かないんだよ！！！！！！マスタースパーク！！！！」
「しらねぇぇえぇぇよ！！！！！！！！！ゴッドフィンガー！！！！！」

互いのスペルカードを相殺する。
しかし魔理沙は即座にもう一枚のカードを取り出す。
俺も取り出す。

「だから八つ当たりだ！！異変解決にはもってこいだぜ！！！スターダスト！！」
「八つ当たりがお仕事ですか！！！！！すばらしい職場ですね社長！！！ＡＴフィールド！」

ここまでスペルカードを消費するとなるとコストがえらいことになる。
だが、この戦いは誰も見ていない。だから監督必要なし！
この異変は霊夢もゆかりんも出撃しているしな。
つまり

「あ――」

一気に間合いを詰める。

背が低い魔理沙は突然目の前に現れた俺に驚いて動きを止める。

「おｋ、魔理沙捕獲。処分する」

「は…離せ！！！はな…がっ……う…やめろ！！やめ…ガハっ！！」

そして、魔理沙の首を両手でわしづかみする。

人妖特有の妖力で握力は半端じゃない。

「首締めだ。原始的かつ有効な技」

「…あ…が……っ……」

ミニ八卦炉を落とし、箒から手を離し、てをだらんと下げる。

どうやら意識を失ったようだ

「まぁ、死にはしないよ。せいぜい１０分くらい気絶するだけだ」

ちなみにこの首絞め技術は神奈子さんから伝授した技だ。
殺さずに相手に恐怖感を与える技。
あの状態で３０秒ほど締め続ければ相手は死ぬより苦しい状態で捨て置くことが出来る。
それにプラス５秒で殺せる。

「まぁ…これで人里の人間を全員気絶させたら…異変だわな」
「ぐ……まさかお前…里の奴らを全員殺すつもりじゃ……」
「だぁれが虐殺するって言った」

俺は意識が朦朧としている魔理沙を離す。
魔力を失って浮力も同時になくなった魔理沙はそのまま落下する。

「俺はただ、今の混乱に乗じて異変をプラスαするだけだ
いずれ天人側も動き始める。今度は本格的にな」

つまり、外の世界風にいうと

「同時テロ、だな霊夢はどっち側に動くか…」

26．異変を起こす。それは迷惑です（後書き）

こぼれ話　突然大学生が幻想郷の住民に抱きついたらどうなるか

フラン編

大学生「ひゃっはー！！フラーン！！！」
フラン「ん？ヒャッ！？へ？え？ふぇ？……ふふ…」

大学生「やさしくぎゅーってな」
フラン「うん！ぎゅー！」

大学生は圧死しました。

27．無関係の人を巻き込まないようにしましょう。主に白玉楼

「しかしながら、この状態、誠に危険だな」

そういって冥界ルート一直線に飛び回る俺。

自分自身も何故ここを飛び回っているかはよく分からない、当然死んだわけでもない。自らこんなところに入るような暴挙はしない。

うちの三姉妹ならぬ墓の三姉妹を追っていたら何故かこんなところに来た。

「しかし噂には聞いたが長い階段だな…」

暗い階段、しかしその周りは石灯や自縛霊などの明かりで意外にも明るい。

しかしさっきまで明るかったのに急に暗くなった。

これが異変の象ちょ…寒っ！！！？

「なんだ…？急に冷えてきた……雪まで降ってきやがったよちきしょう」

こりゃ早い所屋根のあるところに行かないと凍る。

と言うより風邪ひく。寒い寒い…

というわけで一気に最上段に上って、たどり着いた場所がここ、白玉楼。

簡単に言えば幽々子様のお屋敷だ。やたらとでかい上に桜まで咲いている。

…桜って春に咲くものじゃなかったか？いや、この気温じゃ冬か…いや夏だよな？

少なくとも秋や春ではないことは確かだ。

「どでかい桜だな……」

「西行妖。幽々子様がとても気に入っておられる桜です……で、何か御用ですか？大学生さん」

「おや妖夢さん、お久しぶり」

俺の隣に立って桜を眺める妖夢。

俺と妖夢は一戦交えた仲と言うだけあって、敵視はしないようだ。

「お久しぶりです。お元気でしたか？……にしても…良く結界の中を入れましたね」

「墓の三姉妹を追ってたら、何時の間にやらあの世にお呼ばれされてました」

「え…？でもほら、この通りあなたに触れることは普通に出来ます

よ？」

そういって妖夢が俺の手を握る。

「あ、そうだ、追ってる途中に何かにぶつかったような……」

「不思議な人だ…」

「不思議なのはお前の周りをまとわり付いているもう一つの体だと思うが」

「半霊ですよ。可愛いでしょう？」

「自己愛者「失礼な」すまぬ…まぁふよふよ浮いてるのは、かわいいっちゃかわいいな」

確かに自分を慕うように周りを飛んでいる物体は、結構かわいい。リグルを除く虫はお断りだが、猫とか犬とかが自分の隣を引っ付いてくれるのは悪くない。

「でしょ！貴方だけですよ…彼女をかわいいといってくれるのは！」

「そりゃ…言う奴も居ないだろ…皆霊なんだから」

と言うわけで白玉楼に案内されて、俺と妖夢は幽々子さんと対面することになった。

さて、実際にあって見たい東方キャラベスト１０に入る幽々子さんとの対面だ。

フランクに行くぞ（カシャッ）

Ｓｔａｇｅ２　～守矢の従者と西行の主～

白玉楼、雪の降り積もる一軒の豪邸だ。
その屋根の下でふよふよと飛び回る一人の幽霊が居た。
その名は西行寺幽々子、この豪邸の主だ。

「幽々子様、只今戻りました」

その挨拶に気付いた幽々子さんが用務に向かってゆっくりと飛んでくる。
そして、ふわりと地面に降り立った幽々子さんが「ご苦労様」と妖夢に一言伝えて
俺の方をまじまじと見つめる。

「貴方が噂に聞く、鳥人族の…碇君？」
「激しく不正解です」
「……あ、外の世界の大学生君だったわね？私は西行寺幽々子、以後よしなに」
「俺は大学生、童貞だ」

握手しようとすると、手を握ることが出来た。

「えっ」

「よろしく、童貞君。積もる話もあるだろうし、中に入りなさいな」

ゆ…幽霊って触れるのか…？と、常識が崩れ去りながらも、白玉楼の中に入る。

その建物は、随分と広く、そして綺麗だった。

そして温かみのある部屋の中で、俺と幽々子さんと妖夢は二人で

話している。

「聞いたところ、童貞君は異変を起こしているそうね」
「もう情報が届いてるのか？」
「ええ、少し前に紫から情報を、魔法使いを首を絞めて半殺しにしたそうね」

なるほど、ちょっと表現がオーバーだがあながち間違ってはいない。

「は…半殺しって……大学生さん…確かなんですか？」
「半殺しにしてはいない。ただ気絶させただけだ」
「そうね、気絶させた。でもそれが紫にとって許すことかしら…？」

突然漂う殺気。その気は幽々子から発せられていたものだ。
凍りつくような空気、それに対抗するように俺も妖気を出す。

ちなみにその気を2つ、サンドウィッチ状態で受けている妖夢は

「ど…どうしたんですか…？2人とも」
「悪気はないけど、紫の頼みなのよ。貴方が来たら、倒しなさいと言うね」
「ほぅ…一応軍神の建御名方神の手ほどきを受けた身だ。そう簡単にやられはせんよ」

祟り神の方はずっと観戦していただけで何もしなかったが。

「そう？ならその戦術、この目で見ましょうか」
「ｏｋ」

「スペルカードは…任意に応じて使い分ける…」
「そうねぇ、基本中の基本よ」

庭に出た俺と幽々子さんと妖夢。
しかし妖夢は基本的に観戦役。
誤って幽々子さんが俺を本気で殺しにかからないようにするためだそうだ。

「……本気で来ないならこっちのもんだ」
「弾幕は本気を出すけどね」

「やっぱ無理かも」

スペルカード枚数は無限。
双方体力の限り戦うそうだ。
冷帯に攻撃を当てることは、さっき握手したことによって可能と判明した。

「……紫も恐れる能力……一体どういう能力かしらね…」
「こりゃ、死ぬ気で望まないと死ぬな…」

時間も限られる。妖夢とはもう少し話したかったが、こっちがこういう状態です。
どう考えても危険です本当にありがとうございました。

「時間がない！さっさと済ませようジャマイカ！！」

右腕に魔方陣をつくり、左腕にエネルギーを集中させる。
左腕はミニ八卦炉の代わり、つまり…

「マスタースパアアアアアアアアアアアアク！！！！！！！」

光の速度で発射されたマスタースパークは、幽々子さんめがけて一直線に飛ぶ。
しかしそれを結界らしきもので難なく防がれた。

「美しさの欠片も感じないわね」
「ですよねーwだが……こいつはどうかな？」

腰には2本、肩に2本、両腕に2本のオレンジ色の御柱を構える。
それを全てキャノン方形式に切り替え、幽々子さんに向ける。

「オンバシラ…フルバァァァァスト！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

様々な太さのオンバシラキャノンが周囲を包むレーザーとなる。ターゲットマルチロックなどしている場合ではない。ノーロックファイヤ。これが一番の得策だ。

「う…！！さすがね…」

「まだ持つのかよ………一個でいいか」

一枚のスペルカードを後方に浮かせ、飛ばす。するとそのカードから一個の黒い球体が現れる

それを幽々子さんの後ろに設置する。

「…………な…！？」

「名づけるなら…変態『ソルディオスオービット』」

緑色の有害物質が霊体である体を包んだ。

27．無関係の人を巻き込まないようにしましょう。主に白玉楼（後書き）

こぼれ話

早苗「神奈子様！！白玉楼にコジマ粒子反応を検知しました！」

神奈子「早苗…あんたはセンサーかい？」

28．神社が壊れていても神社は神社です

「へぇ…ふぇ…燃料切れだ……」

ビットと御柱の形を崩し、八角形の形にしてから自分の体に戻る。
ソルディオスオービット、ハイマット…オンバシラフルバースト、マスパ。
これまでにないほどの妖力と霊力を使った。
流石に体力の限界だ。

これで向こうがまだ戦えるとしたら…

「いたた……粒子攻撃ねぇ…流石に危なかったわ」

爆煙の中から出てきた人物…それは紛れもない、西行寺幽々子…
彼女は幽霊、つまり…俺の攻撃は蚊が刺した程度か…

「う…うそだろぃ…」

まぁ…向こうはこの道うん千年の幽霊だ。
こっちはまだまだ新米ルナシューター。
弾幕避けなどお手の物ってか。

「でも、避ける力はあるかしら？宴会「死して全て大団円」」
「マジ？……ええい！！逃げるべし！！！」

無数の蝶が俺の周りを飛び回って、自分の力が奪われていくのが肌で感じられた。
これは危険。実に危険だ。下手したら妖夢の助けなく死ぬ。

「やば…！追いついて…あぎゃっ！！！」

背中に張り付いた蝶が、発光し、俺の体力を一気に奪った。

「1回目被弾♪」

「まずい……腕が動かぬ……目がかすんできたね。こりゃ…」

俺は最後の力を振り絞って、両腕を高々と上に上げようとする。

最後に一回、こいつらに目立つことをしないと…死ねる。

しかし、もう既に神経の反応はスカスカ。出来るかどうかはわからん。

「う…うぐおおおおおおあああああああああああああああ！！！！！」

「！！！！！」

「おおおおおおおおおおおおおお…はにゃ～…」

無駄な努力だった。

冷たい大地に身を任せた俺は、そのまま意識を放り出した。

「……ん……ここは…」
「気がついた？」

目を開けると、そこは雪に包まれた縁側だった。
その隣で、俺の頭を撫でながら饅頭を食べている幽々子さんが居た。

むくりと体を起こし、今の状況を確認する。
俺は弾幕勝負に負けた。そして、助けられて恐らくここで寝ているんだろう。
視線を幽々子さんの手元に向け、何を食べているのかを見る。
ピンク色の饅頭だ。

「饅頭か」
「食べる？」
「ここは遠慮すべきところだが俺はいただこう」

幽々子さんの隣に立って、饅頭を貰う。
それを1個口に運ぶと、饅頭の中からほのかな甘みと桜の香りが

口の中を包む。

「桜餅…上物じゃねぇか…」

「でしょ？」

そういう感じで、二人で桜餅を食べる。

桜餅自体そんなに食べとたことはなかったが、実際に食べるとかなりうまい。

それが妖夢が作った桜餅を食べてみろ。

常人なら発狂するぞ。

と、涙目になりながら桜餅を食べていると、幽々子さんが不意に口を開く。

「童貞君、貴方はどうして異変を起こそうとしたの？」

「ん？…ああ、些細なことだ。ただ単に強くなりたかったんだよ」

「強く？」

「ああ。神奈子さんや諏訪子さん、それに早苗にも後れを取らないような強さだ」

自分を変えたかった。それだけだ。

別に何をするわけでもない。

「……強くなりたい…ねぇ」

なにかにあきれたように溜息をつく幽々子さん。

何を感じたかは良く分からないが、感心はしていないだろう。

「…まぁ軽蔑してくれてかまわんよ」

「軽蔑なんてしないわ。立派よ。生きてる内に向上心があるだけ」

「…ほぇ？」

マヌケな声を出して、ニコニコどーが、としている幽々子さんを見る。

「あれを見なさい」
「視力は一応ＡＡだが」
「何訳分からないこといってるの。あの桜の木よ」
「オーライ、あんたの墓標は良く見えるぜ」
「……死体は埋まってるけど墓標は立てた覚えないわよ」

あ、そうだった。

「で？貴方はこれからも異変を続けるの？」

「やらない。だが異変には関与するぞ」

「いや、そこはおとなしく家に帰るって空気でしょ……貴方といると調子がくるうわ」

「それでは行かせてもらおう。いざ行かん！！博麗霊夢の元へ！！」

「行ってらっしゃーい」

体力と妖力と霊力が回復した俺は、一気に加速し、音速を超えるであろう速度で移動したい。

「異変…それも2つ同時に起こる、大学生の異変、そして神社の倒壊…」

神社の鳥居にもたれかかって思考に浸る霊夢。

異変というものは何時、どこで起こるか、どうやって起こるかは謎だ。
しかし少なくとも2個同時に起こるとは思って居なかった。
それに魔理沙は戦闘不能。意識不明だ。

要するに、双方証拠がない。
霊夢の勘では、一つの異変は恐らく大学生が主犯者。
もう一つはほとんど証拠がない。

「参ったわね……「何を参っておられるのだ?」…あんたか」

霊夢のもたれかかっている鳥居の上で座っているのは、
外の世界の人間、大学生。霊夢が先ほどまで異変の主犯者と疑っていた人物だ。

「おう、久しぶり霊夢」

鳥居から降りて、霊夢に握手を求めようとする。
すると、嫌々霊夢が俺の手を握る。

「主犯者がお出ましとはね…この神社が見えないの？」
「ああ、ばっちり見える」

俺が見た光景は、上空で壊れた瞬間を見たときの壊れ方とは少し違う。
見事にひしゃげている。この中は実に悲惨なことになっているだろうね。

「見事に壊れてるま…」
「ええ、……今こっちの異変犯人探しをしようと思ってるところなのよ」
「犯人探しー？手伝いましょうかね？」
「ええ、それを頼もうと思ってたところよ」

霊夢が大幣を取り出し、俺が霊気で作ったポジトロンライフルを肩に担ぐ。

「で、目星はついてるの？」
「一応な、だが、前座って物も大切だろ？」

にかっ、と笑って、守矢神社へと急いだ。
まだ2人では人数は足りない。

28．神社が壊れていても神社は神社です（後書き）

こぼれ話

早苗「洗濯物干しと居てくださいね～」

大学「はいはい…ったく…人使いの荒い奴だ

２０分後…

大学「これは…早苗の下着…！！！…文ーー！！！文ーーー！！」

29．紅魔館は、暗いです。

上空で、俺と霊夢が並んで飛んでいる。
ちなみに空は曇っているが、霊夢の上だけは雲がない。
というか霊夢の周りから緋色の煙が…いや霧だろう。霧が出ている。
不気味だ。実に不気味だがどうでもいい。

「で？これからどこに行くのよ」
「Ｍｙ　ｈｏｍｅ」
「ここは幻想郷よ、日本語を話しなさい」
「私の家」
「なんで」

霊夢が面倒そうに聞く。
目的もなく行くんじゃねぇか、とでも思っているんだろう。
そんな不審な顔をしている霊夢とは裏腹に、
俺はにやりとする。

「守矢神社のある妖怪の山は、ここでは群を抜いた高さの山だ。分かるな？」
「そうね、恐らく一番高い山」

……遠目で見る妖怪の山の山頂、それより上のところにはわずかな光が差し込んでいる。
自然だねぇ…自然。人間なら心のよりどころだ。

「つまり、その山頂に行くと、何か手がかりがつかめるかもしれないって寸法だ」

「……あんた馬鹿ぁ？」
「何故に」
「山頂に行けば、その異変の正体が分かるのは同意できないわね」
「何故に、高所恐怖症か？」
「そんなんだったら今頃空なんか飛んでないわよ」
「じゃあ山が嫌い病か」
「山が嫌いなら早苗なんか倒してないわよ」
「イタイイタイ病か？」
「何よそれ」

歴史勉強しなおせタコスケ。

と、なんやらかんやら飛んでいる間に霧の湖までついた。
妖精たちが俺によってくる。悪い気はしない。
しかし、その妖精たちが突然離れて行った。
「？」

「あいつね…まだ妖精たちに嫌われてんのかしら」

あいつ？と、思考しようとしたとたん、俺の首元に冷たい感触がした。

「ひゃん！？」

「だ～いがくせ～！久しぶり～！」

無垢な表情で俺を覗き込むチルノ。

冷たい、どころか涼しい。氷を首にかけたような感じだ。

「ちぃるの！お前か！おひさしぶりぶりブロッコリー！どこ行ってたんだよ！」

「ずっと大ちゃんと一緒にいたんだよ！大学生もこればよかったのに～！」

嫌だ、寒い。

「大ちゃん…ああ、大妖精か」

「そう、大ちゃん。呼んでこようか？」

「い～や、大妖精も忙しいだろう？」

「うん、最近他の子と色々やってるからね」

少しチルノが寂しそうな顔をする。

そしてぎゅっと、俺の頭を触る。

夏場だから特に涼しい。

ちなみに俺の首元に、足を巻いて俺の上に座ってるわけだから…

俺の首の後ろにチルノのパン…やめておこう。

「あの…チルノ？」
「何？」
「羞恥心は持とうぜ」
「しゅーちしん？」

駄目だコイツ…ぜんぜんわかってねぇ…

「ま…まぁいいや、霊夢」
「何よ」

イライラした表情で俺を睨む霊夢。
まぁさっきまで霊夢そっちのけでチルノと色々していたからな。
しゃーないしゃーない。

「行こうぜ、そろそろ」

そういった瞬間、チルノの足が更に強く俺の首を絞める。

「行っちゃうの…？」
「なぁに、大したことはない。すぐに戻る」
「（こいつ死んだわね…）はいはいさっさと行くわよ」
「……霊夢の意地悪」

こうして俺たちは、更に進路を進めた。

湖の畔。紅魔館の直上だな。
赤い屋根が霧の中から見える。
ここで霊夢がいったん停止する。
俺もそれに合わせて停止した。

「……どしたの？」
「…嫌な予感がする」

俺は、ふーん。と息を漏らしてそのまま山へ向かおうと思ったが霊夢はどうもそうは行かないらしく、そのまま紅魔館へ高度を下げた。
おかしいな…霊夢ルートで紅魔館へ向かうことなんかあったっけ？

「……全く」

それについていくために俺も紅魔館へ向かった。
霊夢の言ういやな予感とは一体なんなのだね…

紅魔館、庭先。
霧があると言うのに霊夢の周りだけは晴れている。
お前はスポットライトに当てられた人間か、と突っ込みたいがそんなこととしたら
俺のケツに針を突っ込まれるだけだ。

「な…どうしたんですか!?二人とも!」

勝手に入ってきた俺たちに美鈴がすかさず俺の肩に手を置く。

「霊夢(こいつ)が嫌な予感がするから紅魔館に来ただと」
「霊夢さんが?彼女の勘は良く当たりますよ」

そーなのかー

「まぁ…俺は面白けりゃどうでもいいけど…じゃあな」
「ええ、行ってらっしゃいませ」

「お前はメイドか」

美鈴は昔メイドだった、と言う説があるそうだが、俺にはそうは思えない。

まぁそんなことは別に気にすることではない。

とりあえず今はすたすた歩いている霊夢についていくだけだ。

「勘ねぇ…どこまで信じていいんだか」

Ｓｔａｇｅ３　～赤い彗星のレミリア～

そうこうしている間にレミリアの部屋へとついた。

真っ暗だ。こんなところで紅魔郷異変のときに霊夢たちは戦っていたのか。

いや、一度外に出たんだっけか。まぁいい。

「大学生、アンタは下がってて」

「やだ、つーかお前レミリアのところで何すんのさ」
「まずやっつけるのよ！」「誰をやっつけるって？」出てきた」

暗い部屋の中に見える赤い目、何で発光しているかは良く分からんが
というかこういうときになんで目は暗いところで発光するのか
誰か科学的に説明してくれ。

「つまり、レミリアを倒せばいいんだな？」
「ええ」
「ｏｋ、任せろ」

俺はレミリアに近づいて、お互いに一歩ずつの間合いを取る。

「ふふ…たかが人妖風情がわたしにか「たわけ」痛っ！！？」

そして間合いを詰めてビンタ。

「な…なにを「たわけ」痛い！！」

ビンタ。

「やめなさいよバ「たわけ」うっ！？」

ビンタ。

「お願いだから人の話を「たわけ」っ！」

そしてビンタ、

「何か強くなってる「たわけ」痛い！！」

またビンタ

「う…「たわけ」やめて！！」

レミリアの頬に手形がつくほどビンタをしているがビンタする。

「痛い…「たわけ」痛い…咲夜…」

くどいが、ビンタ。

結局幼女は７０回ほどビンタされてメイドのところへ泣きついた。

しかし主犯者は霊夢だ。俺は指示に従っただけ。

俺は絶対悪くねぇ！「たわけ」あぎゃっ！！

その後、咲夜に赤いカッターナイフのような決戦兵器を突きつけられたのは別の話。

29．紅魔館は、暗いです。（後書き）

こぼれ話

早苗　「うーん……」
大学生「どうした？」
早苗　「どうしても分からないことがあるんです」
大学生「ん？」
早苗　「大学生さんはどこの大学出身なんですか？」
大学生「京大」
早苗　「……ええええええええええええ！？」

30．そういえば大学生の異変はどうなったのでしょうか…

レミリアをビンタした後、霊夢がレミリアに色々と尋問した。
いや…尋問なのか？普通に事情聴取だな。

特に特筆することではないが、この館の周りは、全てのものが赤い。
フランの部屋は別にそういったわけではないのだが
とにかくこの部屋は赤い。日の光が苦手な故に光もない。
ある光は蝋燭の光のみだ。

その上、発光範囲の狭い蝋燭だと遠くの様子が分からない。
この部屋でやる弾幕勝負は有視界戦闘は不可能だ。
紅魔郷異変で、ここで霊夢が戦っていたら恐らく負けていただろうな。

「……戦術的にここはかなり不利な場所だよな…」

部屋の広さ、あれ、それ、これ。

「このくらい部屋でどうやってレミリア認識してるんだよ」
「匂いですわ」
「は？」

突然後ろから声が聞こえた。振り返ると、そこには幸せそうな顔をしている咲夜さんが居た。

「お嬢様の匂いはとてもよい香りです」
「は？」

「甘くて……そして高貴な香り……幼き乙女の香りですわ……」

え？何言ってんのこの駄メイド…

「そして、あふれ出るこのカリスマ…あらいけませんわ、鼻血が…」

いかん！この反応は駄目だ！！俺の中ですぐに逃げろと誰かがささやく！！

「ちょっと大学生君、ティッ…「トランザム！！！！！！」」

粒子化して紅魔館から避難した。妄想癖のある人間と近寄ってはいけない！

それにこの妄想は他のと群を抜いた妄想だ！

下手したら俺が飲み込まれるぞ！！

「と言うわけで門前に来たんだ。どうしよう美鈴さん」
「どうしようって言われても…霊夢さんはどうしたんですか？」
「レミリアに事情聴取しているところさ、ハハッ！」
「あー…お嬢様と霊夢さんは仲がいいですからね……にしても今日は変な天気だなぁ…」

美鈴さんが心配そうな表情で空を見上げる。

「確かにな…異変の匂いがプンプンしやがるぜ…」
「あ、そういえば大学生さんも異変起こそうとしてませんでした？」
「ん？…あー起こしたよ、でも2人目で倒されて結局何もせずじまいだ」
「あらら…まぁ気を落とさないでください。異変なんて進んで起こすものじゃないんですから」
「「そーなのかー」」

…？何かさっき言葉が重なったような…

「そうですよ、だって、進んで人を困らせるようなことをするのは気が引けるでしょう？」
「まぁそうだな」
「私も妖怪ですけど、人を食べるなんてそんな酷いことはできませんよ」
「まぁそうだな、元人間だし。人間の味なんて酷いもんだろ？」
「美味しいですよ？」
「その答えはいらなかった」

ま…まぁ誰だって、そんな過去はあるさ…。

こんな優しそうな顔をした人も一度人間を食べたことだってあるさ。

そうだよね…ララァ…

とか色々考えていると、突然誰かの腹の虫がなった。

誰か？と考える必要もなかった。

突然美鈴さんがこてっと倒れたのだ。

「えっ」

「ああ…大学生さん…時が見える…」

「めいりーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん！！！！！」

その後、俺の貴重なサルミアッキを美鈴さんに渡したのは言うまでもない。

「た…助かりました…美鈴の人生ベスト１０に入る苦難でした…」
「意外と楽に生きてるじゃねぇか畜生」

サルミアッキの不味さによる苦難なのか、
それとも今までの空腹による苦難なのか、
恐らく答えは後者だ。どんな生活続けて来たんだよこいつ。

「もうやだこの館…早く霊夢来ないかねぇ…」
「霊夢さんはこの館を気に入ってますからね、多分あと四半刻はかかるんじゃないですか？」
「外の世界の読み方でおｋ」
「大学生ってその辺分かるんじゃないんですか？」
「書いてる人が高校生だ」
「？……まぁ３０分ですけど」

３０分かよ……

「これから俺らどうするんｄ…「にゅ…もうたべれましぇぇ～ん」寝るの早っ！！？？」

のび太かこいつ！？
…まぁ幸せそうに寝ちまっている女性を叩き起こすのは人道に反する。
有事の場合は殴り倒すかその辺りはできたらやるけど（チート使用禁止を条件とする、俺以外）

「まぁいい…おれもにぇるとしゅるか…ＺＺＺｚｚｚｚ…」
「くぅ～…」

…ん?誰かが俺の頬をつつく…いてて…誰だつねってる奴は…

「ほら、起きなさいよ」

ん…どこかできいたことがあるような…

「霊夢〜なんだ?神社に来るなんて珍しいな〜悪いけどもうちょっと寝かせて…」

「ココは紅魔館よ……夢想封印!!」

ずどおおおおん……

「いてぇなコンチクショー!!!!!」

「結構本気で撃ったのに…」

最近の目覚まし時計は人をアフロにするのか!?あぁ!?
随分斬新かつ確実な目覚ましだな!!!
誰が買うか!!!!!

「ほら、さっさと行くわよ」
「ちくしょーーー!!!美鈴~!!起きろー!!たぁぁぁぁすけてえええぇぇぇぇぇぇ……」
「んにゃ…ｄａｉ学生さん~がんばってくださーいねー……」

初めて東方キャラ相手に死ねと思ってしまった。
ＺＵＮ様ゴメンなさい。

「と言うわけで妖怪の山にたどり着きました大学生ですがアフロです」
「ほんと…見事と言えるくらいチリチリね…」
「お前がやったんだろうがゴ巫女」
というわけで俺と霊夢は妖怪の山に位置する川。
霧の湖へとつながっている川にたどり着いた。
「ここか…始めてくるな…」
「あんた山出身でしょ？ココ来たことないの？」
「残念なことに山＝神社、の方程式しか頭にないもので」
この川には、確か河城にとりが住んでるんだよな…
…あの小屋かな、なんかＧＮドライブとかアイザックさんのスーツとかいろいろあるけど…
なんだあれ、ＩＳの白式？
「なんであんなレアなものがおいてあるんだよ…」
「外の人間には価値が分かるのね」
「あれ全部河童製作所が作ったのか？」
「拾いものを改造しただけじゃないの？」
拾ったのかよ！！！
「入る？」
「入ろうか、いや、ちょっと待て…ＧＮソードか…おおこっちにはファングまで…」
しかしどこで拾ってきたんだ…
ん？

「初号機の手だ」

ああ、あの時千切れた初号機の手か。すげえよくよく見ると、チョロQのマッドスペシャルのボディ。９０式戦車の上の部分。ＭＩＧ－２４の主翼もあった。

「変なものばかりね、何でこんなもの集めたがるんだか、霖之助さんも河童も分からないわね…」

「まぁいいや、お…これはいいものがあった」

ガラクタの中から引っ張り出したのは、一昔前のマウンテンバイクだ。

「何よそれ」

「チャリンコ」

「ちゃ…？」

舌が回らないのか、霊夢が俺に聞き返す。

「チャリンコ」

「チャランポランかなんか知らないけど、何に使うのよ」

チャランポランとは酷いな。これは外の世界では子供たちの憧れの対称だぞ？

「これにまたがると、歩くより早くなる」

「飛べばいいじゃない」

「死ね。全国の一般人に土下座しろ」

通学のときも、バイトに行くときも
その他もろもろいろんなところに行くときも役に立っていたメイン盾、チャリンコ。
そのありがたい乗り物の存在を飛べばいい、の一言で済ますだと？
許せん！

「まぁいいや。とりあえず行こうぜ」
「天狗の里ね、不法侵入とかいわれなきゃいいけど」

安心しろ、月光蝶で一網打尽だ。

「あややや…こんなところまで来るとはね、博麗の巫女さ「「月光蝶！！」」ジュッ」

その後数日間、ダブル月光蝶によって天狗の里にはペンペン草も生えなくなったそうな。

３０．そういえば大学生の異変はどうなったのでしょうか…（後書き）

こぼれ話

大学生「……」

ギリギリギリ

魔理沙「……」

大学生「・・・・・・・・・・・・・・く・・・・・・・」

魔理沙「・・・・・・・・・・・・気持ち悪い・・・・・・」

終劇

31．自分が実力のない人間だと思ったら大間違いです。誰しも実力はあるのです。

「……何すんのよ！！！」
「いや、その点に関しては謝る」
再生した射命丸が俺に怒鳴る。分子レベルで分解されていると言うのに何故再生するんだ。
というより霊夢も月光蝶を放てたのね。見よう見まねだろうが完璧だ。
まぁいいや。
取材中ではないのか俺に対して崩れた口調で俺に怒鳴りつけている。
これが素だろうが、なぜか新鮮な気分だ。
「まぁ、大学生君は「俺って君呼びだったの？」取材じゃないからね。まぁあんたはいいわ
山の住民じゃない巫女さんが、妖怪の山に何の用かしら」
すると、射命丸の周りに突然風が吹く。とんでもない風だ。
下手したらこっちが飛ばされるほどの強い風が射命丸の周りに吹いているが、
霊夢は違った。風は受けているが周りは晴れている。
「……こりゃいけない雰囲気」
「大学生、アンタは先に神社に行きなさい。私は後で追いかけるから」
霊夢の周りに赤い気のようなものが出ている。

本気モードか？まぁどっちにしても戦闘力５のゴミの俺には関係ないが。
目もかなり本気で怒っているような目だ。全く…地震保険くらい入っとけっての。

「だが断る、じっくり傍観させていただこう」
「あっそ、なら勝手にすれば？」

そういって霊夢はその場で大幣を構える…というよりただの棒立ちだが。
一体何をしようというのだね。確か霊夢の構えポーズはこんなんだったような気がするが。
しかも緋想天のルール的にはスペルカード制限はなし。限界まで戦うのね。

つまり俺の異変は緋想天とはまた違うバトル形式か。
異変ごとにバトル形式が変わるのは中々面白い。
…まぁ死んでももう起こす気にはなれんが。
今度やったら次こそ殺される、幽々子さんじゃなくて霊夢（バケモノ）に。

「さて、勝負です！霊夢さん！」
「……めんどくさいけど…」

空中に浮かぶ二人。この地点で物理法則を無視してるよなぁ…
まぁ俺には関係ないが、俺も浮いてるし。

「ほれ、始めなされ」

霊夢と射命丸、共にはじけるように距離をとる。
それに反射して俺も守矢神社直上まで距離をとる。
ここなら見下ろすことも出来る。それに早苗たちも気付くだろう。

「本気のガチバトルってのを見るのも……えっ…？」

俺が見たものは、ガチバトル？何それおいしいの？ってレベルの
バトルだった。

赤い弾幕と、目に見えるほどの空気の乱れがぶつかり合う。
そのぶつかり合う余波がこっちにも飛んできて、神社や周りの木を揺らす。

それに加えて皮膚がビリビリと痛むほどの妖気と霊気。
全てにおいて桁違いだ。かなり遠くまで離れたと言うのにこの気迫…

あえて言おう。本当に女か？

「……これが弾幕ごっこか…」

大きな霊弾と強い風がぶつかり合うたびに周りを衝撃波が覆う。
この衝撃が弾幕の相殺か。そういえば俺、通常弾とか撃ったことないな。

俺の通常弾はオレンジ色だ。故に夕日だと色が擬態して見づらい。
だが、現実は非情だ。そんなことくらいで勝てるはずがないのだ。

「……仕方ないよな…あんな綺麗で強い弾幕なんて撃てるはずがないし」

異変を起こして失敗、魔理沙に迷惑をかけて、霊夢のお供役となる。
その上こういう勝負でサポート役となったはずなのに何時の間にやらどっか行け宣言。

「ま、そういうのけ者も悪くないかな…」
『甘い！甘いわ！少年シンジ君！』

ババーン！といわんばかりにスキマから現れた八雲ゆかりん。
いつも思うが、このスキマはどうやって作ったのかね…。

「貴方は気楽過ぎる。それが弱さなのよ少年シンジ君」
「いきなり現れていきなりお説教ですか。俺に心のゆとりをくれ」
「ゆとり乙」
「ババア乙…ごめんなさい撃たないで」

やはりババアという言葉には人一倍敏感なのだな。
と、考えていると、ゆかりんは俺の隣で扇子を取り出し、俺の頭をこつんとつつく。

「少しは自分の事を理解しようとしなさい、大学生」
「まず名前を教えてくれ」
「忘れたわ」
「死ね」

死ね。純粋にそう言った。まず分かりたいことをわからずに何を言うかこの馬鹿妖怪。

「じゃあ、俺の能力は？」

俺が何気なく尋ねると、ゆかりん…いや、紫は少しためらいながらも俺に言う

「……『心の壁を操る程度の能力』…ＡＴフィールドよ」

……は？

「おまえはなにをいっているんだ」

「言葉の通りよ、貴方は人の誰もが持つＡＴフィールド、アンチＡＴフィールド
を自由に操ることが出来るのよ。それは例え他人の壁であっても
ね。つまり、貴方は…

人の形である物を壊すこと
心を無理やりこじ開けさせること
使徒と同じく、自己再生が可能。
そして何よりも恐ろしいところが

……その気になれば博麗大結界を破ることも可能であるのよ。
実際にあのサードインパクトによって、博麗大結界は破られた。
アンチ・ＡＴフィールドによって。
１０秒ほどだけれど、スキマの中は無事だったのよ。
結局は人間が居なくなることによって妖怪という存在も消えてし
まったけれ「スタップ」？」

紫が何故か思い出話にふけっている。

さっさと結論を述べよ。

「つまり…楽園を荒らすようなことはしてはいけないということよ。貴方の手によって生と死のハ狭間をなくすことも可能なのだから」

紫が釘をさすように、妖気を向ける。

「無論、使用上の用量を守って正しくお使いする予定です「いやあああ！！！」ん？」

俺も対抗するように妖気を出したとたん、射命丸がこっちに吹き飛ばされた。
すると、俺の目の前にオレンジ色の八角形が現れ、射命丸との衝突を防いだ。
キュイーン！と、独特な音を立てて。

「はぅ！？……大学生君？」

射命丸が突然の壁に驚いている。
それ以上に俺が驚いている。

「これが…」

射命丸を止めていた八角形が俺の手の中に納まり、消える。
え…うそ…

「絶対恐怖領域、能力を理解したら使えるようになるのね。
魔理沙のファイナルスパークも楽に跳ね返すわよ。それは。
カヲルと同じ、いいえ、それ以上の壁なのだから」

紫がドヤ顔しながら扇子で口を覆う。

「いや…なんですかそれ、おかしいですよゆかジナさん！！！！」

「…落ち着いたかしら？」
「ああ、もういいや、とりあえず俺はＡＴフィールドを操るただの人妖、ｏｋ？」
防御面では強化されたが…同時に俺は本当に人間なのかと、疑問に持つことになった。
「じゃあ、私は行くわね　碇シンジ君」
そういってゆかりんはスキマの中へと消えていった。

「……」

気絶した射命丸を抱きかかえながら俺は呟いた。

「シンジってＡＴフィールド張れたっけ？」

31．自分が実力のない人間だと思ったら大間違いです。誰しも実力はあるので

こぼれ話

睡眠三神

神奈子「くぅ～……ん…んん～…すぅ」
諏訪子「すぴ～…すぴ～…」
早苗　「むぅ……くぅ…」

大学生「昼寝にしちゃ、本格的に寝てるな…」

射命丸「神様の寝顔を激しゃ「月光蝶である」ジュッ」

32．緋色緋色といいますが緋色って言われてもいまいちピンと来ません

霊夢が戻ってきた。さほど重要じゃないが俺にしちゃ結構重要だ。
何しろ山の上にある緋色の雲を超えるには、雷雲の中に突っ込まなきゃいけない。
だからこういう異変のスペシャリストに来てもらわないと
こういう中に入ることが出来ないのだ。

「……覚悟はいいわね？」
「いつでも♪」
「よし、行くわよ。一度入ったら止まっちゃ駄目。天空の波に飲み込まれて死ぬわよ」

天空の波…乱気流か。それは厄介だ。
そういうと霊夢が先に雲に向けて突撃した。

「相変わらず無茶をなさる……あらよいっとな！」

足元にＡＴフィールドを展開。すると、そのフィールドが反発し合い、推進する。

雷雲内

「うぉあああ!?なんだこれ!?ラピュタ!?ラピュタの雲の中か!?」

雨風が叩きつけるように俺を襲う。

乱気流ってレベルじゃないだろ!?嵐でももうちっとソフトだぞ!?

何だこれ!?嵐ｏｆ嵐!?

「だがワシは止まらん!!キングオブハートの名にかけて!!!!」

風のせいで最早飛んでいるのではなく泳いでいるようなものだ。

簡単に言うとルパン空中遊泳。あっぷあっぷした状態である。

「うおおおおおお!!!出口が見え…こら!!閉じるな!!雷雲!閉じないで!!!」

空中を泳ぐのではなく走る方向に切り替える。

「ほっはっほっはっはははははあはは!!!!!抜けたアアアアアア!!!ふぅ…」

緋色の雷雲を抜け、天空にある地表を下りた俺は、

このくらい雲の上に立っている赤い影に向けて走る。

「霊夢の周りが雷雲……」

やはり、ここに居るのは龍宮の使い…永江衣玖…キャーイクサーン…か。

だが甘い。宇宙にはギャーアイザックサーンと呼ばれる人物も居る。

フィーバーするのは龍宮の使いではないのだよ。

実在する人物では…ギャーセガールサーンとも呼ばれる人物も居るしな、

まぁいいや。とりあえず……霊夢のところに行こう。

ＳＴＡＧＥ４　天女の緋色

「これは一体……この辺だけ雷雲が渦巻いているわ…

今まで居た場所はどこに居ても最初、必ず晴れていたというのに…

やはり私の勘に間違いはなかったわ…湖のおかしな異変を起こしている奴はこのうえにいる」

大層な予言だ。だが全て正解しているということがまたすごい。
巫女の勘って、そんなに当たるものだろうか。

『おや、天狗でもない、河童でもない、幽霊でもない。
人間、それも二人で来るとは…山の上まで来るとは珍しいですわ』

雷と共に姿を現したのは、美しき緋の衣、永江衣玖。
空気を読む程度の能力、といわれているが、
どう見ても電気を操る程度の能力、と見たほうがいいような気がする。

「出た、重力を無視した羽衣」
「何者?雷雨の中を泳いでくるなんて只者じゃないわね」

霊夢が冷静に、衣玖さんを見る。
俺もそれを見る。

「だって「だってもこってもない」……この雲たちは私たちが泳ぐ雲…
私たちはある異変を知らせるために空を泳ぐ龍宮の使い…」
「最近アジアから日本海辺りで見つかってない?お前らの仲間」
「ええ、近年見ない地震が起こったでしょう?」

そーなのかー…

「まぁいいや、続けてください」

そういうと、衣玖さんが咳払いをして続ける。

「緋色の霧は気質の霧。緋色の空は異常の宏観前兆」

ふむふむ

「緋色の雲は大地を揺るがすでしょう、私たちはそれを伝えに泳ぐのです」

「大地を揺るがすですって!?じゃあ…」

霊夢がはっとした。まぁ地震の原因がこの付近に居るからだろう。それに博麗神社の直下型地震だ。はっとしなかったら逆におかしい。

「そう、地震の事。まだ大丈夫だけどね。もうすぐ大きな地震が起こる。

私はそれを皆に伝えるためだけに泳ぐ」

「泳ぐ、ではなく、飛ぶって表現の方が正しいだろ」

「大学生、アンタちょっと黙って」

サーセン。

「話の骨を折らないでいただけると幸いです」

「まぁいいわ、地震ならもうあったわよ。今日酷い目に遭ったんだから。

大学生(こいつ)はその混乱に乗じて異変を起こそうとした。

全部あんたらのせいなのね?」

なにそれ、俺なんかめっちゃ悪い奴に聞こえるんだけど。

「え?地震がもう起きたですって?おかしいですわねぇ」

「神社が壊れたのよ…何とかしてもらうわよ」

「地震があったのならこの雲は収まるはずなのだけれど…
もしかしてあの方の仕業なのかしら…困ったものですわね…」

ふむ、天子か。

「地震があったんだろ？何故霊夢に教えなかったし」
「神社を襲ったその地震は、きっと試し打ちです」
「つまり…ここからが本当の地獄だ…！ってか？」
「物分りの早い方は助かりますわ」
「ちょっと！！！何で皆陽気なのよ！！！！」

霊夢の怒鳴り声が聞こえて、俺も正気に戻る。

「おっと…」
「博麗の巫女さん。地震の恐怖を知っているのなら
さっさと戻って防災の準備をしたらどうでしょうか？」

ほう、地震を甘く見ているのは貴様ではないかね？
永江衣玖殿。

「私の防災はおかしなことをたくらんでいる奴を倒すこと！！！！！」
「俺の防災は『押さない！走らない！喋らない！』この三原則を守ることだ！！！！」

「よろしい覚悟ですわ大学生さん！！なら貴方から倒されなさい！！！」

衣玖さんが腕に電気の塊を集めて放つ。
その弾は霊夢の頬をかすめ、俺の心臓辺りに飛んで来る。

「っ…！？大学生！！！！」
「おっとあぶね…いきなり何をするかね」

当然反射的に発生したＡＴ（アンチ・トマト）フィールド（アンコ・トレタ）によって守られる。
ＡＴフィールドは防御面では最強レベルだ。

「……結界…」

「この結界……外の世界の一部の奴にしか使えない奴じゃ…」
「霊夢、外の世界でこれ使ったら変態か、もしくは病人扱いされるぞ」

中二病という名前のな。
ＡＴフィールドをたたみ、手の中に収める。

「どうしたんだね、まさか今の電撃で本気ってわけじゃあないだろうな？」
「当然です」
「だな。だが俺もヘタレなんだ。だから…」

クラウチングスタートの体制をとって、駆け出す。

「時をかけるように…逃げ出す！！！」
「天女の一撃」

羽衣が突然伸び、俺に巻きつこうとする。

「ほっ！避けるの術！！」

が避ける。

「なっ！？天女の一撃！！」

避けられた羽衣が再び俺を追いかける。

「まだまだ！」
「こしゃくな！！」
「ほいやっ！」

ぽかーん、としている霊夢をよそに
こちらでは不毛な鬼ごっこが続いている。
弾幕と羽衣が飛び交う鬼ごっこだ。
鬼は衣玖さん。

「この！！いい加減に…！！！！」
「うぉっ！あぶね～」
「何！？中々…！」
「俺は鬼ごっこの中で一番逃げる役になってほしくないランキング1位に輝いたので！！」

前の弾幕は避けられないが、横、後ろの弾幕なら確実に避ける自信がある。

ん…右！左！右右左！！↑→↑！！

「はぁ…ほっ！あぶっ！？いてっ！！しびれる！そこにしびれるあこがれるぅ！！！！！」

体が麻痺し、その上に羽衣が巻きつく。

「やっと…捕まえましたよ！！！！！！！」

そして！放電っ…！圧倒的放電…！！

「あぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！

あ…あぐ……ンギモヂイイイイイイイイ！！！！！！

冗談です……あげ……」

視界が一気に暗くなり、ブラックアウトした。

32．緋色緋色といいますが緋色って言われてもいまいちピンと来ません（後書

こぼれ話

大学生「おにー！のぱーんつはいーいパーンチュグァ！？」

翠香　「…不潔！！！変態！！！」

勇義　「見損なったよ大学生！！！」

大学生「嗚呼幻想郷…
　ここでは歌を歌うことが禁じられているのか…」

33．天界は暖かいです

……真っ暗だ。何も見えない。
しかし、音は聞こえる。ぼーっとしか聞こえないが。
誰かが俺を呼んでいるようだ。若干高い声。女の声だ。

『…！……！』

まぁもうちょっと大きな声で言ってくれないと聞こえないんだけどな。
この女の人、相当な声の小ささだ。

『…い！……せい！！』

せい？せい？ああ、何の訓練をしているんだろうか。

『大学生！！』

あ、私を呼んでいたのね。
と思った瞬間、意識が覚醒し、視界が明るくなる。

そこは、嵐に包まれた空間。しかし俺の意識は完全にはっきりしておらず
俺の目の前に映る霊夢くらいしか確認できない。
一体何故俺は霊夢の目の前で倒れているのだろうか。それもわからない。
えっと…リアルに何があったっけ…

「れ…いむ？わしゃなんで倒れてんの？」

それに体がしびれているようだ。
指くらいしかまともに動かすことが出来ない。
足も腕も動かん。

……そうだ、そういえば俺、衣玖さんから逃げて戻ってきたんだっけ。
羽衣に捕まれて放電されて…ああ、そういえばそうだった。

「……はぁ…」
「アンタみたいな化け物でも気絶するのね」
「お前にいわれたくねぇよバケモノ巫女。俺は豆腐以上に柔らかい物質なの」
「はぁ？あんたみたいな豆腐があるわけないじゃない」

しびれる体に鞭を打って立ち上がる。
鞭を打つと、本当に痺れがなくなった。

「その様子だと、再生能力もありそうね」
「何を今更……衣玖さんは」
「やっつけたわ。道も教わったし、時間もない。早く行かないと幻想郷に大地震が起こるわ」

ふむ、天子の奴は本気のようだな。
まぁ本気でもこっちには主人公が居るからどうにもならんだろうが。

「なら、行くしかないっしょ」
「今度は少しは役に立ちなさいよ」
「保障はしない」

そういって二人は顔を見合わせ、雲の上に跳んだ。
今度は霊夢の腕を掴んでいるから風に飛ばされることはなかった。

何だかんだで雲の上についた俺と霊夢。
雲の上は静かだ。さっきの嵐の雲の中とは大違い。
晴れていて、気候も暖かい。

「天界か……高高度だというのに随分な暖かさだ」
「日光が当たるからね、そりゃ暖かいわよ」

しかし、この陽気な気分は、すぐに打ち消される。

『天にして大地を制し』

天空から声が聞こえる。小さな幼い娘のような声だ。
『地にして要を除き』
その声は段々と俺の居るところまで近づく。
そして、目の前に降り立つ青い髪の少女…
『人の緋色の心を映し出せ』
俺の目の前で緋色の剣、緋想の剣を振る。
青い髪をなびかせ、桃の飾りのついた帽子を被った少女。
天人、比那名居天子だ。
「あんたが地震を起こしたり、転校をおかしくした犯人ね？」
「異変解決屋ね、待っていたわ「俺は？」誰？」
ひでぇやい。
「しっかしまぁ、また派手に神社壊したな。ためし撃ちだって？」
「そう、ためし撃ちよ。実際どんな威力を持つのか気になるでしょ？」
「要石か」
「分かってるじゃない」
俺が腕組みをしながら妖気を放出する。
「随分な妖気ね、まるで私を倒したいかのように」
「悪いな。今俺は博麗に使えているのだ、博麗神社の敵は俺の敵。おk？」

「大学生…」
「倒れた俺を見て、時間をロスしたというのなら、俺はそのツケを返す」

天子も俺を見て、にやりとする。

「只者じゃなさそうね」
「いかにも只者ではない」
「なるほど、大学生といったわね…」
「そうだ」
「地上でやられてるという、弾幕ごっこ、私にもたしなませて頂戴」
「ほぅ…貴様も弾幕ごっこをたしなまれる身ですか…
いいでしょう、だが私の弾幕、ちょっと違うぜよ？」

手の平を天子の前に出し、ＡＴフィールドを展開する。

「結界…？」
「違う、これは心の壁…生き物全てが持つ心の壁を実体化したものだ」

その八角形をたたみ、一つの球体にする。
球体は俺の周りをくるくると回り、再び俺の右手に戻る。

「霊夢と戦う前に俺を倒しな！！」
「度胸だけは一人前ね、人妖風情が！！」

霊夢は安全なところに退避し、その様子を観戦する。

「あいつの弾幕…ヤシマ・ストラテジー位しか見たことがない…
少なくともあのときよりかは格段に霊力は上昇しているはず。
それに私が戦っている間に、一体何が…」

霊夢の思考回路をフル回転させるも、答えには辿り着かない。
射命丸との戦闘時、かすかながらも紫の妖力を感じ取った。
その紫の妖力を感じ取った数分後

突然大学生が居るところに、大きな結界を確かに感じ取った。

「あれが大学生の言う…ＡＴフィールド…パチュリーの本でしか見たことがない架空の現象…
全ての生物の形を作る、絶対恐怖領域。何人にも犯されない聖なる壁…」

それに対抗できるものは、神の槍と、副音を呼び起こす人の作り物、と言われている。

「たしか人の作りし物は……エヴァという名前…槍はロンギヌス……
そんな危険なものを用意しないと倒せない…何者なの…？大学生（あいつ）は…？」

「さぁって……このバケモノ相手にどう攻めるべきか…」

両腕をこきこきと鳴らしながら目の前に居る敵に向けて呟く。

当然聞こえてはいるが、んなこたぁどうでもいい。

「あの結界がなんなのかわからない限り、近づくことなんて出来ないわねぇ…」

「あらそうですか、なら…こっちから攻めさせていただきますぞ！！！」

スペルカードを一枚取り出し、詠唱する。

「俺のこの手が真っ赤に燃える…勝利をつかめ轟き叫ぶ……！！！！！」

ＡＴフィールドを腕にまとう。

すると、通常のゴッドフィンガーの数倍の炎となって腕にとどまる。

これがＡＴフィールドか…すごいな。

「後悔するなよ！！ゴッドオオオオオオ！！！フィンガアアアアアアアアアアア！！！！」

地を蹴り、腕の炎を引きながら、天子に向けて接近する。

「っ！…緋想の剣！！」

天子も非想の剣を取り出し、片腕で構えながら接近する。

「だらっせあああああああああああああああああ！！！！！！」

「はぁぁぁぁぁ！！！！」

ガギイイイイン、っと腕と件が打ち合う音とは不似合いな音が鳴り。

ゴッドフィンガーと緋想の剣がぶつかり合う。

「ぐぬぬぬぬぬぬ…」

「くっ……はっ！！！！」

「あいたっ！突き指した！」

やはり腕では負けた。

33．天界は暖かいです（後書き）

こぼれ話

ゴルゴ１３ｖｓ天子

ゴルゴ「……」

ズキュウウウウン……

てんこ「っは……」

無条件でゴルゴ１３の勝利

３４．女を怒らせたら怖いです。

突き指を再生し、ちょいと距離をとる俺と天子。
まさかあのゴッドフィンガーが防がれるとは…
弱点は射撃系統のみだと思ったが…比那名居天子、中々やる。さすが霊夢ルートのラスボスだ。

「ったく…比べ物にならんね、アンタバケモノか」
「緋想の剣を舐めてもらっては困るわ。汚れた地上のものに折れるはずがない」
「ほう、言うではないか…よっと、クルーザー、客船っと」

目の前に飛んできた要石から飛ぶ赤いレーザーを避ける。
そして地上にすちゃっと降りた瞬間。体を低くし、一気に上昇する。

「ちっ…！！」
「その程度の弾幕で俺が倒せるとでも思っていたのか！」
「中々やるじゃない」

ま、通常弾に被弾するほど弱くはない。

「ならこれならどうかしら！！霊想『大地を鎮める石』！！！」

すると、突然大地が揺るぎだし、地面から４つほどの要石が現れる。

その４つの要石にプラスされて天子が小型の要石を放つ。

そして小型の要石から撃たれるレーザーが俺の周りを飛ぶ。

ん？おかしいな…そのまま飛んでくるはずなんだけど…

と思っていたら、その周りを飛んでいたレーザーが突然俺に向けて飛んでくる。

「うわっち！？」

３６０度全ての方向から飛ぶレーザーを上昇して避ける。

しかしその上空からもレーザーが落ちてきて、一気に地上に降下

する。
地上を引っ掻いてスピードを殺し、少し弾幕が落ち着く。
「要石は一個だけではないわ、怖いでしょう？」
「お生憎様。我輩、こういうのは恐怖ではなく娯楽として楽しむものでね」
「何時までその減らず口が聞けるかしら？」
「減らず口で天寿を全うしてやるよ。ほっ！はっ！トゥーッス！」
地面すれすれのレーザーをジャンプで避け、
真後ろに飛んできた同じレーザーをフィールド防御。
そして俺は高速で移動して、レーザーをひきつける、数十本のレーザーが俺を追う。
だいぶ行ったところで右に急旋回。だがまだ追い続ける。
よし、その程度の追尾力がいい。少し減速して、レーザーが足元まで来る。
「よし…いい子だ……あらよっ！！！」
急減速し、クルピットと呼ばれる空戦技術を使う。
クルビットは戦闘機とのドッグファイトでよく使われる技術だ。
減速して上昇しながら一回転するという技だ。
その減速と上昇についていけなかったレーザーはそのままっすぐ飛んでいった。

「はぁ…はぁ…くぁっ……まだあるのかよこんちくしょう…」

辺りを見回すと、まだ俺に襲い掛かるレーザー弾幕が無数に居る。

「仕方ない…」と少し呟いて、体を丸めて精神を集中させる。

すると、体がオレンジ色に光り、両腕に粒子が漏れる。

「……はぁぁぁぁっ…ふん！！」

丸めていた体を大の字に開き、霊力を放出する。

すると放出した霊力が衝撃波となり、辺りの植物、レーザー、要石を吹き飛ばす。

それにより、空は暗くなり、渦を巻く雲が辺りを包む。

「うっ…ぐぅぅ…！！……要石が！？」

「アンチＡＴフィールドの応用だ。さっき考えた」

周囲が廃墟となり、主となる要石は形状崩壊し、粉々になった。

これで要石を使ったレーザー弾幕は使用不可能だ。
それに爆発を受けた天子の服もボロボロとなり、隠し持っていた要石が砕けている。
袖口から出ている破片から見て、もう所持している石はないだろう。
今脅威となるものは、手に持っている剣、そして天子の戦闘力のみだ。

「……う…」

めまいがする。霊力不足か…！
くらくらする頭を叩き、自分に鞭を打って天子を見る。

「煩悩まみれの七光りが…！…こういう身勝手な奴は絶対に許早苗！！」

霊力を素早く練り、自分の周りをオレンジ色に輝かせる。

「くっ…！？一体何が…！」

突然霊夢の目の前が目の前が土煙で見えなくなった。

それにさっきまで座っていた足場がなくなり、辺りが少し湿っぽくなっている。
血なまぐさい匂いだ。それどころか周囲の草木が消え去り、辺りにオレンジ色の液体が散乱している。

「……大学生は…！？」

辺りを見回しても誰も居ない。あるのは大きな石と、渦巻いた雲だけだ。
下に下りたのか、と下を見るも居ない。
そして上を見上げると。

「…！？…大…がくせい…？」

そこには、黒いズボンをはいて、白いシャツを着た少年が赤い槍を持っていた。
見間違いか、ともう一度良く見ると、ジーパンに、黄色い服を着た青年が浮いていた。

「見間違い……？」

「攻撃手段を奪う…か、地上の奴にしては中々やるじゃない」

天子が腕に持っていた粉々になった要石を投げ捨てる。

大体要石掘り起こす奴がどこにいるか。

「う…はぁ…世は結果論で出来ている。…終わりよければ全てよし…さっさと決めさせてもらう」

「過程を楽しめないと生きてくのは辛いわよ」

「無論、中間楽しくてもよし!!「局地戦用マスタースパーク」!!!喰らわんかワレェ!!」

腕から細めのレーザーを出し、天子の顔めがけて飛ばす。

それをとん全の如く避ける天子。当然後ろを見るまでもなく、俺に挑発する。

「あら?外れかしら」

「ちっ…だらあああああああああああ!!!!!」

その挑発に乗り、拳を唸らせ、連続パンチをする俺かっけーw

「いい加減に…あきらめなさい！！」

緋想の剣を振り上げ、俺に振り下ろす瞬間。
俺は緋想の剣を左手で受け止める。

「ひぐぁあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！

あぁぁだだだあだあだだだだあだっだだあああだあだだだだだだ！！！
イタイイタイイタイイタイ！！！！
めり込んでるめり込んでる！！骨に入ってますううううう！！！！」

フィールドは展開していなかったから、腕の肉をえぐり、骨にめり込む。
手の平の骨が砕け、赤色の血液と共に骨の破片もたれる。

「手の平で剣を受け止めるとは！勇気ある馬鹿ね！！！！」
「あああああああああいたい！！！！！痛いけど…！！！！」

右腕を緋想の剣に添えて、ＡＴフィールドを圧縮させる。

「我輩の勝利である！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

圧縮したフィールドを押し出すように展開し、
骨がめり込んだ緋想の剣が真っ二つに折れる。

「嘘っ！？」
「　死　ぬ　が　よ　い　」

その瞬間、後ろに設置したマスタースパーク発射装置が作動し、
俺と天子を巻き込んで、極太のレーザーが天界を漂白した。

その後、霊夢は自分で脱出した天子を叱り、
天子と共に大学生を捜索した。
しかし見当たらなかった。彼は結局行方不明のまま、霊夢は神社へと帰った。

霊夢が仲間を守れなかったと数日泣いた。

結局彼は自分で脱出し、一人で神社に帰っていたそうだ。

それを知った霊夢は大学生を魔理沙と共に3分の4殺しにしたそうだ。

３４．女を怒らせたら怖いです。（後書き）

こぼれ話

早苗「あ、新聞だ…えーっと…
　大学生、新たな試み…太陽の畑を白菜畑に……え？」

幽香　「なによこれえええええええええええええ！！！！！」
大学生「白菜ですが」

35．神は偉大です

時はさかのぼり、大学生が天子を撃破した直後。

雲が晴れ、太陽が差し込む天界。しかしそこはすっかり形を変えてしまった光景だった。
瓦礫に包まれた天界。無残に倒れた桃の木。陥没した大地。
全てこれは2人のによって引き起こされたものである。

そして、その瓦礫の山を少し進んだ場所に、一つの空間があった。
空間はオレンジ色の結界によって守られ、その中に人が居る。
その空間の中心には、うつぶせに倒れた人間が居た。
意識を失っているが、呼吸をしていることから生きていることが確認できる。

「う……」

その人間は、東京カオスフル大学、略して京大の生徒。大学生である。
某名門大学の生徒ではない。

時は戻り、守矢神社。

彼は自力で守矢神社へと帰り、参道で力尽きた。
そのほぼ屍に等しい大学生を拾った人物は、
昨日帰らなかった大学生を捜索しようと出かけた早苗である。
無論死んではいないが、心拍数は一般人の半分以下。
まさに気力だけで生きていたようなものだ。

「大学生さん！！しっかりしてください！！大学生さん！！！」

その大学生を抱え、社務所に運ぶ早苗。幸いなことに大きな外傷は修復されている。
人妖の回復力とＡＴフィールドの自己再生力が生み出したものである。
しかし、それでもなお、腕の骨折、左手の平は酷く、肉がえぐれ、骨まで露出している。
その上首からぼたぼたと落ちる出血は止められていない。
それにもっともきついところは、意識がないということだ。
その状態が、更に早苗を焦らせていた。

「そんな……こんなことって……」

社務所に帰った早苗は、すぐに救急箱を引っ張り出し、首に包帯を巻く。

応急処置は中学生レベルだが、授業を真面目に聞いていたことが幸いし、すぐに血は止まった。

しかし特に酷い左腕は、骨折、手の平の肉の腐敗具合。死臭が漂い、吐き気を促す。

「う……これは…神奈子様！！」

早苗は立ち上がり、神奈子が寝ている部屋に向かう。

彼女は仮にも衛生兵として活躍していた時代があった（らしい）から、彼女に任せれば（多分）何とかなると判断したからだ。

その早苗が出た直後、俺は目を覚ました。

「いてて……ん？包帯か……誰が巻いた…」

首に当てられた包帯を右腕で触る。
左腕はだらんと下がり、動かせない。
そして俺は周囲を見回す。

「ここって…早苗の部屋か…？」

ぽけーっと、血まみれのベッドの上で見回すと、
涙目で俺を見つめている諏訪子さんが目の前に現れた。

「えっ」
「……馬鹿学生…！」

その諏訪子さん。突然俺の腹回りを抱きしめたのだ。

「なっ…！？何をしているんだね諏訪子さんよ」
「動かないで…！」

すると、みるみるうちに、左腕の折れた骨の部分が再生されていくではないか。
そして左手の平の肉の腐敗や皮膚が再生されてゆく。

「…」
「ん？」

顔をうずめている諏訪子さんがぼそっと呟く。
顔を離し、涙目ながら怒った表情の諏訪子さんが俺に言い聞かせるように指をさす。

「私の神力を送り込んだ。これで大丈夫だよ」
「あ、はい」
「土着神がただの妖怪を助けるなんてこれっきりだからね。本当に無茶して…今度心配させたら承知しないよ」
ぷんすか、という擬音が似合うような素振りで俺を叱る諏訪子さん。
……初めてあいつが神だってことがわかったような気がする。
さすが土着神の頂点。マジパネェ。
「罰として……」
「なんだ？」
俺が左手を開いたり閉じたりしていると、諏訪子さんが今までにないほどの威厳で俺に告げる。
「一生私たちと暮らしなさい。お前のような不届き者は監視をしなければいけないようだ」
「何そのプロポーズ」
「！…せっかくカリスマ出したのにぃ…そりゃないよ…あーうー…」
安心しろ、幼女にカリスマがあるのはレミリアくらいだ。

と言うわけで、→こんなことがあって数週間たちました。
正式に守矢神社の一員となった俺は、更に神奈子さんと諏訪子さんに尽くしている。
ちなみに俺は巫女や神主という職業ではなく、純粋な家族として暮らしている。

まぁ言ってしまえば神奈子さんと諏訪子さんの息子みたいな存在だ。
で、位置的にいうと早苗の兄。まぁ互いにそんなことは気にしていないが。

「ん？大学生、また。新聞の一面を飾ってるじゃないか」
「何ぃ？」

湯飲みで茶をすすりながら文々。新聞を読んでいる神奈子さんの新聞を取り上げて
俺が一面を読む。それにつられて早と諏訪子さんも苗も新聞を覗き込む。

「えー何々…博麗の巫女、大学生を発見。3分の4殺しにする…ああ、あの時のか」

昨日の事じゃん。と新聞を神奈子さんに返すと、

突然その新聞が消し炭となるほどの神力を感じた。
しかもその神力は1つだけではない。3つだ。
更にその神力、後ろに二つある。

俺は歯車が外れかかっている人形のようにぎりぎりと後ろを向く。
すると、そこには目を光らせ、指をバキボキ鳴らしている早苗と諏訪子さんが居た。

「「「やってくれたなあの巫女……大学生に手をかけたな…許さんぞ……」」」
「あ…あの……ちょっち落ち着こう、な?」
「「「ぶっ殺す!!!!!!!」」」

その後、数日間霊夢の姿を見たものは居ない…

35．神は偉大です（後書き）

こぼれ話

射命丸「今回は特別な助っ人を連れてきましたよ…
　これで早苗さんのあられもない姿を撮れます！」
フランク「エロティカな写真を取れると聞いて」

大学生「さぁどうぞお構いなく撮影してくださいフランク様」

３６．バカと天才は紙一重らしいです。（前書き）

６日間も送れちゃいました。
ちなみに元３６話は慧音さんの手によってなかったことになりました。

いいえ、包み隠さず言います。続かなくなった。

36．バカと天才は紙一重らしいです。

「暇だ…暇すぎる…」

神社の屋根でチルノ作の氷を抱きながら片手で霊弾でお手玉をしながら
足の指を使って咲夜さんからパクッたナイフでジャグリングをしながら口笛を吹いている。
はたから見たら変態である。

「ぴ～ぴ～Ｐｉ～」

しかし、こんな器用なことが続くわけもなく、足にナイフが刺さって終了だ。

「いてっ」

で、結局やることがないのである。

「はぁ…異変が起きないと幻想郷は平和すぐる…」

ここに来て随分たつが…本当に暇だ。
諏訪子さんも神奈子さんも最近はどこかに信仰活動に向かい、
早苗は霊夢の仮住まいに女子会と言う理由で泊まり…霊夢に女子力もクソもあるのか？
まぁいいや。

「俺も何かツレというものがほしいな畜生」

大学時代はそれなりにオタク仲間と言う奴らが居た。
いや、オタクと言ってもかなりコアなオタク。そう、東方仲間と言う奴らがいた。
例えばオタクといえば健常者ならガンダムやけいおん！などの知識を以上に兼ね備えている人々の事を言うだろう。
しかし、そのオタクの中でも突き出た者、それが東方オタクである。

「第一そんな幻想郷に不似合いな男が幻想入りするのがちゃんちゃらおかしいだろうがよ」

ふともとの世界の事を考える。
そういえばああやって仲間とつるんでた最後の記憶も、こんな暑い夏だったな。

「……ん？」

ふと頭におかしな記憶が挟まる。仲間とつるんだ最後の記憶の次に出てくる記憶。
ぼんやりとしか脳裏に移らないが、マンションの一室が映し出される。
そしてそのマンションから出た自分が出合った人物は黒い服を着た金髪の少女……

「……？」

記憶はそこで停止し、もうそこからはぼんやりとし始める。
……なんだろうか。今のは…あーだめだ。思い出せない。

「なんだ…今の」

始めてみるものなのにとても懐かしく感じた。
自分の頭の中でも分からないものはあるんだな。
こりゃ勉強になった。

「まぁいいや…くぅ～～～…！！」

すっかり溶けた氷を捨て、大きく伸びをする。
今日も太陽が腫れているように晴れてるなぁ……
うん、今のギャグはメモっとこう。

「さって！今日は何をしようかね！」

拳をパンと叩いて、幻想郷の上空を飛んだ。

「ふわ～りふわんて～ふわりんこ～」

何か事件でも使徒襲来でもコロニー落としでも何か起きないかな～と人里周りを飛び回る。

すると、なにやら人里の一軒家の周りで人だかりが出来ている。

しかもただ事ではない大騒ぎだ。

「お？なんだなんだ？」

人里に着陸し、その人だかりを見に行く。

「殺人だとよ」「んなバカな、幻想郷で人間同士に恨み合うなんぞ」

「おっかねぇな」

「見た奴は誰も居ないらしいわよ…」「怖いわねぇ…」

殺人事件？こりゃまたサスペンスなことを…

「ちょいと失礼」

人だかりを抜けて現場の一番前に向かう。
暗い家の中で、誰かが血を流して倒れている。

「ｏｈ…「どいてくれ…すまない…ん？大学生か」おや慧音さん」

殺人事件と聞いて駆けつけた人里の守護神、上白沢慧音さん。
刑事でもないのに何で俺と慧音さんは一番前に出たのだろうか…

「ふーむ…で？どうすんのこの屍」
「どうすると言われてもだな…」

ポリ公ならここで死体の撮影や、死体解剖、現場の確保などをするだろう。
だがここではそうは行かない。カメラもないし解剖する知識もない。
どうしようか。

「……そうだな、まずはあれだ。凶器の押収です」
「凶器の…おうしゅう？」

ダメだコイツ…

「つまり、これが人里の人間同士による殺害なら、殺害に使われた武器ってのがあるっしょ？」
「そうか、能力を持たない人間が殺人をする場合は武器がないと駄目と言う事だな？」

当たりめぇだろうが。

「んで、まず殺された奴についての交友関係も調べる、その中から動機のある奴をあぶりだす」
「交友関係？」
「そう、交友関係」
「しかし、交友の中の者たちからどうやって…」

コイツ本当に守護神かよ…。

「はぁ…ったく…」
「すまない…人間同士の殺害など前代未聞だからな…」

俺はびしっと指を挿して言い聞かせるように言う。

「いいっすか？たとえ親友の中である人間だろうとその人間の全てを受け入れるわけじゃない。
何かしら気に入らないところもあるんですよ。
つまり、この人を殺す理由がある人が居るはずなんです。
じゃなかったら空腹を満たすためにわざわざ家まで妖怪が襲ってきたか、
それとも、別の誰かが依頼を受けてその人を殺したか
いずれにせよ何かの命を奪うにはそれに相応した理由があるんです。
だからその理由がある人を探し出してとっ捕まえる。おｋ？」

理由もなしに殺すんなら無差別殺人だ。だが少なくとも幻想郷でそんなストレスは出ないだろ。
しかも無差別殺人であろうと理由はあるが、これは明らかに的確すぎる殺人。

「つまり、私たちがまずすべきことは一体なんだ？」
「まずはこの被害者の戸籍や経歴、んで勤務先も調べるべきでしょう」
「分かった」

と言って突然頭を振り上げ、死体に向けて振り下ろそうとする。
うん、見間違いだ。

「起きろ！！！話を聞かせて「お前の脳は永眠しているようだな」痛っ！！何をする！！」

本当にコイツで大丈夫なのか…

36．バカと天才は紙一重らしいです。（後書き）

こぼれ話

大学生「蓬莱の薬ってうまかったの？」

輝夜　「何か……イチゴみたいな味だった」

妹紅　「……ウニのようなプリンのような…」

37．知識人は絶えず知識を蓄えています

ま…まぁ慧音さんの暴走は食い止めたことだ。次はちょいと怖いが死体を調べよう。

ふむ…女か。結構なハイスペックだ。胸は、C辺りだろう。いいね。

恐る恐る俺は首元に手を当てる。……ん？

「……ふむ…」

「分かるか？」

「ああ…それがだな……「ただいま～…あれ…どうしたんですか？慧音先生」ん？」

声の方を振り向くと、和服で鞄を持った青年が不思議そうな顔で俺と慧音さんを見る。

多分この女の夫だろう。……。

「え、何？守矢神社の妖怪さんも一緒じゃないですか。いったい何ですか？」

「何って…お前は状況を理解しているのか！？妻が殺されたんだぞ！！」

慧音さんが男の胸ぐらをつかんでゆっさゆっさと揺らす。

相当慌てているようだな。まぁいいだろう。

「あー妻の事ですか…妻は僕が帰ってくるころになると何故か必ず死んだふりをするんですよ」

ほら、この包丁。と、妻の背中に刺さっている包丁を抜くと、突然妻が飛び起きた。

「あらお帰り。今日も夜勤だったの？」
「ただいま。うん、ちょっと博麗神社で宴会があったんだ」
「そうなの？たまにはお賽銭も入れてあげないとかわいそうよ」
「まぁね」
「そ・れ・と！獣道に行くときはちゃんと御守つけていかないとダメでしょ！」
「ああごめん、忘れてたよ」

……何だこの感じ…すげぇ腹立つ…

「なんだよなんだよ！人がせっかく推理して事件解決！してやろうと思ったのによ！！」

どーせ俺はこういう脳なしのただのアホ学生ですよ～だ！

畜生！俺だって頭脳戦がしてぇよ！何時までたっても馬鹿な俺じゃねぇんだ！

俺だって頭を使うんだ！！！

「俺だって！俺は！……何を言おうとしたんだっけ」

もういい、紅魔館に行こう。

どうせ今日は何もイベントがないんだ。

と言うわけで紅魔館道中。

「そう、俺はルーミアが目の前に居ることに気づいた」
「気付かなかったのか～？」
「気付かなかったのだ～！」
「そーなのかー」
「そーなのだー」
「じゃあたべてもいいのか？」
「何を？…は！まさか…」

妄想中…

「だいがくせーのソーセージ～」
「ちょ…待て…そのソーセージはうまくない…あぎゃっ！」
「うー…あんまりおいしくない…」

妄想終了

「ルーミア、俺の肉を食うのはやめろ。まずいし臭いぞ」
「？じゃあやめる」

男の貞操は守らないとな。うん。
あ、ちゃんと俺は毎日洗ってるからそんなに臭くはないぞ。
いたって清潔だぞ。本当だからな！！

と言うわけで紅魔館にやってきた。
そうだな、今日は図書館にでも行くか。
情報は常に欲しているからな。なくした記憶を取り戻す手段になるかもしれない。

「……どこにあるんだろうなぁ…」

庭で佇んでいる俺、地価図書館と言うが、どこにも地下の入り口がない。
美鈴さんは相変わらず就寝中。夜行性でもないのに何故昼間に寝るんだろうか。

「しっかし……何で日が嫌いな吸血鬼の家の庭に光合成をする植物が植えられているのだろうか…」

俺は植物には詳しくないからよく分からんが、光合成は植物が生きるのに必要ってことは知ってる。
……まさかレミリアは自分の命より植物を優先したのか？なんという植物愛。

「いや、ねぇだろ…さすがにねぇだろ…うん。レミリアがそんなに環境に優しいやつなわけない」

そんな感じで、1時間ほど迷ってから咲夜さんに道を聞いた。
やっぱ持つべきものは友だ。

「へぇ、暗いな」

明かりを探して見回していると、来客用、と書かれたろうそくがあった。

まさかこれを使って本を読めと?どこまで客に冷たいんだここ。

「俺には必要ない」

ATフィールドを発光させて辺りを照らす。

そして長い階段を下りると、そこにはあの女性が立っていた。

「いらっ・・・・・・と・・・・わね?」

声が小さくて全く聞こえません。

軽く手を差し出すと、その女性も手を握り返す。

「あ…ああ。大学生だ。ヨロピコ」

「魔理沙から話は聞いているわ。私はパチュリー・ノーレッジ。動かない大図書館という名で知られている」

先生。図書館が動いたら怖いです。

「ま…まぁよろしく。…図書館って動くの?」

「動くわ」

「本棚の構成的な意味出だよな?まさかリアルで動くんじゃないだろうな?」

「動くわ」

「……ホント?」

「本当。地は絶えず動き続けるわ」

それは図書館が動くんじゃなくて地球が動いてるんだよ。

「まぁいいわ。それにしてもあなたは面白い魔力を持っているわね」

パチュリーが俺の頬をぷにぷにとしながら俺に尋ねる。

別に俺が小さいわけではない。パチュリーが飛んでいるのだ

「まぁ、妖力と霊力とＡＴフィールドを兼ね備えているからな」

「ＡＴフィールド…アディショナル・テラーフィールドね？」

「いかにも」

さすが知識人だ。

「全ての人が持つ特殊な心の壁。その壁は攻撃はおろか、電磁波も通さないと言われている」

「だが、その壁をひとたび解き放つと、人は形状を維持できない。正解だろ？」

「面白いわね、あなたの話を聞かせなさい」

「ｏｋ。その前に」

俺はパチュリーの頬をつねる。

「むきゅ…」

「いい加減俺のほっぺをつかむのをやめろ」

「あ、ごめんなさい」

37．知識人は絶えず知識を蓄えています（後書き）

こぼれ話

大学生「ふぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ！！！」
パチェ「むきゅきゅきゅきゅきゅきゅ！！！」

こあ　「……何やってるんですかあんたら！？」

38．大学生はやわらかいらしいです

俺とパチュリーは椅子に向かい合って話をしよう。
あれは確か３６万年前か…ではなく、ちょいと俺の能力について話した。

「俺は……確か心の壁を操る程度の能力を持っているらしい」
「自分の能力くらい覚えておきなさいよ…」
「心の壁…ですか」

小悪魔、お前も俺の頬をぷにぷにするのか。

「そう。ＡＴフィールドとアンチＡＴフィールドを自由に操って…
他人のＡＴフィールドを奪ったり、他人にＡＴフィールドを分けたりすることが出来るらしい
後小悪魔、俺の頬はそんなに柔らかいのか？」
「はい」

さいですか。

「そう、心の壁…私たちの中では結界と呼んでいるけど、確かに幻想郷では結界の応用は広いわ。
外の世界で知られているのは空想の結界や現実の結界、区別はたくさんあるわね。
漫画の中でも結界はたくさんあるわ。
例えば週間少年サンデーでの『結界師』で登場した結界。
あれは私たちの中でも最も基本とされる結界を使ったものよ。
他には、週間少年ジャンプでの『銀魂』あの狛犬が使った結界も幻想郷では常識ね。

外の世界でも同じように結界を使うものが居るわ。
霊媒師よ。彼女らは自らの結界と霊の結界を共有することによって自分に憑依させるの。
霊夢も同じように神の結界と自分の結界を共有することによって神を呼び寄せる。
同じものね」

なるほど、中々わかりやすい説明だ。
つまり結界は空想のものじゃない。現実の世界でもある、と言う事だな。

「結界か……随分と応用ができるんだな」
「そう、結界と言うものは応用が高いのよ。時には人を傷つけ、時には人を守る。
コントロールが効けば平和利用も可能ね、でも使い方を誤れば世界を危機に陥れる。
暴走した結界など、ヒステリーを起こした女性と同じ。手がつけられないわ」

どこかで聞いたことがある台詞だが…この際どうでもいいや。
ふむふむ、と頷きながら聞く。

「なるほどね」
「さて、こっちも質問をするわよ」
「はいよ」

ろうそくの灯が鈍くパチュリーの読書用の小さなメガネを光らせる。

「あなた……あの外の世界の救世主、碇シンジね」

「一部じゃあそういわれているらしい」
「……どういうことかしら？」

俺も脚を組んでアメリカ人のように手を横に広げて肩を上げる。

「俺にも分からねぇよ。こちとら記憶喪失だ。自分の名前も、住所も覚えちゃいない。
エヴァのサードチルドレンと言われたり、妖怪と言われたり、浮浪者と言われたり。
……あ、でもこんな最低な俺でも、少しは進展があったな」
「？」
「進展ですか？あ、ここが一番やわらかい…」

小悪魔。隣に座ってまで頬をぷにぷにしたいか。羽が腕に当たるんだけど。
意外にもチクチクするんだけど。

「あれだ、家族だな。ワシの脳内メモリの中でいつの間にか削除されてたフォルダだ」
「家族？……」
「イエス。ファミリー（マート）だ」
「山の神社の人たちの事かしら？」
「まーな。緋想天異変解決までは居候でいずれ向こうを立とうと思ったが…
向こうさんがどーしても居てくれって言うもんだからね。
俺は仕方なーく向こうの一員になったわ……この感覚……霊夢か！」

俺が入り口の方を振り向く。そして目を閉じてその辺りの霊気を感じとる。

わずかながら霊夢の特殊なＡＴフィールドを扉越しに感じる。

「？…霊夢？一切その霊気は感じられないけど…」

「距離は結構離れている。だが約数分後に来るぞ。来客の準備をしておけ。

ちなみに魔理沙と射命丸のＡＴフィールドも検出した。３人で何か探し物をしているようだな」

強めのフィールド、そして薄いがその分柔軟性に優れるＡＴフィールドを感じた。

その上一人は妖気、そしてもう一人は魔力を感じる。柔軟性と妖気、これは射命丸だ。

魔力が強い、まぁアリスか魔理沙だろう。

「そう、ありがとう。あなたはどうするの？」

そしてこの３人がこっちに向かってる…つまり…

「箱盗難は日常茶飯事ですか……俺はこのまま大人しくしておくさ」

『パチュリ～居るんでしょ～？』

『居ても居なくても勝手に入るぜ』

『失礼しま～す』

「本当ね、来たようだわ。それじゃ大学生君。好きに読んでなさい。

小悪魔、彼の案内をお願い」

「了解しました」

「案内はいいから頬から手を離せ」

「嫌です」

こいつ…

「大学生さんって普段どんな本を読まれるんですか？」

天井付近の本を（頬をつままれながら）探していると、なつかしのラノベや東方儚月抄

他にも裏死海文書、死海文書、目玉のついたティッシュなどいろいろあった。

「ああ、俺か？最近読んだ本は竹取物語（のエロ本）やら三国志（のエロマンガ）や

般若心経（をネタにしたギャグマンガ）だな」

「般若心経？！面白いんですか！？あんな漢字の列が！」

「甘いな幼女、般若心経は爆笑モノだぞ」

「爆笑モノ！？どの辺に笑いの要素があるんですか！？」

「ふっ…まぁ機会があったら読み聞かせてやろう。口語訳でな」

「それはありがたいです…けど…」

お、あったあった。本当に何でもあるんだなここの図書館は。
まさか、俺の今晩のオカズまであるとは…

「……霊術書？」
「俺のスペルカードはどうもあれなんだよ、どうしても弾幕にならないんだよなぁ…」
「え」
「いや…例えばマスパ、魔理沙の場合ちょいとだけでも弾幕でてるだろい？」
「ああ、端っこ辺りに」

画像があればいいのだが、幻想郷にそんなシステムはない。

「俺、純粋な波動だからな。弾幕でないから。波動だけだから唯一ちゃんと出てんの
ヤシマ作戦だけだぞ。しかも、こけおどし程度だ。
だからこれでまともな弾幕の練習しようってわけ」

ヤシマ作戦の発射準備のときのあれだ。ミサイル弾幕。
霊夢相手に撃ったが、軽々と避けられた。

「まぁそんなところだ。ところで小悪魔よ」
「はい？」
「頬をやめたのは感心するが、何で俺の二の腕をつかんでいるのだ？」
「すべすべでやわらかいからです」

……まぁいいか。
とりあえず本を開き、読み始める。

「日本語でおｋ」

いきなり甲骨文字レベルの文字を出されても困る。

38．大学生はやわらかいらしいです（後書き）

こぼれ話

ニート「求人情報じゃん、えー何々…教師か…
自給７８０文!?ほうほう…学歴問わず！
それに制服もなしか！こりゃ行けるぜ！」

慧音の面接合格。

初日

チルノ「よろしくお願いしたげるわよ！」
ニート「聞いてねぇぞこんなの…」

39．幻想郷での弾幕ごっこは日常茶飯事です。

「そんな本で大丈夫ですか？」
「一番いい本を頼む」

と言うわけで小悪魔が厳選したいい本をいただいた。

「サルでも出来る弾幕入門…チンパンジーでも出来る弾幕応用
オランウータンでも出来るスペカ入門、テナガザルでも出来るスペカ応用…このくらいですね」

何で俺の読む本はそんなにサル向けが多いんだろうか…

「俺の弾幕能力はサル以下ってか？」
「え！？あ、いやそういうわけじゃないんです！」
「……」

スーパージト目タイム。

「うぅ…そんな目で見ないでください……」
「……ＺＺ…」
「って寝るな！！！」

すまない。言葉は寝て覚える主義なのだよ。
約３年くらいで一つの単語を覚えられる。

「まぁいいや。この弾幕入門を読ませてもらおう」
「分かりました。それでは紅茶をお持ちします！」
「あ、俺ココアで」

「はい！かしこまりました！」

仕事だと張り切るんですな。感心感心。
最近の若者は仕事もロクにできないから困る。
……ちゃんとココア入れてくれるのか心配だが…

「さってと…飛びながら読む本は疲れるだろうよ……」

パチュリーの椅子の近くにしか普通に読めるところがない。
まぁ自分用の図書館なんだからしゃーないだろうが、不便は承知だ。
さっきから霊夢と魔理沙の声が聞こえてくるが、まぁそういう賑やかさもありだろう。

「ふーんふーん…っとな」

テーブルに本を置いて、ページを開く。ちゃんと日本語だ。
さっきの甲骨文字はどこの文明の奴が読む本なんだろうかねぇ。
まぁそれは気にすることじゃないだろう。

「…ふーん……」

メモを取るわけでもなく、普通に流し読みをしながらページをめくる。
流し読み程度で中々頭に入るものである。この手の本を読むことは嫌いじゃない。
『弾幕を集め、その弾一つ一つに命令を送り、操作する』…か。フアンネルみたいなものか？

「つまり……」

指先からオレンジ色の球体を作り、それに命令を送る。
すると、その球体は俺の周りをくるくる回り、再び指先に戻った。

「これがホーミング弾の基本か…ちょっと実践してみようか」

図書館の広いところに立ち、本を置いて実践をする。
意識を集中させ、辺りに青い魔方陣を形成する。
その魔方陣は四方に散らばり、床に待機する。

「……！」

精神を集中させ目を見開く。すると辺りに散らばっていた魔方陣から、
約１０個以上の霊弾が出来た。俺の実力ではこの程度だ。

「……（そこら辺を飛び回れ）」

頭の中で命令を送ると、図書館の中でホーミング弾が辺りを飛び回る。
ほう、面白い。

「……（戻って来い）」

そう命令を送ると、俺の周りに青い霊弾が戻ってくる。

「……ぷはぁ！きついなぁ！！」

命中率はそれなりだろうが、やはり精神を多く使う。

これは結構な大技用としてとっておこうか。

「さーてさて……まぁこんなもんだろ「邪魔よ！大学生！」うるせ…うぇぇ！？」

目の前にでっかい魔方陣を装備したパチュリーを発見。

え、何？この図書館、客に攻撃するの？

「日符『ロイアル・フレア』！！！」

だいがくせいは　めのまえが　まっかになった　！

しゅうぅ…っと煙が晴れたところは、同じ場所。
後一秒ＡＴフィールドを張るのが遅れたら消し炭になってたところだ。

「いてて…何だってんだみみみみ……」

そのロイヤルフレアを撃った本人、パチュリーに頬を再びつままれる

「悪いわね大学生。貴方も手伝って」
「いや、誤射するような奴を味方と思う奴がどこに居るんだよ」
「その点については謝るわ。詫びとして私のこの帽子をあげるからお願い」
「引き受けよう」

ＺＵＮ帽を得られるのなら龍神をも殺す！！！！
まぁ多分俺の脳筋頭じゃサイズが合わんだろうが。

「さて、お前は一体誰と戦っているんだ」
「見れば分かるわ」

パチュリーが指をさす方向には、赤い服を着た、伝説のスーパー人間、博麗霊夢だ。

「ニャメロン！！あいつは伝説のスーパーニホンジンなんだど！！」
「関係ないわ」

どうやら言っても聞かないようだ。どうして幻想郷の住人は話を

聞かないんだろう。
そして目の前に居る霊夢も同じだ。赤いオーラを出しながらこっちに近寄ってくる。
今説得しても絶対に話を聞かないだろう。

「大学生…そこをどきなさい。賽銭箱を取り返すわよ」
「霊夢……悪いがＺＵＮ帽を持っていない人間に用はないんだ。ってかまた賽銭箱盗まれたのか」
「そうよ！セコムさん全然役に立たないじゃない！！！」
「役に立たない割にはさん付けするのな」
「うっさい！！あんたに用はないのよ！！！いいから賽銭箱を取り返すわよ！！！」
「用がないなら俺とパチュリーに攻撃しないでもよくね？」
「―っ！！霊符…」

その一言にキレたのか霊夢がスペルカードを取り出す。

「夢想封印！！集！！！」
「ったく…話くらい聞けっての…絞符『エクストリーム・首絞め』」

弾幕を掻い潜り、間合いを詰めて、霊夢の細い首をつかむ。

「ぐ…かはぁっ！！あが…っ！！」

札と大幣を落とし、腕をだらんと下げる。しかし意識はあるようだ。

「あの首絞め…下手したら人を殺しかねないぜ…マジで苦しいぞあれ」
「残酷な一面がありますよね、大学生さんって」

外野が何か言ってますね。まぁいいや。

「この…卑怯者…弾幕で勝負しなさいよ…！！」

「悪いな。想像力が乏しいせいかうまく弾幕が思いつかないんだ。ま、ただの劣化コピーとでも思ってくれ。ちなみにこの首絞めは碇シンジを模作したものだ」

「！？」

魔理沙が反応する。

「まぁいいや……せらぁ！！」

背負い投げをし、霊夢を床に叩きつける。

するとすぐに受身を取って俺との距離をとる。

「っつ…くぅ…！卑怯者……！！最低人間…！」
「うちの業界ではほめ言葉です、さて、こっちもスペルを使わせてもらおう。案ずるな。
お前に一度使ったスペルの強化バージョンだ」
「させるか！！霊符『夢想妙珠』！！！」

霊夢が巨大な霊弾を８つ撃つ。その玉はゆっくりと俺の方に近寄り、目の前で爆発した。
この霊弾は妖怪をほぼ確実に倒すことが出来るものだ。

「ＡＴフィールド全開！！！」

巨大な八角形は図書館の本棚を真っ二つにし、
本をばたばたと落とす。

「……やるじゃない」
「防御特化でね。さて、今度はこっちからだ」

距離をとり、青い魔方陣を１０個ほど展開する。
そしてその真ん中に立っている俺は、巨大なライフルをＡＴフィールドで作り、
霊夢に向ける。

「電砲『ヤシマ・ストラテジー　序』」

39．幻想郷での弾幕ごっこは日常茶飯事です。（後書き）

こぼれ話

フラン　「……？」
ペンペン「……くぁ？」
フラン　「……」
ペンペン「くぁ～？」
フラン　「……かわいい…／／」

紅魔館に新しいペットが出来たようです。

４０．自分の状況は自分でもよく分からないときがあります

手で作ったライフルの照準機を覗く。照準機の中心に霊夢を映す。

「ポジトロンライフル充電開始」

俺の周りに緑色のリングが現れ、そこから霊力が供給される。
照準機の下方に表示されるゲージが上昇する。
それを確認してから、俺は目を閉じ、思考する

（第１、第２魔方陣攻撃システム攻撃開始、自動追尾）

すると後ろに設置されている魔方陣の２つが回転し、
稼動音と共に数１０発の青い霊弾ミサイルが一斉に飛び出す。
そのミサイルは空中を一定高度まで上昇した後、急降下して霊夢に向けて落下してくる。

「またあのちんけなホーミング弾？こんなの…」

（反転、追尾）

ひょいと霊夢はホーミング弾をよける。
だが、攻撃は立て続けに霊夢に向けて絶えず続く。

（ミサイル分裂、小型化）

「分裂…面妖ね…」

そのホーミング弾を図書館中を飛び回り、一発、また一発と華麗に撃ち落す。
下から来る物は払い棒で叩き落し、後ろから来るミサイルは一回

転すると同時に撃ち落し、
四方を囲む弾幕は急降下で自滅させる。弾幕避けのスペシャリストならではの動きをする。

（第３…第４魔方陣攻撃開始。もっと時間を稼ぐぞ）
「しつこい！博麗弾幕結界！！」

図書館の一部分が赤く光、自分の操作していた弾幕の通信が途切れる。

「やられたか…地球重力誤差修正…磁場誤差修正完了…陽電子稼動、問題なし。
目標は依然健在……全く…奴は化け物かよ…」

「これで全部かしら？」
（予備魔方陣攻撃システム作動）
図書館の横通路に仕掛けた二つの弾幕システムを作動させるが、撃つと同時に、霊夢がとてつもないスピードで投げた針によって壊された。
「予備も壊しちゃったわ。これで「甘い、詰めが甘いぞ霊夢」なっ！？」
図書館と言う狭い場所で、わざわざ接近してくれるとはご苦労なことだ。
これで逃げ場はなかろう！！
「目の前の攻撃システムを見逃してどうするよ！！！発射！！！！」
周りにあるリングが緑色に発光しながらポジトロンライフルが発射される。
そしてその発射された巨大な陽電子砲は霊夢の全身を焼き尽くす…

事にはならなかった。陽電子をその場で消滅させる。
流石に異変解決のプロでもこのレーザーが目の前に現れたのには驚いたのか、
顔が青ざめ、動きが止まっている

「動きが止まった。事実上被弾。止めを刺すぜぃ」

何も殺すわけじゃない。あのレーザーを人間にむけて撃つと、普通は消滅する。
しかも、あの様子だと結界は無展開、つまり、ただの人間の状態だったと言うことだ。

「ここは…妖力もＡＴフィールドも必要ない」
「……！」

意識が覚醒したのか、先ほどまでの威勢もなく、ボーっとした表情で札を放つ。
狭い場所だと避けづらいが、壁があるジャマイカ。
壁を駆け、霊夢の後ろに回りこみ、拳に力を入れる。

「！？」

「ＴＨＥ　ＥＮＤですな」

裏拳を霊夢の頭部に命中させ、よろけたところをオーバーヘッドキック（ボール役…頭）で
バシコーンと一発蹴ろうとしたら、見事に外してこけた。

「あだっ！！」
「う……うぐ…」

まぁ向こうも気絶してくれたからよかったけど。

数十分後、やっと脳天気な霊夢でも話が飲み込めたようで…
とりあえずパチュリーの罪は晴れた。同時に敵対する理由もなくなった。
というか、賽銭箱盗まれたくらいであんな霊気を出す必要があるのか？

「んで？こないだの犯人はいいとして、なんたってまた…この図書館に？」
「挨拶代わりに尋問してたら急にパチュリーが怒り出したのよ」
「そこの魔理沙と天狗が暴れたからよ！」
なん…だと？
「……外野ぁぁぁ！！」
「「！！！」」
外野でこそこそ話していた魔理沙と射命丸に怒鳴りつける。
「土下座しろ！！俺に！！！」
「「何故に！？」」
「俺が一番とばっちりだからだろうが」
「「ごめんなさい」」
ったく…ロイヤルフレアをばっちこーいして、霊夢をデストローイした挙句、
元凶がこの馬鹿二人だぁ？ふっざけん軟骨！！！
「まぁ…暇つぶしになったしいいか。と言うわけで霊夢。こっちにゃ何も手がかりはないぞ」
「そう……本当にどこ行ったのかしら……まぁいいわ。こっちも楽しかったわよ」
「知るか、こっちも手がかりはない。前見つけた場所に行ってみろよ」

そうね、と霊夢たちは次の捜索ポイントへ向かった。
なるほど、向こうさんは賽銭箱の盗難で忙しいのか…女子会とやらはどうなったんだろうか。

「さて…俺も帰るか「待ちなさい」ん？」

パチュリーが俺を呼び止める。かなり真剣な表情をしている。

「……月が綺麗な日には注意しなさい」
「…サテライトキャノンでも来るのか？」
「それより危険よ、あなたを狙う刺客がやってくる。いいえ、その刺客はあなたの旧友…
その少年によって…あなたは行くべき世界に連れ戻されるわ」
「旧友ね……予言どうも、そういうのは案外当たるんだよな」

図書館の扉を開ける。すっかり暗くなった夏の空が目の前に映る。

「あーそうだ。パチュリーよ」
「？」
「俺は予言を覆すのに定評があると神奈子さんに言われたことがあるんだ。じゃな～」

『伯方の塩は～♪ふつくしい～♪固体で食うと～むせるぅ～……』

「……あの子…自分がどれほど危険な状態に遭っているか分かっているのかしら…」

守矢神社

「……月の刺客…かね…まぁ…想像はできるが…」

もしも俺が本当に碇シンジだとしたら、恐らく月から来るのは最後のシ者。渚カヲルだろう。

…だが、あの坊主、最後は自分を殺せと申す。

シンジは殺したが俺なら初号機でお持ち帰りだな。わしづかみ状態で。

「死の願望は甘えだ。何度死にたいと思っても何度殺したいと思っても

思いとどまるのが人間のクチよ、人になりきれなかったな。あいつは本当に」

まぁいいや……もういい。考えんのマンドクセ。

「寝よう！！」

明かりを消して、布団の中に引きこもった。

スキマ

「やあ、久しぶりだね、幻想郷の賢者さん」

「あなたこそ久しぶりじゃない…最後のシ者。何をしに来たのかしら」

「時は近づいている。そう伝えに来ただけだよ」

「そう、彼はあなたに利用されるのね」

「そうじゃない、歪んだパズルは元に戻すべきだろう？
それに、彼は幻想郷でもこっちの世界の住人でもない」

「？」

「もう一つの外の世界の住人だよ。サードインパクトが起こらなかった別世界の人間。
その世界では幻想郷の存在、そして僕らの世界の住人の事も知っている。
彼らは平和に生き、そして、仕事に生きている」

「……」

「彼、シンジ君はその一人……

「大学生の名前は……？」

「……」

「忘れたよ」
「えっ」

４０．自分の状況は自分でもよく分からないときがあります（後書き）

こぼれ話

ペンペン「くわ～！」

咲夜　「きゃあああああああああ！！！！？？」

フラン　「どしたの？」

咲夜　「なななな…なんか変な生き物がお風呂に居る～！！」

フラン　「ああ、彼？新種の温泉ペンギン、名前はペンペン！もう一人の同居人だよ～！」

レミリア「私こんな生き物飼っている覚えないわ……」

41．今日も神社は平和ですか？

「ほっ、はっほいっと…よし焼けた…ぞぉ！！！！」

フライパンを振り、早苗の皿に目玉焼きを叩きつける。

バシコーン！！！と食べ物とは思えないような不思議な音がするが、盛り付けは完璧だ。

「わわっ！投げないでくださいよ！！」

案ずるな。目玉は死んでない。

「さて、いただくとするかね」

豆腐と2人分の飯と味噌汁を持ってきて食卓に置く。

よっしゃ！いただこうぜぃ！と気合を入れる。

と同時に早苗が俺の顔をまじまじと見つめていた。

「……？…大学生さん」

「なんだね？」

「目、青いですよ？」

「は？」

いきなり何を言い出す。と俺が笑いながら鏡を見る。

「あれ…おかしいな。ホントだ」

「新劇のシンジさんみたいですね」

「ははっ全くだ。とうとう人妖化が進んでるのかね」

「あ、そういえば大学生さんって人妖でしたよね」

「もしもそうだとしたら？」
「いえ、もしももクソも人妖ですから」
「ああ、そうだ、俺は人妖だ。それがどうした？」
「ええ、それが…」
「人妖は実はフェイクで妖怪人間ベベロバーだったってか？」
「いえ、そんな名前のセンスの悪い妖怪だったら速攻で追い出します」

まぁそうだろうな。で、ベベロバーって何だ？

「……はぁ…で？」
「妖力半端じゃないですね」
「ああ、もう隠さないよ」
「いや隠してください。人里に行くのに困ります」
「わーたよ。しかし目が青くなっちゃったか…俺の自慢の黒目はどこに行ったのか…」
「あの黒目自慢だったんですか？」
「実はそうでもなかったりする」

早苗、そんな軽蔑した目で見ないで。Mじゃないけどぞくぞくする。リアルな意味で。

「まぁいいや。食ったものは水に叩き込んどけ。そして洗うんだ。おk？」
「はい、ごちそうさまでした」
「お粗末さん……さて」

こないだの霊夢デストローイで、守矢神社の知名度が格段に上昇した。
無論、こっちの説法で向こうさんの神社の方も宣伝をした。

が、遠い＋めっちゃ妖怪居る＝行きたかねぇよカス。という方程式が完成した。

しかし守矢神社は参拝用のルートがあり、大天狗の許可があれば天狗の里の出入りも可能。しかも人間と盟友関係のある河童、そして厄をとる厄神も居る。あと秋姉妹も。

まぁＴＮＴＮは仕方ない。

「んしょっと！こっちもそろそろ参拝客が来る時だな」

「そうですね。今日も頑張りましょう！」

「だー待て待て早苗。お前はパジャマで巫女の仕事をするつもりか」

「あ」

「それに寝癖…ったく世話の焼ける奴だな」

「す…すみません！今直します！！」

仕事熱心なのはいいが、早苗は慌てる癖がある。

だから料理がヘタクソなのか…。業火で目玉焼き作る奴はこいつ位しかいないだろう。

「だが！それがいい（キリッ）「なにがいいの？」ゴホン。さて賽銭箱のチェックだ」

諏訪子、人はそれを不意打ちという。

「おはよ～だいがくせ～、んで、今日も立派なジーパンだね、しかもＩＬＯＶＥＮＥＥＴシャツ」

「だろ？」

「それで神主やるの？」

「おう」

「ざけんなボケ学生」

あの、服装でミシャクジ様？ちょ…待て…待つんだジョーーーーーーーーー！！！！！

「あぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！

やめろ！やめるんだ！！今すぐその毒蛇をのけるんだ！！

かむなかむな！！！あれあああああああああああああああああああ！！！！！」

散々叫んだ後…

「なーんて、冗談だよ。さっさと着替えな」

「……（ピクピク）」
「ん？どしたの？」

かばっと起き上がり、諏訪子さんの帽子を思い切り不覚かぶせる。

「あう！？」
「俺じゃなかったら死んでたぞコラ」
「ひよっこじゃなかったんだ。もっと感謝すべきだよ」
「出来るかアアアアアアアアア！！！」

ったく！幻想郷にはろくな奴がいねぇな！！

「もういい！！俺は出かける！」
「すっぽかす気か～神のお仕事を～」
「お仕事？汚仕事の間違いだろ？」
「早苗～なんか大学生が巫女を侮辱したよ～」
「是非やらせてくださいな「巫女を侮辱する悪い子はだれですか…？ダレカナ？」……」

ブチギレ早苗は、第２０使徒サナエルと化する、
こうなってしまったらもう誰も早苗を止められない。
例え八雲紫であろうとエヴァを用意しようとも止められない。
マクロスクォーターは…最早サナエルの手にかかると鉄くずとなるだろう。

で、今サナエルは目をキュピーンと輝かせながら私の目の前に現れた。

「……（チラッ）」
「コノワルイダイガクセイカナ？」

「…………（チラッ）」

だが、サナエルの対処法は一つもないというわけではない。

そうその対処法は…

「見えた！！ピンク色！！」

「死んでください」

ではなく

「そういえば紫さんの家で勇者王のサイン会があるらしいぜ」

「凱様ーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

好物を見せる、または伝えることである。

「さぁって、俺も行くか」

今日もまた、巫女神主不在の守矢神社の一日が始まった。

「神奈子……私思ったんだ」

「何がだい？」

「これってさ…」

「うん」

「博麗神社よりタチ悪くない？」

無言の頷き、そして彼らの末路が決まった瞬間であった。

41．今日も神社は平和ですか？（後書き）

こぼれ話

妻　「……」

夫　「やれやれ、また死んだフリか…かわいい寝顔だ」

大学生「これはゾンビですか？」

夫　「いいえ、私の妻です」

あ、言うの忘れてましたが今回で日常は終了です。

さて次は……儚月抄ですね。

42．元々強い人よりキレたら強い人のほうが怖いです

外の世界、太平洋

赤く染まった海中、生物の一匹も居なくなっている海である。
この海はまさに死海、死の海。いかなる生物の生存も許さない、まさに死の世界。

「渚カヲルの予言の通り……スキマ以外の時は全て戻っている…」

水中から出た幻想郷の賢者、八雲紫は1滴の水もついていない体を軽く浮かせる。
そして空を見上げると、闇夜の空に黒い飛行機雲が多数見えた。
人一倍目の良い妖怪はその機影もはっきり見えた。

「軍の紋章…と言う事はここはやはり外の世界…それもかなり異質な場所ね…」

紫が辺りを見回すと、そこには一つの島があった。
…どこかで見たような青い正八面体はスルーした。

「流行の置物よ、最近外の世界の名古屋にもあれに似たようなものがあったはず
さて、それはさておき…」

紫は手から2匹のカラスを呼び出した。

「さあ行きなさい、私の可愛い式神たち。神酒を手に晴れを超え、雨を超え、嵐を超え、
そして賢者を探しなさい。私の計画のために……」

数日後、博麗神社

「大学生、やりなさい」
「俺はポケモンじゃねぇっての……そぉら！喰らえ！！」
「な！？避けられない…ぐぁっ！！！」

何で俺はこんなことをしているのか、そう。霊夢の特訓である。

「ったく…歯ごたえのねぇ…」
「もう一度…かかってきなさい！！」
「大学生」

「りょ…了解…」

間合いを詰めてゼロ距離で巨大な霊弾を腹に打ち込む。

「うぁぁ！！」

「紫よ…流石の俺もこれはかわいそうだと思うが…」

「いいわ、続けなさい」

実際俺の方も何の特訓か、見当はついている。だがこっちは弱みを握られている。

『外の世界での画像データはこっちが預かっている。晒されたくなければ来なさい』…

これが俺の弱みである。だって早苗のエロ画像とか保存された俺専用３０６ギガバイトオリジナルＵＳＢを向こうは持ってんだぞ。

ちなみに容量はもういっぱい。

「あれを早苗の目の前で晒されたら…確実に2柱に潰される…」

「くっ…！！！」

しかしすぐに体勢を立て直し、鳥居の前に着地する。

と、そこに何も知らないいつもの黒い服を着た魔理沙が、神社に遊びに来たようだ。

ん？黒い服…なんであいつはジーパン姿なんだ？やけに様になってるじゃないか。

「何か大きな音がしてると思ったら……またお前か大学生」

「わりぃな。迷惑かけたかな？」

「いや、面白そうだからいい」

こういう面白いことには目がない魔理沙だ。
そろそろ霊夢にも神力が宿っていることだしな。
魔理沙にもその技を見せられるかね？霊夢さんは。

「……天岩戸別命」

天岩戸別命……ってなんだろうか。
何かの神って子とは分かるが…と言っている間に神社の中に大きな穴が出来た。
黒くまがまがしい闇のような穴だ。しかもその穴、俺たちを吸い込んでいる。

「そう、いい感じよ霊夢…さあ大学生」
「お？なんだ？」
「この大きな穴、あなたなら対処する？」

俺の背中を叩いて、怪しく微笑む。コイツ…俺を試してやがる…
まぁ乗ってやらんこともない。

「ふむふむ、人を吸い込むブラックホールみたいなものか…
だが、所詮は人の作りし物……」

地面に手を置いて、軽いアンチＡＴフィールドを出現させる。
アンチＡＴフィールドは、ＡＴフィールドの逆バージョン。
つまり結界などの領域を解除させるシステムを持つものだ。

「つまり神を宿らせてもそれを解除すれば、その力も解かれる」
「そうね、正解。つまり？」

アンチＡＴフィールドを一瞬だけ目視できるほど増大させ、霊夢

に巻きつく。
　すると、霊夢の周りから光るものが抜け、みるみるうちに黒い穴も消え去った

「幻覚…って奴だな」
「珍しくさえてるわね、大学生」

「なんなんだよこれ……」
「紫が急に稽古をつけるって大学生を連れてきたのよ。で?何でアンタは外の世界の服なのよ」
「あれは稽古だったのか…。服は気分だぜ。昔の姿ってのも悪かないだろ?」
「知らないわよ」

夕方

秋というものはいい。秋は心を潤してくれる。リリンが生み出し

た文化の極みだ。
と言うわけで帰宅中の大学生です。突然ですが、俺の目の前がおかしいです。
秋といえば紅葉、そして食欲の秋というものが代表的だ。
だがこれはおかしい。実におかしい

「死ねやヴォケエエエエエ！！！！！稲でも刈っとけやぁあああ！！」
「ぶっ殺したるわ！！！後で後悔しても遅いで！！！！！」

……ん？

「厄神さん厄神さん」

すかさずその一番近くに居る厄神、鍵山雛様にお話を聞いてみましょう！

「何かしら？」
「神様ってキレたらヤクザになるの？完全に目がヤクザだよ？」
「そうね、ここ数年厄によるストレスでキレるときはあるけど、ここまでは行かないわ」

ですよねー！早苗がサナエルになる程度でしょうね！

ここまでキャラ崩壊するほどキレれるなんてこたぁねぇですよね！

「で？俺に何をしてしいと？」

「見ての通り、この子達は完全にイカレてるわ。後は分かるわね？」

美しさのかけらも感じられない弾幕の嵐を放っている。

まさかこれを…止めろと？

「やだ」

「拒否権なんてそんな都市伝説があるとでも思っているのかしら？」

「無理だよそんなの…こんな秋静葉と秋穣子を止めるなんて…出来るわけないよ！！！」

「やるなら早くしろ、でなければ厄を注ぐ。しかし帰ることは許さん！」

しぶしぶ嫌々そして自らの死を覚悟して、俺は向かった。

「まちたまえー（棒読み）」
「「あ゛!?」」

ひぃぃ！

「ぼくわかなしいです、きみたちがけんかするのをみるとかなしいです（棒読み）」
「おのれはどこの紅葉のモンじゃワレぇえ!!」
「ウチらのイモはいるたぁええ度胸やのぅ!!!」

……帰っていいかな（チラ）

「いいだろう！わしがチミらの喧嘩の原因を右から左に受け流してやろう!!!」

ピチューン（×1）

「こんのうつけ神が紅葉がボケたジーさんやバーさんがやることやとアホみたいなたわごと抜かしよるんじゃボケが！！
ボケたジーさんやバーさんは紅葉が確かに好きや！
けどなぁ！！若年層も暑いんじゃカス！！！」

「事実若者が紅葉狩りしてる光景なんて見たことねぇしな」

ピチューン（×２）
ピチューン（×３）

「大学妖怪はん、アンタは秋の作物は好きかいな？」
「あ…ああ…好きだが」
「神社に奉納したことがあるかいな？」
「ああ、北野、大宰府天満宮、他には八坂神社や、博麗神社、寺にも何度か」
「私のや奇異も食べたことはあるか？」
「ねぇっす」

ピチューン（×４）
ピチューン（×５）

「がふ……の扉を開けなければ人類に未来はない……」

「「大学妖怪！！あんたはどっちの味方や！！！」」

「は？」

「「紅葉か秋の味覚！！どっちの味方や！！！！！」」

「秋といえば読書だろＪＫ」

静葉のターン

ピチューン

ピチューン

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピチューン！

穣子のターン

「大根スマッシュ！！」

ゴキャッ

「カブハンマー！！」

ベキッ

「はぁぁぁぁ！！！！！焼き芋スパイラル！！！」

じゅうううううう…

数分後、すっきりしたのか、秋ヤクザは帰っていった。
なんだろう、このボコボコ感…なつかしい。
昔クルマに石ぶつけたらコワモテのおっさんがやってきてそのまま崖から突き落とされた気分。

「見事なまでのピチュりっぷりね…」
「ひゃい…」
「実際、彼女らが本気になったらあれじゃすまないけどね」
「　　」

厄が溜まったらきなさ〜い、と言いながらメリーゴーランドの数千倍の回転力で飛んでいった。
いや、もっとしとやかに飛んでくれ。リボンがヘリのローターみたいになってる。

「おだぃじにぃぃぃぃぃ（回転音響）」
「…三半規管はフィギュアスケーターレベルかそれ以上かだなありゃ」

幻想郷…侮れない。

さて、体力を回復してからでいいや。とりあえず神社に帰らないと。

飯の時間まで持たないや♪てへぺろ。

42．元々強い人よりキレたら強い人のほうが怖いです（後書き）

こぼれ話

早苗「……あー……あれ？」
大学「ん？どした？」
早苗「あくびしようと思ったのに出ませんでした」
大学「しらんがな」

43．タイムスリップは人々を混乱させます

「……やっぱ青いな……」

洗面所の鏡に立って自分の目をよく見る。
やはり奥の部分が青くなっている。
自分の目をよく見たことはないが、青くはなかったはずだ。

「妖怪化の影響か？いやもしかしたら……まぁいいか。失明しなきゃどうでもいい」

しゃこしゃこと歯を磨き、あ、これ神奈子さんのだった。洗っとこう。
さて気を取り直して、しゃこしゃこと歯を磨く。

「……も？」

カレンダーをめくって、今日の日付を確認する。

「……くはふはんひゅうひひは…（９月３０日か…）」

今月は何も起こらなかったなぁ…そういえば霊夢の修行っつーことは…
そろそろ第二次月面戦争が始まるころだ。
ここでは霊夢たちの軍勢が敗北するんだっけか…

「ペッ…月か……輝夜の居たところだよな…フォン・ブラウンとかあるのかな？」

ガンダムの世界じゃ月といえば月面都市とかマイクロウェーブとかドームとか色々ある。
まぁあれとこれとはまた別世界だろう。
大体そんな簡単に人が宇宙にいけるとでも思ってるのか。

「んでもって…ロケットを作るために外の世界の力を必要としてるから」

恐らく紫は俺の力を借りるだろうな。ロケット工学ならダチがよく話していた。
で、そのダチがリアルロケットを作ったんだっけな。まぁ失敗に終わったけど。

「サターン?…だっけ?あいつが元にした奴は…今時3段切り離し式か
古いねぇ…実に考えが古い。今の時代はもう宇宙ステーションの時代。
そんな古臭いロケットは……ん?誰だ…?」

朝早く、それもかなりの早朝だと言うのにドアを叩く音が聞こえた。
それに反応した俺はすぐに扉を開ける。

「ほいほい、どちら様でしょうか?」

扉を開けると、これまた不思議な帽子を被った立派な九尾を装備した女の人が立っていた。
そう、八雲紫の式神『八雲藍』メガネのバーローの世話役ではない。

「お初にお目にかかります。私は八雲紫様の式神を勤める、八雲藍と申します」
「セールスはお断りです」
扉を閉めようとするが、止められた。しかもかなり慌てた表情で。
「ま…まま待って下さい！！！話を聞かず閉めるなんてどこまで無礼なんですか！！！」
「人の事情も知らずセールス勧誘とはどこまで無礼なんですか」
「話を……聞いてください！！！」
まさかドアを蹴ってぶっ壊すとは思わなかった。
「はぁ…はぁ…」
「ったく…なんですかいな？とりあえず上がりたまえ」
「失礼します」
藍さんを家の中に入れ、本堂へ案内する。
本堂へ向かう途中、藍は終始俺の機嫌を気にしているように顔を覗き込む。
まぁそんな事を気にしても無駄だろうが。
「ここが本堂です。とりあえずまぁそこいらに座っといてくだせぇ。お茶でも持ってきやす」
「いや、そのままで。あなたもそこに座ってください」
「ん？ああ、はい」
俺も八雲さんの目の前に胡坐をかいて座る。
年上の女性相手に胡坐は恐らく無礼な行為だろう。
んなこたぁ気にすんじゃねぇ！！

「随分お掃除をなされているのですね？」
「まぁ、それが俺の債務ですからね…んで？」
「？」
「そんなお世辞を言うためにこっちに来たってわけじゃないっしょ？」

俺がニヤニヤしながら聞くと、藍さんはやれやれと頭を振った。

「そうですね、大学生君。ならば本題から言いましょう」
「そうしていただけるとありがたい」

俺のその台詞に、ほっとしたのか、藍さんは落ち着いた態度で俺に告げる。

そして、正座の状態から深々と頭を下げる。

そう、土下座だ。妖怪の中でも最高位に立つ者が土下座をしたのだ

「申し上げます。大学生。貴方の協力をいただきたい」
「ちょ…！！頭上げてください！俺は頭を下げられるようなナリじゃありませんよ！
大体俺はロケット工学なんかありませんし、月に恨みもないですよ！！」
「！？何故そのようなことを…？」
「あ……ああ、ああ、あああああ、うん。あれ、あれなんだ。つまり、あれだ」
「……？」
「図書館の歴史書を見たんです。過去に紫さんが月でおっぱじめたって」
「そうですか…」

まぁその辺は置いておこうか。

「で、まぁそれはそれとして。理由をお聞かせ願いたい」

俺がそういうと、藍さんは咳払いをして話し始める。

「貴方なら知っているはずです。外の世界で今どのようなことが起こっているのか。

外の世界と幻想郷の時はリンクしていますね？」

「まぁ…そりゃそうでしょ」

「しかしスキマは違う。その中ではたとえ三度目の衝撃…つまりサードインパクトが起ころうと

その中のアンチＡＴフィールドは干渉できない。無論時間の流れも干渉されませ…あれ」

「ＺＺＺｚｚｚ…」

「起きろ！！！」

「はい！！」

「……コン！では続けます。時間の流れはスキマの中では干渉することはない。

つまり、スキマの中では戻る時間によっての記憶の喪失は起こりません。

事実、エヴァンゲリオンの記憶を知る魔理沙と山の巫女。そして吸血鬼の住人たち。

第３新東京市に行ったことのある彼女らは記憶はあるでしょう？」

そういえばそうだな、あいつらだけはなぜか俺のシンジである姿を知っている。

最近フランはペットを飼ったらしいが…その辺は置いておこう。

「しかし、いくら記憶喪失が阻止できたとしても、根本的解決…つまり、
時間を戻している張本人の対処が出来ないと、永久に無限ループが続きます」

「張本人とは……まぁ多分お前らの言うことでは、渚カヲル。その辺りだろ」

渚カヲル。ゼーレによって作られた使徒。
アニメ版ではあっさり殺されたが、新劇場版になって再び登場。
その時は早くのうちから登場していたが…

「ご名答です。彼は今、絶望の歴史を変えるべく、
時を待っては戻し、待っては戻しの繰り返しです。

そのような大きな異変は、異変の被害者である博麗霊夢を持ってしても止められません。

前の歴史では、魔理沙と渚カヲルが決闘しました。しかし結果は魔理沙の惨敗。

そのとき目視できたATフィールド、それは余りにも強力なフィールドです。

弾幕はおろか、現代の最新の兵器、まして未来の兵器を用意しても勝てないでしょう。

だからATフィールドの対抗策、アンチATフィールドを使いこ

なせる、

貴方の力が必要なのです。引き受けて…」

「ＺＺＺｚｚｚ……」

「寝るな！！！！」

「ふぇ？あーいーよいーよ…わるいけどもうちっとねかして…」

「……」

赤い海

「偵察ご苦労様、前鬼より給料を3割り増しにするわね」

妖気を与え、再び鴉を飛ばす紫。

その後ろで、勤めを終えた藍が顔を現す

『紫様』
「お帰りなさい。どうだったかしら」
笑顔で迎える紫とは対照的に藍は、青筋を立てて、目を笑わせている。
「大学生は同じ話を２００回ほど繰り返した結果。何とか承諾しました…
吸血鬼もこの計画に賛同する模様です。前回と同じく、霧雨魔理沙も
渚カヲルのリベンジ、という理由で無理やり参加。
博麗霊夢も順調に稽古を続けている模様」
「それはご苦労様」
「赤い海ですか……始めのころとは随分と違いますね…」
「そうね……再び宇宙人が動き始めるわ」
「宇宙人？竹林に住むへんちくりんな奴らですか？」
「異変を感じ取ったのね。しかし私の味方にはもっとへんちくりんな奴がいるじゃない」
「あれはへんちくりんどころかアンポンタンですよ」
「容赦ないのね…」
「あんな輩に弾幕ごっこが出来るとは到底思いませんがね…」
「人は見かけによらないのよ……あの子でも可能よ、美しき幻想の戦い…」

「第二次月面戦争をね。欺かれて苦虫を噛むがいいわ…だい17使徒、タブリス」

月の都

「始まるね……そろそろ返してもらわないと、碇シンジ君を…」
「それでは、カヲル様、行って参ります」
「いってらっしゃい、とある兎さん」

カヲルもカヲルで、月の兎、後にレイセンと名づけられる玉兎を地球に送り込んだのだった。

43．タイムスリップは人々を混乱させます（後書き）

こぼれ話

魔理沙「さて……今日はこれくらいでおわりにするかなっと…
あ、そうだそうだ、洗濯物出しっぱなしだった」

ベランダ

魔理沙「おー綺麗な星空だ……あれ？何だありゃ…」
マ　リ「どいてどいてーーーー！！！」
魔理沙「ふぎゅぶっ！？」

４４．金銭管理はしっかりしましょう

「はぁ？」
「香霖堂で塗料を買ってたら……」
申し訳なさそうに神奈子さんが財布の中を見せる。
金運のお守りがこれでもかと言うほど吊るしてある財布だが、その金運とは対照的に
財布の中にはいっているのは平等院鳳凰堂が印刷された１０円玉一枚だ。
「……俺の目がおかしいのかな？諭吉さんは？英世さんは？外の世界の金までなくなるとは…」
「あの半人半妖は気前のいい人なんだ。外の世界のお金もつかわせ……て……？」
この音、ゴゴゴゴ……が似合うだろう。そんな目つきで俺は神奈子さんを見下ろす。
その手に持っているものは、竹刀……！圧倒的…！竹刀……！
「福沢を……返せ！！！」
その後、神奈子さんは廊下で２時間正座をする事となった。
畜生…またバイトか…。

「バイトねぇ……バイトバイトキロバイト…そこいらの酒屋でバイトってのもアリかな」

人でにぎわう人里。だが、中々求人と言うものは見当たらない。

慧音さんに頼むのもありだが、借りがあると言うかなんと言うか…。

探偵はどこぞの人里の嫁さんあたりが主犯者になりそうなので却下。

妖怪退治という仕事も選んだが、他から恨まれるのは御免なので却下。

「ふーむ……金儲けに特化した職種と言うものは中々見当たらんな…」

人里の人ごみにまぎれて求人板を見る。

文の新聞配達。

椛の天狗の里の警護。
咲夜の（地獄の）雑事手伝いなどの特徴的な仕事がたくさんある。

「さぁってと…一番報酬の高い仕事はっと……」

あごに手を当てて求人版をあさる。
霊夢などの著名人の求人もあれば、酒屋のおっちゃんなどの一般人からの求人もある。
リスクを承知の上でやる仕事は、まぁもちろん咲夜さんの雑事だ。
だが、金稼ぐのに自分の命奪われちゃ世話はない。

「だ…とするとだな…」

二番目に報酬の高い仕事は、犬走椛の天狗の里の警護だ。
これ関しては問題なさそうだ。里の侵入者は追い返せばいいんだろう？
なら簡単だ。

「こいつの面接にでも行くかね」
「お？アンタ天狗の里に警護に行くのか？」

俺が紙を取ろうとしたとたん、一人の俺と同い年くらいの男が俺に声をかけた。

「お？ああ、そうだが」
「おお、なんという偶然だ。俺も同じく犬走さんのところに面接に行くんだよ」
「へぇ～物好きな人もいるんだな」

悪い人ではなさそうだ。しかし、武器が日本刀一本か。

「失礼ながら弾幕の経験は？」
「ミスティア・ローレライ一匹。これが俺の最高の収穫かな。アンタは？」
「博麗霊夢を２回ほど」
「へ～すご……なんだとおおおおおおおおおおおお！？」

その青年「しつれいしましたー！」と求人紙を放り投げて逃げて行ったのであった。
何故かドヤ顔したくなった。いいよね？こんなに有名になったんだから。

「さて、行きますか。アホ神の尻拭いのために」

妖怪の山、某所

男なら答えよう！！道に迷った！！！
そう！！妖怪の山は予想以上に広いのである！！
何故毎日家に帰れるのか！！そう！！そこだけおぼえているのであぁる！！！

「しかもコースを外れたら普通は天狗がやってくるが……」

何故か……来ない……。
そう、来ないのだ。誰一人……。

「夕方までは時間があるはず…だったら文の一人や二人「私は一人よ」おお…メシアよ…」

呆れ顔かつ面倒くさそうな顔で俺を見る一人の天狗。その名は射命丸文。
今回は営業スマイルでもなく、あたしゃ天狗だよフェイスである。

「椛が探してるからって見に来たらこんなところで何を遊んでるのかしら？」
「俺が遊んでるように見えるか？」
「ええ、もちろん道に迷っていることくらいは承知の上よ」
「なら助けたまえ、私は忙しいんだ」

「その言葉は目にたまっている涙をぬぐってから言いなさい」
「（ゴシゴシ）なら助けたまえ、私は忙しいんだ」
「哀れね「ナノ符…月光蝶」ごめんなさい調子に乗りすぎていまし（ジュッ」

そして、また俺は一人になった。

「とりあえず残骸を回収して上空から里を探そう」

砂レベルになった射命丸をペットボトルにつめて上空から天狗の里を探した。

と言うかさっさと上空に上がればよかったんだ。

「あった」

普通の森より色の濃い場所。そこが多分天狗の里だろう。

直感に身を任せて降りた。

「珍しく当たった」

すたりと降りたその場所は、たくさん天狗の居る里、天狗の里である。

待ち合わせ場所である大木の下には、辺りを見回した白髪の女性…ふむ中々マロい尻だ。

「椛さん、遅くなって住みませんでした」

「あ、きてくれたんです…か…」

予想外の訪問者だったのか、突然驚いた態度で俺を見る。

「ん？俺の顔に爆発物でも発見しましたか？」

「どこの神社も…金欠状態なんですね…」

「オイ今の溜息について説明しろ」

「お初にお目にかかりますね、文さんから話は聞いているかもしれませんけど。

ボク、犬走椛と言います。繰り返します、犬走椛です」

いや、繰り返さなくていい。

「大学生だ。向こうの神社に住み込んでいる」
「貴方が……ん?そのつぼ?ビン?何が入っているんですか?」
椛さんが俺のペットボトルをつつきながらたずねる。
俺はそれを包み隠さずお答えする。
「射命丸だが」
「……ごめんなさい、こういうとき、どんな顔をすればいいか分からないんです」
「とりあえずボトルから出すよ」
「はぁ…一体どういう意味か…」
俺が射命砂を地面に落とすと、一瞬のうちに射命丸が生まれた。
「うー……死ぬかと思った……」
「え…えええええええええええええええええ!?」
椛の常識が崩れ落ちた瞬間であった。

45．アルバイトは気をつけて選びましょう

「そ…それでは、これから。「あるばいと」の内容を説明しますね。
まずは面接です。履歴書を私に見せてください」

俺は事前に用意した履歴書を出し、椛に提出する。
渡した履歴書は、ほぼ白紙同然。唯一つ書かれているものは
名前、居住地、種族。それだけだ。

「名前…大学生。居住地、守矢神社…種族、妖怪……これだけですか？」

何か不満でもあるのか、少し困った顔をする椛。

「何が不満でも？」
「ええ…少し、確かに大学生さんの事は文さんからよく聞いていますし、
実力も何度か拝見しています。しかし……」

再び椛が履歴書を見て、切り株に座る。
そして軽く面接をする、と伝えて、俺をその場で座らせる。

「趣味はなんですか？」

まぁオーソドックスな質問だこと。

「ないっすね、今を生きることが趣味です」
「…わかりました。それでは、何故貴方はこの職種を選んだのですか？」

「純粋に金欠だからです。八坂神奈子と言ううちの親代わりの神の金銭浪費によるものです」
「あ…それは……まぁ……ええ…分かりました（この人に何聞いても無駄な気がする…）」
「それだけっすか？」
「ええ、面接といってもよく分かりませんし、実力で示してもらいます。
ちょっと待っててくださいね…」

椛が立ち上がって、一軒の小屋の中に入る、ＢＵＫＩＫＯと書いてある。
その中でガチャンドカンと何かを探すような音が聞こえる。
あ、爆発音。大丈夫なのかここの椛。

「あーありましたありました。はいこれ、刀」

ＢＵＫＩＫＯから一本の刀が飛んできた。しかも鞘なしの刀身むき出しの状態で。

「ん？（グサッ」
「やっとみつかり……あれ？大学生さんイメチェンしました？」
「刺さってるね、現実逃避やめようか。刺さってるね。見事に、おでこに」
「ええ、刺さってます」

やれやれ、と刀を抜いた。

「あーあ…支給用の刀汚しちゃって…」
「誰の手によって汚されたか分かっているのか？」
「貴方です」

「おめーだよ！」

駄目だこの雇い主……文より年下なのに文よりボケてる。
まぁいい、とりあえず仕事だ。ニートは御免だ。

「まぁとりあえず血濡れの大学生さんはさておき」

さておくな。

「今回の仕事について軽く説明しますね」
「ああ、頼みます」
「今回の仕事は、山の警護。これは分かりますね？」
「うん」
「ならいいです。私は5合目より上あたりの警護をしますので。
大学生さんは5合目より下の警護をお願いします」

なるほど、半分半分に分かれて警護するんだな。
確かにこれだと効率…よくないな。

「ちょっと待ってくださいな。他の天狗はどこへ行ったんだ？
さっきも迷って参拝コースを外れたんだが、来たのは文だけだった。
なんかあるのか？」

あまりの天狗の少なさに全俺が驚愕している。
というか参拝コースの人の少なさに守矢組は泣いている。

「あ…気付いちゃいましたか……」
「気付くわ。仮にもここに住んでるんだ。ホレ、答えろ、抹茶アイスあげるから」

「抹茶!?……いえいえ!これでも私は貴方の上官!物にはつられません!」
「そうか?１０月の抹茶アイスは秋の味覚の一つとして重宝されてるんだぞ?」
「でも私は!天狗の仕官だー!!」
「それは一人前の女が言うことだぁぁ!!」

と言うわけで抹茶アイスを二人でいただいてから仕事を始めた。

「で?結局なんで今日は人数が少ないんだ?」
「冥界への天狗旅行です。私と文さんは寝坊して置いて行かれました」
「……」

里、中腹辺り

「さて……どこから見張ろうかな」

ここは天狗の里の中心部。
普段はここは早苗の天狗たちの交流場所ともなる場所だ。
唯一人間のある程度の出入りが可能となっている場所でもある。
そうでもしないと頻繁に里に出る射命丸とは違っい、
里の中で仕事をしている天狗たちが稼げないのだろう。

「ま、結局余り人気がないのには変わりないだろうけど…」

しかしそんな街屋でも今回ばかりは閉鎖されている。
本当に誰も居なくなるんだな。どんだけ統制の取れた里だよ。

「ふ～ん…随分静かなんだな…早苗が気に入るわけだ」

ひとの足によって踏まれた枯葉を見る。
やはり、普通の里の人間もたくさん居たようだな。

「物好きも多いものだ。そうだな、しばらくここで大人しく『うわあああ！！』！」

山の下方で悲鳴が聞こえた。それに反射するように俺も山を降りる。
自分で言うのもなんだが、かなりのスピードで降下した。
救助活動も警護の一環よ！！

「待ってな！！！いや、今更行った所でどうにもならないか……いやいや希望は捨てちゃ駄目だ」

もし死んでたら、まぁ俺には関係ないや。

天狗の里、入り口付近

「く…！この妖怪…中々強い！！」

「ごめんなさい……ボクがよわいせいで…お姉ちゃんまで…」

「いいから早くあなたは逃げなさい！！」

少年の背中を押し、一人の少女は巨大な妖怪と向き合う。

妖怪にも亜種と呼ばれるものが居る。少女が向き合うその真っ白

な毛に包まれた妖怪は、
人喰い妖怪、大百足、それも猛毒の毛を持つ亜種である。

「気まぐれで妖怪の山に来たら…こんなことになるとは思わなかったわ…」

その子を助けた少女の名は、アリス・マーガトロイド。
普段は魔法の森に住まう魔理沙と同様、魔法使いだ。
彼女は、守矢神社へ少し用があり、そこへ向かう予定だった。
しかし登山中に、一人の少年が、大百足に襲われているのを見て、助けたのだ。
その結果、現在のような結果に至る。

「……喋れない、しかも聞く耳を持たない…当然ね、虫なんだから」

今のアリスには、人形を動かすことは出来ない。
ハードボイルドが方目を奪われると調子が出ないのと同じ。
アリスは右腕を毒によって動かせなくなっている。
不慣れな左腕で動かすことは可能だが、亜種の毒雲相手では、全く話にならない。

「お姉ちゃん!!前!!」
「!!…逃げ…?」

そのような緊迫した空気の中、先ほどアリスたちが駆け下りたところに何かが転がってきた。
転がっているわけではない。転がり落ちているようだ。
そして転がり落ちた結果、その物体は枯葉のベッドにダイブした。

「何あれ……」

『ウゴァアアアア！！！ガアアアア！！！』

まぁそんなバカに気を取られた隙にアリスの隣にムカデが通ったことなど、
そのような詮無きこと知る由もなかったわけで…

「うわあああああああああああああああああああ！！！！！」

「！？―駄目！！！！！」

アリスの周りに飛んでいた人形が一気に爆発する。
爆風で少年は、そのまま人里の方向に飛ばされ、妖怪が入ることが出来ない結界の中に入った。
逆にアリスは、爆心地に居たため、体中に火傷を負い、
意識を保つのがやっとの状態になってしまった。

「う……う……」

『ギャオァアアアア！！！シーーー！！！シャーーー！！！』

「……ここまで…ね……」

自分の血にまみれた体を見て、意識を手放そうとしたその瞬間。

『そこの満身創痍の姉さん。ちょっと前失礼します』

「……！？」

『おはこんばんちは百足さん。突然ですが貴方は刀の錆となっていただきます』

「だ…め…」

『きこえなーいきこえなーい』

『ギギャアアアアアアア！！！！！！！』

当然挑発に乗ったムカデは、声の主に噛みつかんばかりに、頭を声の主に下ろす。

「逃げて！！！」

『ほいやっ』

声の主は逃げなかった。それどころか、その噛み付きを、耐えたのだ。

八角形の結界によって、そしてその結界は、魔道書の最後のページに記載されている

天使の持つ結界と表記される結界だった。

『口轡～』

『ギガッ！？』

「結…界…？」

『そいっ』

ムカデの目の前に立ち、その声の主は、剣を振り下ろした。

しかし硬すぎたのか、切れなかった。と言うわけで彼は、百足を結界で押しつぶしたのであった。

「……山の神社の…妖怪……」

自分の無事と少年の無事に安心したのか、アリスはそのまま意識を手放した。

45．アルバイトは気をつけて選びましょう（後書き）

こぼれ話

一方そのころ神社では

神奈子「ふーんふーんふん……パワードジムパワードジム～♪」

46．助けた人は人並みに看病するのが人としての勤めです

「ふぅ、なんだ。亜種の百足は危険だとかけーねが言ってたが、案外大したことないんだな。
……さてさて？アリス氏。大丈夫かね？」

思い切り刃が欠けた刀を腰にしまって、倒れているアリスに声をかける。
そういえば昨日、英語で書かれた手紙が神社に届いてた。
早苗は英語が苦手だから読めない。アホ神２人組みは英語とは無縁の生活をしていた。
英語成績４、そしてドイツ語専攻の俺にしか外国語を読むことは不可能だ。

で、その内容は、『明日、神社にうかがいます。大学生氏の能力に興味がありますので、ご在宅ください』
だと。俺に興味があるとはどういうことだ？

「……」

へんじがない　ただの　しかばねのようだ

「って…こりゃまずいぞ…」

倒れているアリスを背負い、治療するために水辺に向かう。
俺にゃ永琳みたいなチートレベルの医療能力もなければ、諏訪子さんみたいな治癒力もない。
ましてや最近噂になっている人里の医者のような欠陥を直す医療も出来やしない。

「まぁ、何とかなるでしょ」
「シャンハーイ？」
「そう、シャンハーイなんだ」

……上海？

「……上海」
「シャンハーイ」
「上海か。おお上海や、上海な」
「シャンハーイ、シャンハイ、シャンハイ」

……俺の見間違いではないようだ。
上海人形が俺の隣で飛んでいる。
つまりアリスはまだ生きているのか。
人形を動かすほどの魔力がまだ残っているってことだろう。

「上海」
「？」
「アリスの様態はどうですか？」

上海人形に若干の自立能力があることは分かる。
自立と言うより使い魔だ。たくさん居るのにもかかわらず一体だけを使い魔としている。
つまり俺の隣に居る上海人形が他の人形より余程高性能な人形なんだろう。

「……」

上海が無表情で俺をつつく。

「お?どうだった?」

俺も走りながら上海に耳を傾ける。

「イキテル。デモアブナイヨー、ハヤクイケ」

「あ…さいですか」

案外普通に喋れるそうだ。アリスが定期的に命令すれば自立人形みたいになるそうだが、

今はその命令期間の一環か?と言う事は恐らく後半日は動くかね。

まぁとりあえず、アリスの状態が危ないってことは変わりないだろうよ。

「急がねぇと」

「イソゲーイソゲー」

「いでででで、髪を引っ張るでない」

しかし、見事なまでに血まみれだな……顔が無事なのがかなーり気がかりなんだが。

まぁ…ゲームだからいいか(禁句)

「と言うわけで大学生の3分ヒーリング！（ＢＧＭ　キューピーのあれ）」

まず、とりあえず上着を剥ぎ取ります。

「ここで、大切なことは、スカートから剥ぎ取ってはいけません。上着から剥ぎ取りましょう。

ボタンを外すときは、上のボタンではなく、下のボタンから。いいですね？

紳士的に。そう、紳士なのです。僕は……変態と言う名の…碇シンシです！！！」

とまぁ、８割本気の冗談は置いといてだ。

ふむ…絶景である。実に絶景である。っといかんいかん。俺は今治療中だ。

「さて……治癒と行きますかね……静まれ俺のＧＮサーベル。今はそのときじゃない」

と、とりあえず……うん。そうだ。まずは……

「し…心臓の鼓動を調べようじゃないか……えーあー…うん。治療なんだ」

手が震えている。とたんに静かになる空気。

聞こえる滝の音。そして、静かに聞こえる心臓の鼓動。

「……シャンハーイ？」

不思議そうな顔で俺を覗き込む上海人形。
静止している空気。そして無防備な格好で寝ているアリス。
とは対照して硬直している紳士。

「ま…まて……落ち着け……このままだと俺がアリスを強姦したみたいになる……」

そうだ、俺はアリスを治療するためにこの川まで連れてきたんだ。
とりあえず傷口を洗おう。そうだ、そうしよう。

辺りを見回すと、にとりの作業小屋っぽい場所が見えた。
そこのゴミ捨て場某宇宙エンジニア用のプラズマカッターと鉄の板、
そしてフレームスロワーを引っ張り出す。

「何でこんなものが幻想郷にあるんだろうな…まぁいいや」

ズドンズドンとカッターで鉄ちょうどいい大きさに切り、
フレームスロワー、つまり火炎放射で鉄を曲げる。
加熱した鉄の容器を蹴飛ばして川に放り込み、チルノを投げる。
鉄は瞬間冷却した。

「よし、バケツ完成」

チルノとバケツを引っ張り出してアリスのところへ行く。
何故かびっちゃびちゃのチルノもついてきた。

「何すんのさ大学生！！いきなりあたいを突き落として！」
「俺のログには何も無い。ほれ、詫びの印だ。プラズマカッター。宇宙の産物だぜ」
「おお！うちゅーぱわーがねむってるのか！」
「少なくとも使い方を誤ればどんなバケモノもバラバラになるぞ」
「それはすごい！すごすぎる！あたいもこれを使えたらどんな妖怪でもバラバラにできるわね！」
「ま…まぁそうだろうよ…」

今、チルノの攻撃力が４０００上がったような気がする……。

「ぷらずまかったーかったー♪」

バケツというとても安全で使い勝手のいいものを持っている俺の隣で
プラズマカッターという恐ろしく物騒なものを片手に持ったチルノが飛んでいる。
幻想郷の秋はそれなりに暖かいので、暑がりの俺には中々の冷房…ってこれ去年も言ってたような気がする。

「そういえば大学生はなんでこんなところに居るの？」
「ああ、アリスが大怪我してな。ちょいと治療がてらにバケツを作ってたんだ」
「アリス？ってあの人形使いの？」
「それ以外誰が居るんだ？」

まぁその辺はいいとしよう。
とりあえず俺は適当にチルノと雑談しながらアリスの所へ戻った。

「さて…治療再開としま…す」

俺の目に映ったのは、下着姿で川に足をつけているアリスの姿だった。
傷口がまだ塞がっていないせいか、随分と苦しそうな表情だが。

「えっと…意識が戻ったんだな」
「え？なにこれ、どういうことなの大学生？」
「意識が戻ったそうだ。男の子は見ちゃいけない光景だなこれは」

これを見たらあまりよろしくないような気がする。
とりあえず。目をそらして、アリスに声をかけよう。
願わくば服を着てもらおう。だが、これより先はチルノの教育上良く無いな。

「チルノ、お前は待っとけ、荒療治になる可能性がある」
「あらりょーじ？」
「あれだ、妖精が見たら死ぬ」
「ほんと！？それは怖い！」

ぴゅーんと飛んで、草陰に隠れたチルノ。
無垢だな！かわいいな畜生！

「……何？」

「あ…あの……怪我の治療のために…こっちに来たのだが……まずかったか？」
「いいえ、まぁ…服がボロボロだから…仕方のないことね」
「それは……うむ、あの爆発で無事な服があったら見てみたいな。ほれ、こっち向け」
「あなたも向かないと治療が出来ないわよ」
「覗き、ダメ、ゼッタイ」

と、言いたいところだが…治療するには絶対にこっちを見なきゃいけない。
くそ…現実め。現実などやめてやる。

「しっかしまぁ……男の前で下着姿見せるたぁ……羞恥心というものは無いのか？」

自分の服の袖を千切ってアリスの傷口を拭く。
何、命救ったって言えば早苗も許してくれるだろう。

「あら？脱がせたのはあなたでしょう？」
「まぁ…そうだが」
「それに、私はあなたに用があってこっちに来たのよ」

関係ねぇだろ。

「そうか、で？どんな用だったかね？」
「……？」
「……どした？」
「……」

数分後

「……うーん…えーと…」

どうやら爆発の衝撃で数時間前の記憶がぶっ飛んで行ったそうだ。

「ま…まぁ…とりあえず服でも直しとけ。生憎俺は仕事があるんだ」

「そ…そうね、そうするわ」

なんという爆発力…さすがアリス。色々汚い。

「じゃな～今度改めて来いよ。俺からも歓迎するぜ～（下着姿、脳内保存完了）」

「ええ、また」

半日後

「とりあえず、今日はこのくらいだろ。太陽も沈んだし。
夜はみすちーが店開いてるところ以外は誰も来ねぇだろ」

飲み屋の席を破壊するような無粋な真似をする妖怪は居ない。
幻想郷の妖怪たちは空気の読める妖怪なのだ。多分。

「さて、椛の方も終わってるだろう」

山頂付近に向かって飛んだ俺。

が見た光景は、……予想外な光景だった。

「文しゃーん……むにゃ…そんなに…らめぇ……んぁぁ…ＺＺｚＺ」
「……」
尻尾を枕代わりにして幸せそうに眠っている椛だった。
「死んでもらおうか！！！！」
「きゃい～～～ん！！？」

46．助けた人は人並みに看病するのが人としての勤めです（後書き）

こぼれ話

に「……プラズマカッターが……アイザックさんに貰ったのに…」

太陽の畑

チ「待て待て～（ズドン！ズドン！」

幽「なんで……私が！！妖精風情に！！」

47．月面侵略も計画的に行いましょう

「はぁ…ったく」
「本当に悪かったって…ね？許して」
「だぁ～めだ。お前さんはこっちの苦労を分かっちゃいない」

金の面は何とかなり、今は自重した神奈子さんと共に神社の掃除をしている。
いや、神奈子さんが掃除している。もとい神奈子さんに掃除させている。

え？俺？俺は屋根に座ってその神様の様子を見ているだけですが何か。

「大体パワードジムのＨＧくらい外の世界で買えるだろうに」
「ハイグレードは向こうで買うと量産のせいか少し造りが荒いんだよ。
だから森の半怪が見よう見まねで作ったキットの方がうまく出来てるの」
「ふーん……そんなもんかねぇ…」
「な…大学生。お前はハイグレードのありがたみが分かっていないね？」
「俺はマスターグレード派だ」

あの作り上げるときの苦労、そして完成したときの喜び。
このなんとも言えない喜びを分かち合うことの出来る人間は少なくないだろう。
プラモを愛するものならば誰だって手を出すマスターグレード。
ふふ…思い出しただけでまた作りたくなってしまった…

いかんいかん！これでは神奈子さんと同じだ！

「で、そのパワードジムのお値段は？」

「言わないでください」

「人には言えないお値段か……今後お前は買い物禁止な。約束破ったらお前のしめ縄引っこ抜く」

「それはやめて！！」

どうやら神奈子にとってしめ縄とは自分の命と同等レベルらしい。

この間神奈子のしめ縄を触ったらオンバシラが雨のように降ってきた。

なんだろう、しめ縄って性感帯なのか？

「嫌ならちゃんと掃除したまえ」

「はい…」

「よし、いい子だ」

ハタから見りゃ神を屈服させた覇者だろう。

こんな光景を見せる家族など居るはずがない。

やれやれ、と空を見上げていると、上空に接近する天狗一名確認。

その天狗は瞬時に俺の隣に着地した。

「おはようございます！今日も清く正しい新聞記者！射命丸文です！」

その射命丸。俺の隣に座って突然手帳を開き始めたのだ。

「今日はどうされましたか？いつもとは真逆の関係ですか？」

「まぁそうだな、こういうのもまたよろしいものだろう？」

射命丸が「ふーん」と相槌をうち、神奈子さんの方を見る。

「しかし…あの軍神を屈服させるとは…大学生さぁん…かなりの技量ですね？」

これにやけながら俺の額に手帳を当てるな。

どこでそんな言葉を覚えた射命丸。

「そういう意味じゃねぇ。何勝手に俺を変態にのし上げてるんだお前は」

「変態じゃないですか」

「俺は変態だとしてもただの変態じゃない。変態と言う名の紳士だ」

「は…はぁ…変態は否定しないんですね、あ」

射命丸が思い出したように、携帯している鞄の中から一枚の紙を取り出した。

「そうでした。大学生さん宛ての手紙を預かってたんでした！はいこれ、この文字は暗号ですか？」

俺に手渡したのは、達筆な英語で書かれた手紙だった。

英語で『大学生へ』と書かれている。送り主は…レミリア・スカーレットか

「解読してくださいよ」

「こういうのは翻訳って言うんだえーっと何々…ってこれ日本語じゃねぇか」

咲夜さんが書いたのか。最近流行の宛先英語手紙か。またややこ

しい…

＊

『拝啓、昔日の強豪が一敗して屍を晒す秋の世となりました
一抹の草履取りが立身出世して大将となるこの幻想郷で、
大学生様はいかがお過ごしになっていますか？
さて、この度は大学生様にお願いが会ってこの手紙を執筆しました。
つい先日の話です。
スキマ妖怪の式神が大学生様のご自宅に来られたことを覚えていらっしゃるでしょう。
そのことのご相談のために、外来人である大学生様に紅魔館へのご来訪、
そして、２０年と言う妖怪の中では極端に短き人生の中でも、
数多い知識の一部を提供して頂く様お願いするためにこの手紙を執筆いたしました。
大学生様のご決断、そして紅魔館へのご来訪を心よりお待ちしております。

十六夜
咲夜』

＊

「……成程…」
「どんな内容でしたか？吸血鬼が元人間である大学生さんを必要と

するとは珍しいですね」
「とりあえず来いだとさ。ったく…めんどくせぇ」
首をボキボキと曲げながら手紙を丸め、神奈子さんに投げつける。
とりあえず、頼まれたからには行かなきゃいけないよな。
「月面戦争…」
「？」
「向こうさん、月に行きたいとかほざいてやがってよ。それを俺に手伝えだと」
「それは……幻想郷を巻き込むことかしら…」
戦争、と言う言葉に射命丸は息を呑んで、記者口調を忘れる。
「ちげーよ。月面だから幻想郷は関係ねぇ。どっちかと言うとネタになるかもよ」
「本当ですか！！」
「ま、盗撮する気なら俺は喜んで分解するけどな」
「むぅ…意地悪」
と、他愛もない話をした後、俺は紅魔館に向かって飛んだ。
神社から紅魔館までさほど距離がないんだから直接伝えろよ。

紅魔館

「く～…く～…「美鈴」ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！」

紅魔館の門番がプログナイフで火花を散らしながら悲鳴を上げていたが気にしない。

さて、そろそろ咲夜が来るころだろう。と、待っていると案の定目の前に咲夜さんが現れた。

瞬間移動するのはいいが心臓に悪い。

「ようこそ、紅魔館へ。歓迎しますわ」

「そりゃどうも。で？用たぁなんだい？」

「手紙で伝えたはずですが」

「悪い。捨てた」

俺の無礼極まりない行為に、頭に怒りマークをつける咲夜だった。

「それでは内容は覚えていらっしゃいますか？」

「お前らのところに来い、技術を教えろ」

「……だいたいあってます。それではこちらへ……あら？大学生さん？」

忽然と居なくなった大学生。その無礼極まりないどころか無礼でしかない行動に

「やはり…放した犬は躾け直さないといけないようね…」

ナイフを握力で砕く咲夜だった。

紅魔館　レミリア・スカーレットの部屋

「―ですから、貴方のような強力な妖怪なら…めぼしいものも簡単に見つけてくれるかと思いまして」

少々不敵に微笑んだ式神、八雲藍。

そしてそれと同じように不敵に微笑む吸血鬼、レミリア・スカーレット、
の隣にたって半目でそれを見ている人妖、大学生。

「俺が強力な妖怪だぁ？つーか俺はお前に協力を了解したはずだぞ」
「いえ…貴方じゃなくて、吸血鬼の方」

「ふーん……面白そうな話じゃない」
「月の都には幻想郷にない珍しいものや技術がたくさんあるのです。
それを盗み出して妖怪の技術に生かしたいのです」

ふむふむ、技術力アップか。

「紫様は停滞してしまった幻想郷の妖怪の生活向上を目指しているのですよ」
「……それって何？それって河童や山の天狗に負けたくないって事？馬鹿みたい
大学生もそう思うでしょ？」

俺に振るな。

「ん～まぁな、俺らみたいな企業戦士ガンダムになって何が楽しいっての？」
「（がんだむ？）確かに大学生さんの住む外の世界には、科学力に技術力がありますが」
「ま、あんなハードワークしてりゃオッサンは禿げ、オバサンは廃り、人は腐るわな」
「そう、精神面では本当に惨めと言えるほど廃れています」
「だが…月はそうじゃないんだよな俺らの世界とだいぶ違う」

先読みするように俺が呟く。

「外の世界と違う？」

レミリアが不思議そうな顔で俺を見る。
その質問に藍さんは優しげに微笑んで答える

「ええ、今のように毎日遊びながら無限のエネルギーを得られるような技術なのです」

「そういやゆかりんは随分前に月に殴りこんだんだよな？」

「ああ、その話なら聞いたことがあるわ。たしか月の民にコテンパンにされただとか…」

ああ、そういえばそうだった。そんな裏設定があったようななかったような…
まぁどちらにせよ

「なんで今更そんな計画を持ちかけてくるのかしら？」

「何で今更そんな計画を？」

「あのころに比べ、妖怪の数が増えたからです、皆が協力するのなら、今度は負けないでしょう」

「で、俺ら見たいな上位妖怪ならば簡単にいいモノを発見できると思ったから俺らを頼ったと」

「そうです。……そしてその計画は……」

――紫様が今年の冬、湖に映る幻の月と、空に浮かぶ本物の月の境界を弄り――

――月からお前らが飛び込めるようにする…とな？――

――そう、あなた方には紫様が結界を見張っている間に、都に忍び込んで欲しいのです――

――へぇ…面白そうじゃない――

帰り道

「知っているかと思われますが、月には大学生さん、あなたを狙う刺客が待ち構えています。
大学生…いいえ、碇君である貴方を狙う人物…分かりますね？」

半月の月を背に、藍さんが語り始める。刺客…あいつか。

「ああ…」

「渚カヲル…彼を知る人物は幻想郷には数人しか居ない。
記憶のないあなたにはわからないでしょうが…」

「数人、お前と…ゆかりんと…そんくらいか」

俺が呟くと、藍さんは目を閉じて話す。

「いいえ…タイムループの際スキマに居た、霧雨魔理沙、東風谷早

苗…そして……」
「あいつらもか…」

ゆっくりと、藍さんが目を開く。

「この数回、ループを続ける世界の中、ただ一人流れに飲まれない人物……」

「博麗霊夢も、渚カヲルを知っています」

「あっそ」

「え？もっと驚いてくださいよ」

だってこういうの知ってるのって大体主人公だろ？予測できたよ。

47．月面侵略も計画的に行いましょう（後書き）

こぼれ話。

大学生「ん?…こんなところに屋台なんてあったのか…
すんませ～ん…」

大学生が入った屋台の名は『喰いものや』。
そこで大学生が出会う人物は…

次郎　「お、いらっしゃい。って…お前さんは守矢神社の…」
大学生「俺をご存知で?」

次郎、その名を次郎と言う。
能力を持つ人間2人の描く、熱きストーリーとは…

マチュ「なんて書くとでも思ったか!!
俺にシリアスは無理だっての!!
次回!番外編!『東方おとぎ草子　ｉｎ大学生』
タイトルも仮だ!!」

※　ちゃんと許可を取っています。
ナナツボシ氏に感謝です!

４８．番外編です、本編とはあまり関係ないことを祈りたい（前書き）

ナナツボシ氏の了解を経て…なんとクロスオーバーしちゃいました！
東方おとぎ草子、の次郎さんです！…色々やっちまった感があるけど

それでもおｋ！って人は俺がガンダムだ！
と叫んでから読んでください！

48．番外編です、本編とはあまり関係ないことを祈りたい

「ほう、夜の人里とはこういうものか」

ふくろうが鳴き、飲み屋がにぎわう人里。
そんな街を歩いている俺。男なら誰だって夜の街に繰り出したくなるはずだ。
どうやら早苗も神奈子さんも諏訪子さんもそういったことには苦手らしく
何をするわけでもなくさっさと帰ってしまったのだ。
どうやら今回は彼女らは出前の気分らしい。

「そうだな……最近鶏肉とか喰ってないからな…まぁスズメさんの抗議もあるからだが…」

スズメさんことミスティア・ローレライは、焼き鳥屋が大嫌いらしい。
というかスズメに鶏肉見せる＝死体を見せるって事なんだろう。

「そーだなー…お？なんだなんだ…」

霊夢の特徴的な服が一番奥の屋台で見えた。
しかもその手には、一本の焼き鳥が見える。
焼き鳥…ヤキトリ…ＹＡＫＩＴＯＲＩ！！！

「このたれの匂い…まさしく愛だ！！！！」

人里の東端に位置する飯屋『喰いものや』に突撃と言う名のスタイリッシュ入店を果たした。

「わたしわねぇ～博麗の巫女なのよぉ～……聞いてんのかオヤジぃ…」
「黙れ不良巫女、いいからツケ払えってんだ、ほら、熱燗」
「うぃ～…おやっさんだいしゅき～…」

キセルを吸いながら、少し不機嫌層ながらも仕方なさそうに微笑む店主。
その店主の名は『次郎』彼はこの『喰いものや』の店主であり、そして幻想郷の中の理解者でもある。
今日も彼は屋台を開き、妖怪、人間、妖精問わず、食事や酒を振舞っている。

「オイ霊夢、何でお前屋台に居るんだ?巫女の仕事はどうしたよ」

そんな中、また一人、客がのれんをくぐった。

彼の名は『大学生』幻想郷に1年前に住まいだした人間、いや、人妖だ。
彼は守矢神社に住まう、神主の見習いである。
しかし、そんな人物であるにもかかわらず、神主服を着たことは数えるほどしかない。

「いらっしゃい、何を出そうかね？」
「あ、じゃあ焼き鳥で……店主さん、霊夢は毎日ここに？」
「はいよ…ああ、この不良巫女か、一応常連の一人だな」
「へぇ…意外な一面もあるんですな」

大学生は飲んだくれて寝ている霊夢の頬をつんつんとつつく。
焼き鳥を焼きながら、次郎は少し、記憶を遡らせる。

「……守矢神社の神主か……」

次郎にも、その人物の事は耳にしていた。

「『喰いものや』か…」

随分といい店だな。なんというか、昔なつかしって感じがする。
なんだろうな、どこかのドラマで見るような屋台だ。でも広い。
そこがいいんだよなぁ…

「ほら、焼き鳥お待ち」
「ありがとうごぜぇやす」

俺は店主さんの作った焼き鳥をほおばる。
その味は、口でとろけるような味で、たれと肉の味が見事にマッチしていた。

「美味し！実に美味しである！！」
「そうか、そいつぁよかったな、ほれ不良巫女、さっさと起きろ。
今日もツケにしやるから今日は帰りな」

吸うかけつ振りの焼き鳥をこなた顔で食べていると、
いつの間にか店主さんは霊夢を家に帰していた。
そして店主さんは再びキッチンにつく。

「どうだ？美味いだろ」
「ええ、とても！」
「ははっ、ならうまいと素直に言ってくれたお前さんには焼酎をサービスだ」
「おお！兄ちゃん太っ腹だねぇ！」
「そうか？お前さん、名前は？」

「大学生です！」
「大学生か、俺は次郎ってんだ。以後よろしくな」

次郎さんか…。次郎さんねぇ…うん、圧倒的な次郎さんって顔してるもん。

「一郎さんは？」
「いねぇよ！！」
「三郎さんは？」
「いねぇっての！！次郎だ次郎！！」

なんだ…この手の名前をつけるなら親の名付ける名前は一郎から始まるだろうが。
全く…最近の親というものは教育がなっとらん！

「まぁいいっす。はぁ……」
「ん？どうした？」
「いやね……うちの神様がとんでもねぇ穀潰しでさぁ…」
「神…と言えば八坂神奈子とか守矢諏訪子とかか？あいつらがどうしたってんだ？」

神様を冒涜するのはどうかと思うぞ、と次郎さんが呟くが、俺からしちゃ、プラモで穀潰しする神様をどうフォローすればいいんだと思う。

その上俺には、まだ厄介者を2人抱えている。
目立たないが、諏訪子さんも諏訪子さんでかなり面倒な奴だ。
事あるごとにチルノと喧嘩して服を引き裂いて戻ってくる。
あの服は再生も何もしないただの服だ。
それに諏訪子さんはこの服しか着ない。とだだをこねる。

チルノと喧嘩するたびにあの服をいちいち縫い直すのだ。
面倒なことこの上ない。

早苗も早苗だ。信仰のためなら手段を選ばず、
生き別れたと主張する碇シンジに再開するなら
奇跡を起こして結界をぶっ壊す覚悟の持ち主だ。

そして穀潰しの神奈子さんというトドメだ。
正直言ってストレスがたまる。

「穀潰し、無茶女、駄々こねロリ娘……俺は…生きる道を間違えたのか……」
「ま…まぁ…人間誰だって間違いがあるもんだ…ほら、飲みな」

酒を渡し、次郎さんはキセルを吸う。

「うう……ありがとうごぜぇやす…こいつぁ今回の感情でぅ…」

酒を一気飲みして、俺は店から出た。

「おう、また来いよ、大学の」

店じまい後、次郎は大学生が払った勘定を見た。

「ひぃ…ふぅ…みぃ……3円!!!??」

アルミ製の小銭、3枚だった。

49．探し物ほど面倒で難しいものはありません

「や…やめてとめてやめてとめて…のぶぁあああ?!」

朝、何か殺されるような夢を見て、俺は目覚めた。
なんだろう…すごく焼かれたような気がする…。
この感じ…藤原妹紅？いやいや…そんなわけがない。そんなはずはない。

「まぁ…いいや。さて…と…」

グキグキと目覚めの悪い体を奮い立たせ、神社の参道に立つ。
朝のスズメがちんちんとうるさくなく。
紅葉の季節だなぁ…紅葉か…紅葉ねぇ…

「そーだなぁ……冬までに宇宙船の完成か…んな夢物語出来るのかねぇ…」

まぁ、俺は協力する気なんざさらさらない。逆に俺はゆかりん側につく。
八雲紫の月面侵攻計画。レミリアと共に囮になるなんざまっぴら御免被る。
と言うか、誰かの手の平の上で踊っているって言うのが気に入らない。
渚カヲルだかアスラン・ヅラか知らんが、その手の平から脱走するのが先だ。

「気にいらねぇ気にいらねぇ。大体そんな訳のわからん計画で俺らを弄ぶゆかりんも気に入らん」

『あら？不満かしら？』
「うわぇ！？何だお前か」

スキマの名からババーンと現れたスキマ妖怪、八雲紫。
いい加減冬眠しろＢＢＡ。

「ふふ、調子はどうかしら？」
「んな事言われましても…まぁ上々って所だな」
「そうかしら？」
「住めば都。どんな所でも慣れれば問題ないって事よ」

俺だって1年もこんなバケモノ8割人間2割の世界に放り込まれたら流石に慣れるわ。

「それなら良かったわ。向こうに帰る願望はないのかしら？」
「第3新東京市か？」
「現実の世界に」

紫のその言葉に、俺は肩を震わせ、うつむきながら答えた。

「ねぇっす」
「どうして？家族に会いたくないの？」
「いや、会うもクソも…1年も顔合わせなきゃ流石に向こうも忘れてるだろうよ」
「ないないそれはない、どこまで情が浅いのよあなたの家族」

いや、純粋にビッチにクソガキ、クソ教師漏れなく勢ぞろいなカオス大学に帰るのが嫌なだけだ。
オリ主は大体昔が恵まれてたから帰りたいって願望があるけど俺はその逆だ。

「サークル以外は地獄だったあの大学…まぁうちのクラスは比較的オタッキーだったな」
「ならいいじゃない」
「他のクラスはリア充の巣窟だが」
「…ねぇ、リア充って何かしら」
「憎むべき存在、殺さなければいけない集団、力があれば潰す存在…」
「分かったわ、あなたの意思はわかったからその物騒な赤い槍をしまいなさい。
どうやって作ったのよそれ」

簡単だアンチＡＴフィールドを大量に重ねて作る。以上だ。
これを以後。神槍『ダミー・ロンギヌス』と呼ぶことにしよう。
スペカにメモっとこ。

「オリジナルはでかすぎるかんな。うん。なかなかいいネーミングセンス」

殺戮の精神に満ちていたオーラが一気に冷めたのを感じ取った紫が思ったことは一つ。
予想以上にめんどくさい奴だ、と言う事だった。

数分後、紫帰宅。

「さて……ＢＢ…ゆかりんも行った事だしな。今日は何をしようか…」

債務である月面計画の資料もないし、香霖堂に行くのは面倒だ。人里でそんな資料があったら逆に見たい。と言うと……情報源となるのは…

「早苗…は駄目だ。ＭＳとかＭＡとかＡＣとか現実味のかけらもないことほざきそうな予感がする」

じゃあ他に誰が居る？最悪原作通り住吉氏を使うことになるが…

「にとり…かな。いや、それはゆかりんやレミリアが許可しない」

確か紫は河童に負けず劣らずの技術を欲しているはず。なら河童には頼めないな。

レミリアもそれなりにやる気だ。そこで河童を連れてきちゃまずい。

「ふむ…なら外の世界の人を連れてくるか…誰が居るかな……」

次郎さんは忙しそうだし…なんかあの人あれだ。工学知識は乏しそうだからなぁ…

いや…人は見かけによらないと言うが……うーむ……

「よし！男は度胸！何でも試してみるってモンよ！！」

ふわりと飛んで、とりあえず次郎氏を探しに人里へ向かった。

一方そのころ次郎は

「キノコ…キノコ……ん？」

キノコを探しに守矢神社付近を探索していた。

普段は魔法の森でキノコを刈るのだが、今回は文の情報で守矢神社に向かってみた。らしい。

別に妹紅から逃げているわけではないそうだ。

「ありゃ大学生か…何を急いでんだ？」

夕方　霧の湖

「結局居なかったな…どこいったんだろう次郎氏」

探すのをあきらめ、霧の湖で夕涼みをしている。
霧が今日はあまり出ていなく、中々綺麗な夕日だ。
どこに太陽があるのかはいまいちピンと来ないが。

「あ、大学生だ」
「ん？チルノか、どうしたんだ？」

エプロンと恐らくｍｙ包丁だろう。そんな所の物を携帯している

チルノが俺の元に飛んできた。

「……チルノって料理好きだったのか？」

「うん！あたい料理大好き！」

ふむ…投げ飯はあまり好きじゃなさそうだな。

「へぇ、意外だな。自分の分くらいしか作らないと思ったが」

「しつれーね！あたいだってトクギくらいはあるの！」

「ほう、アホに包丁持たせる超絶ドアホがいるんだなぁこの世には…まぁいいや。俺は行くぜ」

一体どういう教育をしてるんだ最近の幻想郷の住民は。

常識にとらわれなくてもいいが、最低限の秩序は守って欲しいものだね全く！

「さて……森にでも行くか」

俺は消去法として香霖堂を目指して森へ向かって足を運んだ。

夜中

「うー☆随分暗くなっちまったなぁ……もう香霖堂はしまって…ない」

へぇ…もう2時ごろかと思ったんだが…結構長い時間運営してるのね。

結構営業熱心と言うかなんというか…。

「これは中々いい雰囲気かぁ？」

オラワクワクすっぞ！と言わんばかりに香霖堂の扉を壊した。

「森近霖之助いるかゴルァ！！！！！」

「ひぃぃ！？なんだ君は！？」

「店主！下がりなさい！！……って大学生じゃない」

いつも思うのだが、何で咲夜さんの近接武器は赤いカッターナイフなんだ？

なんだろうか…刀身が鈍く赤くなっているような…まぁ気のせいだろう。

「おやおや、これは珍しい、咲夜さんが香霖堂に来るとはね」

「こちらこそこんなところで会うなんて奇遇ね、どうかしたのかしら」
「いや、まぁ技術提供するならそれなりの知識が必要だろ？」
「成る程ね、でももうあなたは必要ないかもしれないわよ？」

咲夜さんが一冊の雑誌を手にしている。
サターンⅤ型ロケット…ずいぶん古い本だな…

「んな情報操作で一杯の古臭い雑誌に何が載ってるっての？」
「！」

霖之助、そして咲夜さんも同時に目を丸くした。

「どういうことだい？」
「気になるわね」

俺の言葉に信用性がなくなったそのサターンⅤに関する本はゆかに捨てられた。
同時に、霖之助は俺にロケットに関する本をありったけ持ってきた。

「なるほど…一番信用性の高い機体は…スペースシャトルだな」
「「すぺーすしゃとる？」」

俺は宇宙船に関することについて書かれたを取り出す。
この頃はシャトルに関する情報がほぼ全て公開されている本があった。

「確かに外装ではサターンⅤのような機構で問題はない。だがお前ら、一つ見落としているだろ」

「？」
「推進力だよ。推進力。宇宙から地球までの距離はおよそ４００００ｋｍ。
つまり、お前が時を止めてつきに言ったとしても歩いていくなら４～１０年以上はかかるって事だ」
「よ…４年……」
「射命丸でも3～9年はかかる」

それに宇宙には大気がない。まずそんなところに人間を持っていくこと自体が不可能だ。

「つまり…どうしろと言うとだな…とりあえずロケットを飛ばす推進力が必要ってことだ。
外装もちゃんとしないと空気漏れで人間は漏れなく死亡。外に出たら例え生きてたとしても
生身だと太陽に焼かれて死ぬ」
「そんな…お嬢様じゃないのですから……」
「大体大気がなかったらどんな奴でも死ぬけどな。レミリアも首絞められたら苦しむだろ？」
「ええ」
「じゃあ死ぬわ」

咲夜は、もう宇宙に行くのをやめようかと思った。
しかしやることはやる。結局シャトルの本と、サターンⅤの雑誌を霖之助のところで買った。

俺は何もせず帰った。試作品のミニ八卦炉を盗んで。

49．探し物ほど面倒で難しいものはありません（後書き）

こぼれ話

小悪魔「……（ぷにぷに）」
パチェ「……むきゅ…（ぷにぷに）」
大学生「……」

レミリア「きょ…今日は仕方なく呼んであげたのよ！！
　感謝しなさい次郎！」
咲夜　「お嬢様に感謝したほうがいいですよ、次郎さん」
次郎　「……阿呆が…全く…」

双方紅魔館組に好かれているのであった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8321w/

目が覚めたら東方の世界にいた

2011年11月22日02時00分発行